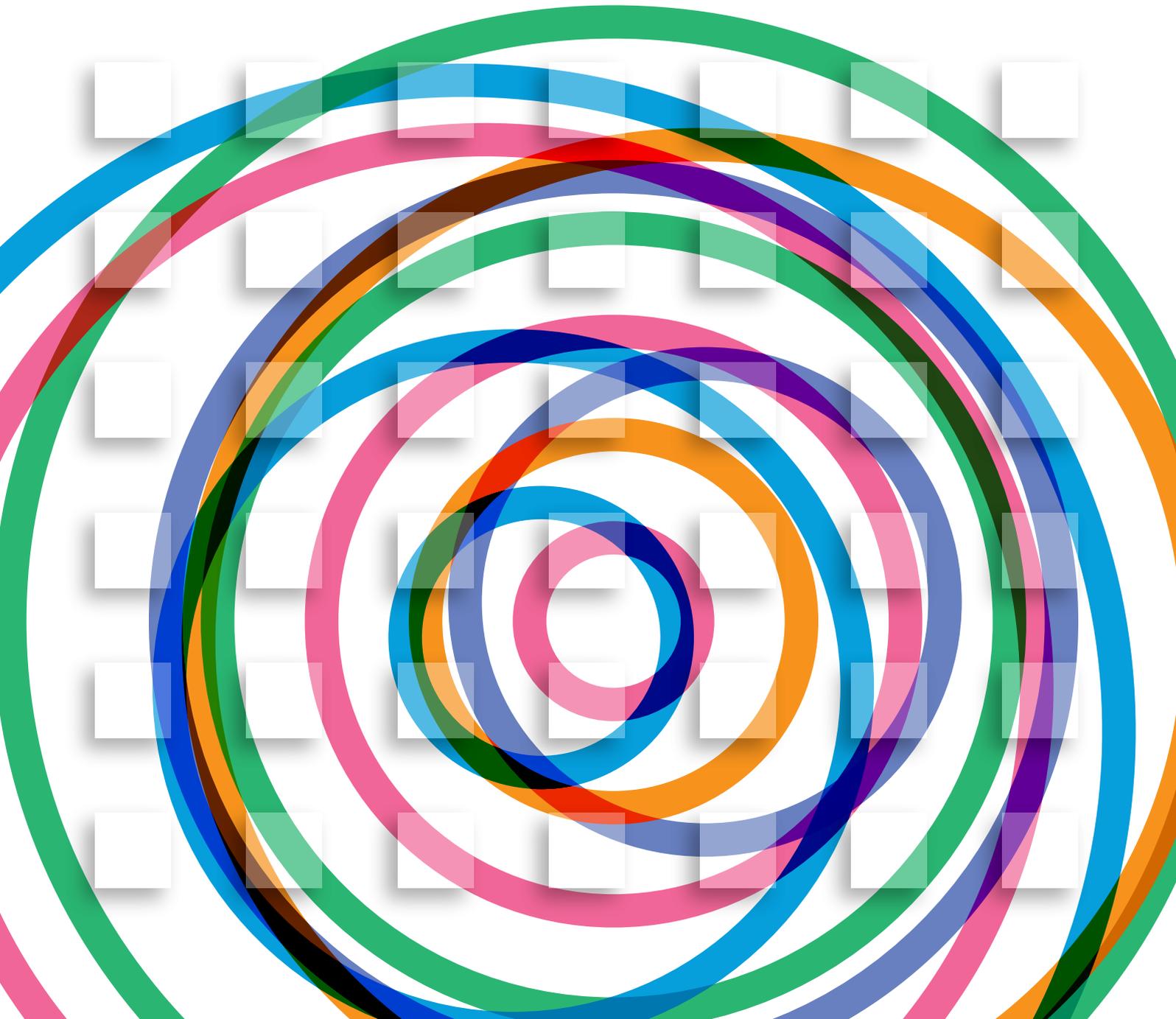


高大接続に関する調査

ベネッセ教育総合研究所では、2013年11月~12月に、全国の高等学校長および大学の学科長を対象に調査を実施しました。

本調査では、大学入学者選抜や入学前教育・リメディアル教育・初年次教育などの移行期の教育活動の実態や課題、今後の入学者選抜や高校教育・大学教育・高大接続のあり方に関する意識などをたずねています。

ベネッセ教育総合研究所



●本調査について

本調査は、全国の高等学校長および大学の学科長を対象にして、大学入学者選抜や入学前教育・リメディアル教育・初年次教育などの移行期の教育活動の実態や課題、今後の入学者選抜や高校教育・大学教育・高大接続のあり方に関する意識などをたずねています。

現在、国では、大学入試制度改革を中心として、高校から大学にかけて、これからの時代にふさわしい教育にいかに変えていくのか、そのために望ましい高校と大学の接続のあり方はどうあるべきかが議論されています。本調査は、このような今後の高大接続のあり方を検討する基礎データとして、結果を公表し、高校・大学現場をはじめ、社会に還元することを目的としています。

●調査概要

調査テーマ	高大接続の実態・課題をとらえる
調査方法	郵送法による質問紙調査
調査対象	<ul style="list-style-type: none"> ・全国の高等学校の校長 *全国の全日制高等学校(中等教育学校を含む)のリストより、無作為に学校を抽出 ・全国の大学の学科長 *ベネッセコーポレーションが所有する進研模試の全国の学部・学科リストを利用し、その全てに配布。 ただし大学院大学、放送大学、通信制のみの大学、社会人が主な対象である学部・学科等を除いている。
有効回答数	高校1,228名(配布数2,500通、回収率49.1%) 大学2,012名(配布数5,060通、回収率39.8%)
調査時期	2013年11月～12月

目次

調査概要	2	IV. 移行期の教育活動～入学前教育・リメディアル教育・初年次教育～	
回答者の基本属性	3	◆サマリー	28
I. 入学者の学力・能力		4-1. 入学前教育の実施状況	29
◆サマリー	4	4-2. 入学前教育のねらい	30
1-1. 大学入学者の学力・学習状況	5	4-3. 入学前教育を実施している科目	31
1-2. 大学で課題に感じていること	6	4-4. 入学前教育の実施状況	32
1-3. 大学で必要な入学者レディネス	7	4-5. 入学前教育の課題	32
1-4. 高校での学力・能力の育成状況		4-6. 入学前教育の高校からの評価	33
①全体	8	4-7. リメディアル教育の実施状況	34
②とくに力を入れていること	9	4-8. 初年次教育の実施状況	36
II. 大学入試		V. 高校と大学の連携や接続のあり方	
◆サマリー	10	◆サマリー	38
2-1. 入学者選抜の実施状況	11	5-1. 高大連携活動の実施状況	39
2-2. 進路選択・入試における課題	12	5-2. 高校と大学の交流	40
2-3. 教科の必要度と入試での受験割合	14	5-3. 高大接続の取り組みに関する課題	41
2-4. 現在の入試で把握できていること	16	5-4. 高校と大学の接続に関する今後のあり方	42
2-5. 現行の入学者選抜の評価と今後の意向	17	5-5. 高校・大学間の教育内容・方法の一貫性について	43
2-6. 受験させたい入試方法	18	5-6. 基礎学力不足に対する大学での指導について	44
2-7. 今後の入試のあり方	19	5-7. 大学での学びと将来展望について	45
2-8. 入試における教科学力のウェイト	20	5-8. 大学入試や高校・大学の改革に対する賛否	46
2-9. 多面的な評価について	21		
III. 高校での教育活動			
◆サマリー	22		
3-1. 新学習指導要領実施後の変化	23		
3-2. 高校での新しい学力の育成	24		
3-3. 進路別のコース分けの実態と影響	25		
3-4. 早期合格者に対する高校での取り組み	26		
3-5. 高校教育の役割	27		

回答者の基本属性

高校

設置者		国立	都道府県立	市区町村立	私立	その他	合計
	件数	7	896	47	277	1	1,228
	%	0.6	73.0	3.8	22.6	0.1	100.0

学科		普通科	総合学科	専門学科	合計
	件数	908	85	235	1,228
	%	73.9	6.9	19.1	100.0

※ここで「学科」とは、設置学科のうちもっとも募集定員が多い学科を指す。
 ※普通科には、理数、外国語を含む。専門学科には、工業、商業のほか、農業、水産、看護等を含む。

大学進学率 普通科の四年制		81%以上	61~80%	31~60%	30%以下	無答・不明	合計
	件数	135	263	242	253	15	908
	%	14.9	29.0	26.7	27.9	1.7	100.0

※四年制大学進学率は、本調査の「昨年度の進路別の人数割合(現役生のみ)」をたずねた質問に対する回答に基づいている。

学校所在地		北海道	東北	関東	中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄	合計
	件数	91	145	299	247	144	144	158	1,228
	%	7.4	11.8	24.3	20.1	11.7	11.7	12.9	100.0

注) 中部: 新潟、富山、石川、福井、山梨、長野、岐阜、静岡、愛知 近畿: 三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山

大学

設置者		国立	公立	私立	合計
	件数	440	162	1,410	2,012
	%	21.9	8.1	70.1	100.0

学科系統		人文科学	社会科学	教育	理工	農水産	医・薬・保健	その他	無答・不明	合計
	件数	298	394	109	493	112	343	242	21	2,012
	%	14.8	19.6	5.4	24.5	5.6	17.0	12.0	1.0	100.0

区分	調査票で示した学科系統
人文科学	人文系統(文学、心理学、文化学など)、外国語系統(外国語学部など)
社会科学	社会学系統(社会学部、社会福祉学部など)、法学系統(法学、政治学、政治経済学など)、経済学系統(経済、経営、商学部、流通学など)、国際学系統(国際関係学、国際情報学など)
教育	教育学系統(学校教育学、教員養成など)
理工	理学系統(理学部、生命科学、地球環境など)
農水産	農学・水産学系統(農、水産、生物資源、獣医、酪農など)
医・薬・保健	保健衛生系統(保健、保健医療、看護、看護医療など)、医学、歯学、薬学系統
その他	生活科学系統(家政、食物栄養、人間発達、保育など)、芸術系統(造形、音楽など)、総合科学(総合科学、教育、環境情報など)

学校所在地		北海道	東北	関東	中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄	合計
	件数	90	124	708	347	353	206	184	2,012
	%	4.5	6.2	35.2	17.2	17.5	10.2	9.1	100.0

本調査結果を読む際の留意点

- ・本調査結果で使用している百分比(%)は、有効回答数のうち、その設問に該当する回答者を母数として算出し、小数点第2位以下を四捨五入して表示した。四捨五入の結果、数値の和が100にならない場合がある。
- ・各図表内の()内の値はサンプル数を表す。

入学者の学力・能力

大学学科長の約7割が学力低下・学力差を問題視している。

大学入学者の基礎・基本的な学力・学習の状況についてたずねると、特に「高校の教育課程で身につけるべき教科・科目の知識・理解が不足している学生」「文章を書く基本的スキルが身につけていない学生」「基本的な学習習慣が身につけていない学生」が「半分以上」との認識を示した大学が3割台（私立では概ね4割）に上った（図1-1）。一方高校側でも、4年制大学に進学する予定の3年生の中に「半分以上いる」とする比率は3割台であり、大学側と概ね同様の認識である（図1-2）。こうした状況は、今日の大学教育に少なからぬ影響を及ぼしている。「以前より学生の学力が低くなったこと」が問題になっているかを問うた設問では、学科長の実に7割以上が「問題になっている」（「かなり問題になっている」＋「まあ問題になっている」の合計値）と回答しているのは何よりの証左であろう（図1-3）。

また、学力水準の低下とともに指摘されているのが学力格差である。「学生間の学力差が大きく、授業がしづらい」に対して学科長の67.8%が「問題になっている」と回答している事実は特筆すべき状況だろう。1990年代以降、独自の学力入試にセンター入試、推薦入試、AO入試を加え、大学は入試の仕組みを多様化させてきた。目的は多様な資質・能力を持った学生の獲得であるが、結果としてそれは、入学者の「学力の多様化」を招くこととなった。このような過去を省りみた時、今後入試の多様性をどの程度まで許容するのか。これは大学生に対する教育の質と効率性を担保する観点から大学入試改革のあり方を考える一つの視点である。

大学で必要とする力は思考力・判断力。高校で力を入れるのは基本的学習習慣と社会性の涵養。

次に、大学では大学での学びに必要なレディネスの過不足の状況をどのように捉え、高校側ではどの程度力を入れて育成しているのか。まず大学側の認識を見ると、入試難易度により特徴がみられる*。入試難易度の高い大学群では、論理的に考える力や根拠に基づいて判断する力、物事を多面的に捉える力などは「かなりの程度必要である」とする比率に対して「備わっている」とする比率は相対的に低い。同様の傾向は自分の考えを文章を用いて表現する力、考えを伝えあったり議論する力等においても見られる。こうした大学側の認識に対して、高校側での育成はどのような状況なのか。特に力を入れて取り組んでいるのは、「基本的な学習習慣」の他、「社会の規範やルールにしたがって行動する力」「人と協力しながら物事を進める力」といった社会的な態度・能力の育成である（図1-5）。

また大学では「与えられた課題だけでなく主体的に学ぶ力」については、入試難易度の高低にかかわらず「かなりの程度必要である」より「備わっている」比率が低い。すなわち主体的に学ぶ態度の育成は今日の大学生全体の課題といえるが、難易度が低い大学ほどより重要な意味を持つようだ。一方高校側でその育成に「かなり力を入れている」のは26%程度である（図1-5）。高校大学の教育的接続が課題とされる今日、思考力・判断力等、大学で「かなり必要」とされた諸能力に対する、高校内での育成の優先順位は必ずしも高くない。その課題の内実は、学生の学力の違いによっても異なる。こうした現状を踏まえながら、妥当性・実効性のある議論をすべきだろう。

（ベネッセ教育総合研究所 主任研究員 樋口 健）

* 報告書中に図示はしていない。

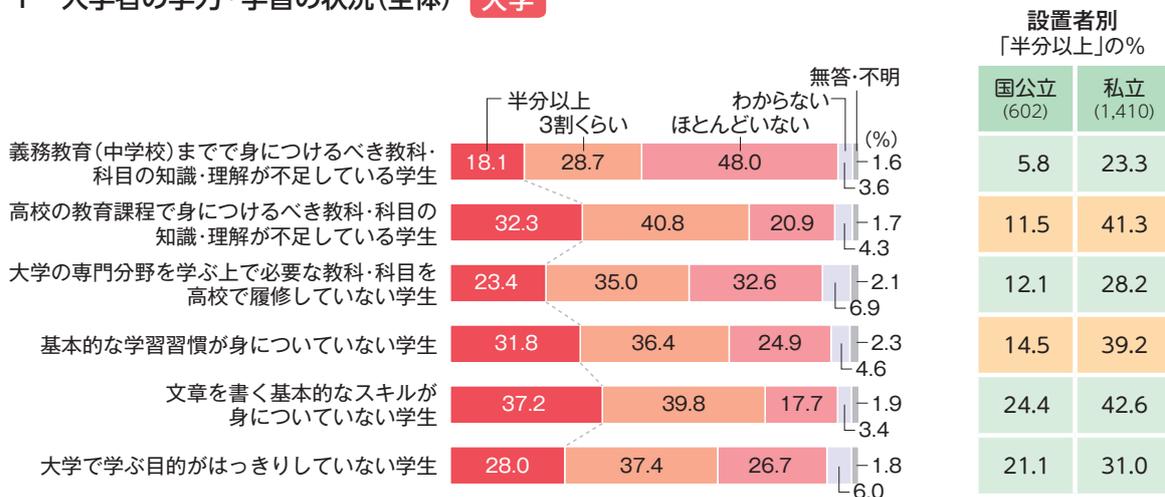
1-1. 大学入学者の学力・学習状況

高校の教科・科目の知識・理解が不足している学生が半数以上いる大学(学科)が3割。

入学者の学力や学習状況に関する項目について、1年生の中に該当者がどの程度いるのかを大学にたずねたところ、「義務教育(中学校)までで身につけるべき教科・科目の知識・理解が不足している学生」が「半分以上」いる(「半分くらい」+「7割くらい」+「ほとんど全員」、以下同)と回答したのは18.1%であった(図1-1)。一方、高校にも同様に、四年制大学に進学予定の3年生についてたずねたところ、「義務教育(中学校)までの知識・理解が不足している生徒」が、進学予定者の「半分以上」と回答した高校が32.3%であった(図1-2)。さらに、大学には「高校の教育課程で身につけるべき教科・科目の知識・理解が不足している学生」についてもたずねているが、「半分以上」いる学科の割合は32.3%であった。これを設置者別にみると「国公立」11.5%に対し「私立」では41.3%と大きな違いがみられる。また、「文章を書く基本的なスキルが身につけていない学生(生徒)」が「半分以上」いる割合は高校・大学ともに37%と高くなっている。

Q 貴学科の1年生についてお聞きします。貴学科の今年度の1年生で、次のような学生はどれくらいいますか。

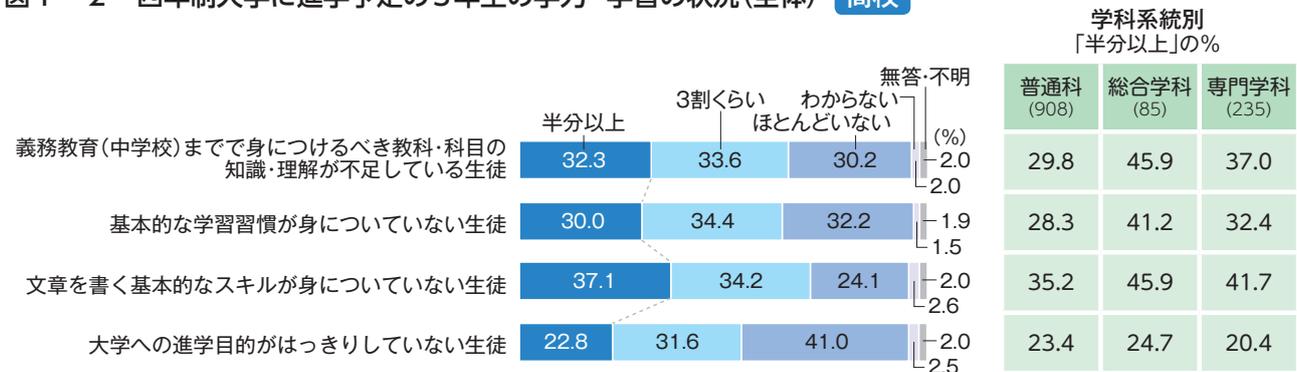
図1-1 入学者の学力・学習の状況(全体) **大学**



注1) 「半分以上」の割合は、「ほとんど全員」「7割くらい」「半分くらい」の合計の値。図1-2も同じ。
注2) 設置者別の表の は、20ポイント以上の差があるものを表す。

Q 貴校から四年制大学に進学する予定の生徒(3年生)についてうかがいます。進学予定の3年生の中で、次のような生徒はどれくらいいますか。

図1-2 四年制大学に進学予定の3年生の学力・学習の状況(全体) **高校**



1-2. 大学で課題に感じていること

実施している入試方法が多いほど、「学生間の学力差が大きく、授業がしづらい」と感じている。

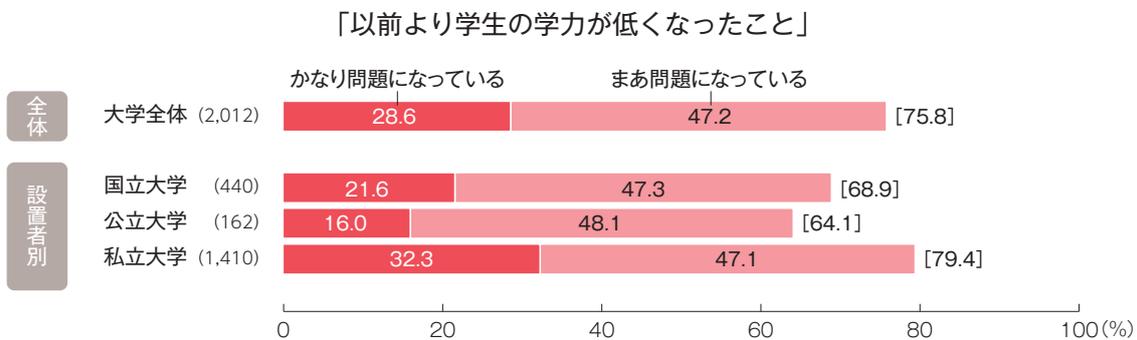
大学の授業を通して、「以前より学生の学力が低くなったこと」が「問題になっている」(「かなり問題になっている」+「まあ問題になっている」、以下同)との回答が全体で75.8%と7割以上が問題に感じている。一方、「学生間の学力差が大きく、授業がしづらいこと」は全体で67.8%で、国公立大学が40%台にとどまるのに対し、私立大学は77.4%と顕著に高い。また、実施している入試方法の数別にもクロスをしたところ、入試方法の数が多くなるほど「問題になっている」割合が高くなるのがわかる。

Q

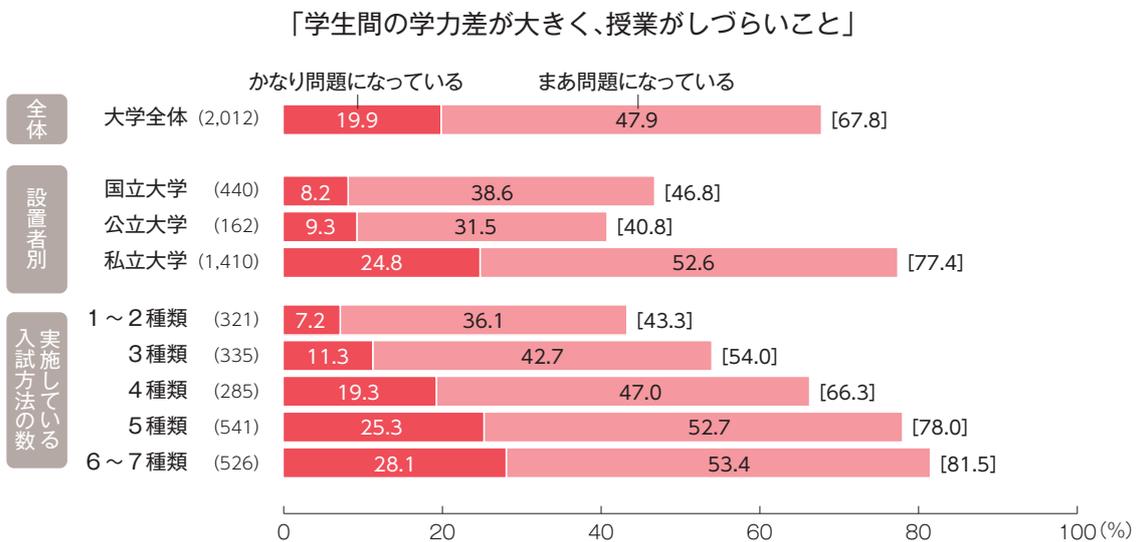
貴学科では、授業において、次のようなことが問題になっていますか。

図1-3 入学者の学力・学習に関する意識(全体・設置者別)

大学



注1) 選択肢は、「かなり問題になっている」「まあ問題になっている」「あまり問題になっていない」「まったく問題になっていない」の4段階。下図も同じ。
注2) []内の値は、「かなり問題になっている」+「まあ問題になっている」の%。下図も同じ。



注) 「実施している入試方法の数」は、実施している入学者選抜方法をたずねた質問(p11の図2-1参照)で、「一般入試」「センター利用入試」「指定校推薦入試」「一般推薦入試」「AO入試」「附属高校推薦」「その他」の7項目の中から選択した合計の数。

1-3. 大学で必要な入学者レディネス

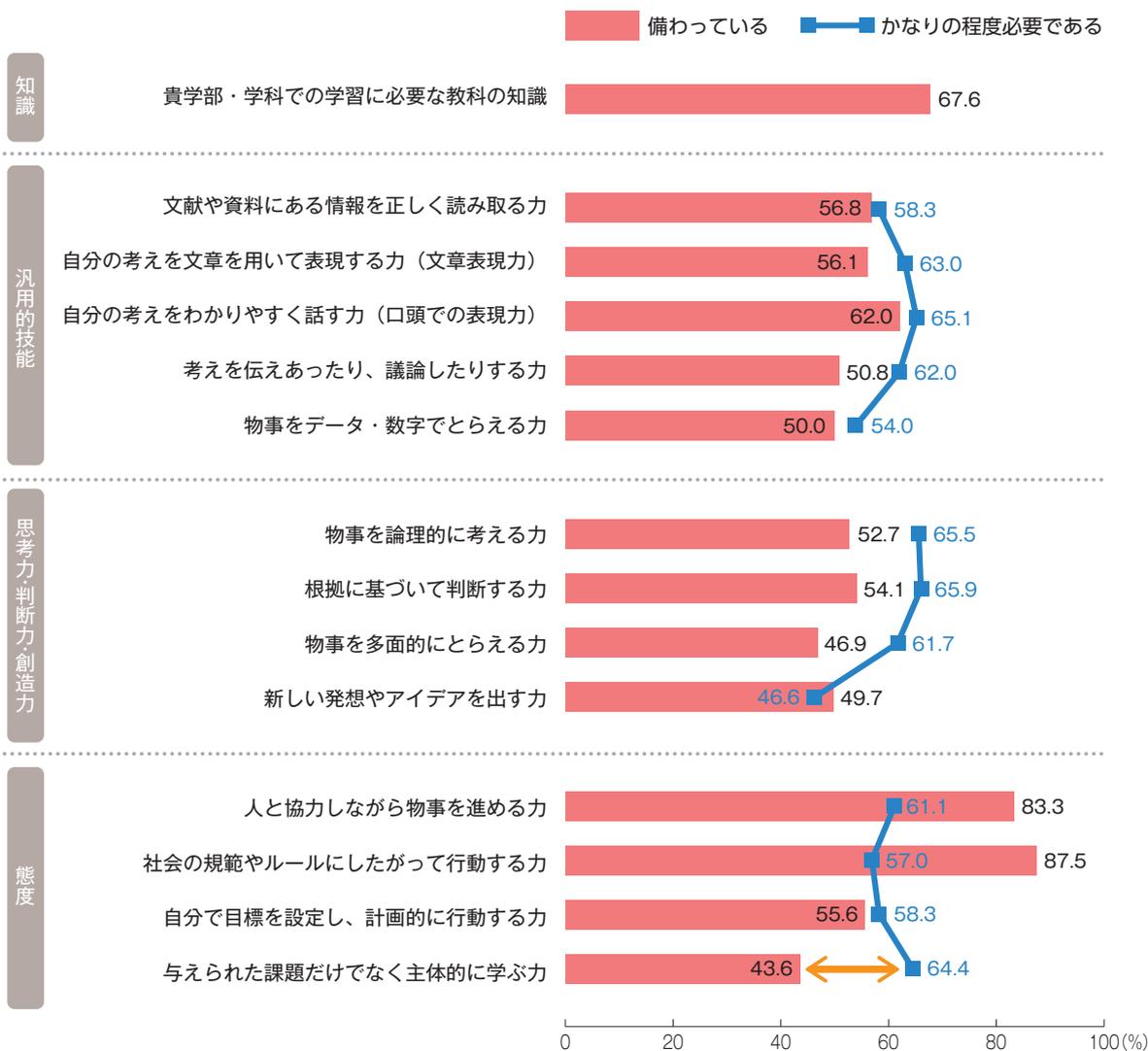
「主体的に学ぶ力」は大学での必要度に対して、入学者に身につけている割合は低い。

大学は、入学レディネスとしてどのような能力をどの程度必要とし、それがどのくらい学生に備わっていると感じているのか、「知識」「汎用的技能」「思考力・判断力・創造力」「態度」に関する14項目についてたずねた。

まず、必要度について、「かなりの程度必要である」との回答割合が高い項目が、「根拠に基づいて判断する力」65.9%、「物事を論理的に考える力」65.5%、「自分の考えをわかりやすく話す力（口頭での表現力）」65.1%、「与えられた課題だけでなく主体的に学ぶ力」64.4%である。一方、身につけ度合いが高いのは、「社会の規範やルールにしたがって行動する力」87.5%、「人と協力しながら物事を進める力」83.3%で、8割を超えている。これらのギャップをみると、「与えられた課題だけでなく主体的に学ぶ力」が必要度64.4%に対し、身につけ度合いが43.6%と、最もギャップが大きくなっている。

Q 貴学科に入学する学生の学力・能力についてお聞きます。
 (1) 次のような学力・能力は、学生が貴学科で学ぶ上でどの程度必要だと考えますか。
 (2) 実際に、貴学科の入学者には(1)の水準に対してどの程度それらの学力・能力が備わっていると思いますか。

図1-4 入学者の学力・能力の必要度合いと身につけ度合い(全体) **大学**



注1) 「備わっている」は、「十分備わっている」+「ある程度備わっている」の%。
 注2) 「貴学部・学科での学習に必要な教科の知識」については、必要度をたずねていない。
 注3) ⇔は必要度に対して、備わっている割合が20ポイント以上少ないもの。

1-4. 高校での学力・能力の育成状況 ①全体

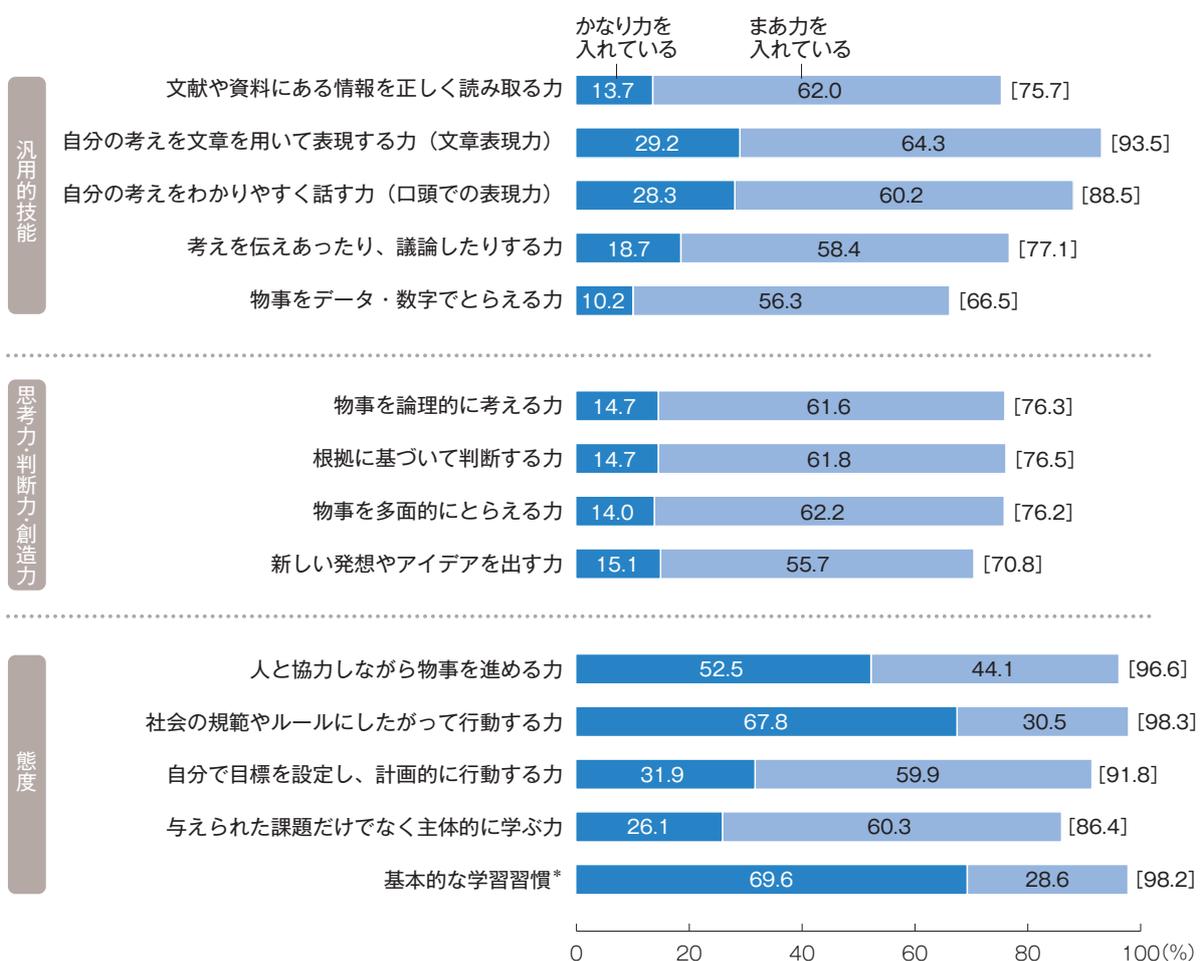
高校で育成に力をいれて取り組んでいるのは「基本的な学習習慣」や「社会の規範やルールにしたがって行動する力」。

高校に対しても、力を入れて育成に取り組んでいる学力・能力についてたずねた。まず、「かなり力を入れている」の回答率の高いものが、「基本的な学習習慣」(69.6%)と「社会の規範やルールにしたがって行動する力」(67.8%)、「人と協力しながら物事を進める力」(52.5%)といった態度に関する項目で、半数を超えている。「まあ力を入れている」も含めると、8割を超えているのが、「態度」に関する5項目全てと「自分の考えを文章を用いて表現する力(文章表現力)」や「自分の考えをわかりやすく話す力(口頭での表現力)」といった表現力に関する項目であった。

Q

次のような学力・能力の育成について、貴校ではどの程度力を入れて取り組んでいますか。

図1-5 高校での学力・能力の育成状況(全体) **高校**



注1) 選択肢は、「かなり力を入れている」「まあ力を入れている」「あまり力を入れていない」の3段階。

注2) []内の値は、「かなり力を入れている」+「まあ力を入れている」の%。

注3) *「基本的な学習習慣」は、高校のみで、大学にはたずねていない。

②とくに力を入れていること

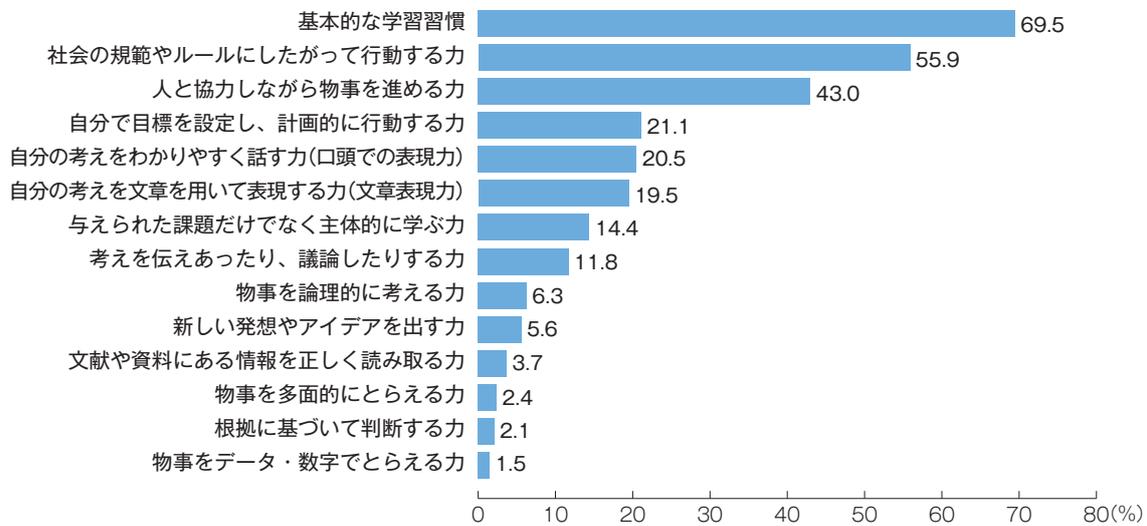
高校の7割が「基本的な学習習慣」の育成にとくに力を入れている。

学力・能力として掲げた14項目の中から、とくに力を入れて育成に取り組んでいる項目を3つまで選んでもらった結果を図1-6に示す。最も多いのは「基本的な学習習慣」69.5%、次いで「社会の規範やルールにしたがって行動する力」55.9%、「人と協力しながら物事を進める力」43.0%といった習慣や態度に関する項目である。次に、これらを学科別、普通科の四年制大学進学率別にみたものが、図1-7である。学科別には、「人と協力しながら物事を進める力」が専門学科で高く、「自分の考えをわかりやすく話す力」は総合学科で高い。普通科の四年制大学進学率別では、「社会の規範やルールにしたがって行動する力」「人と協力しながら物事を進める力」は進学率の低い学校で高く、「自分で目標を設定し、計画的に行動する力」は進学率の高い学校の方が高くなっている。

Q

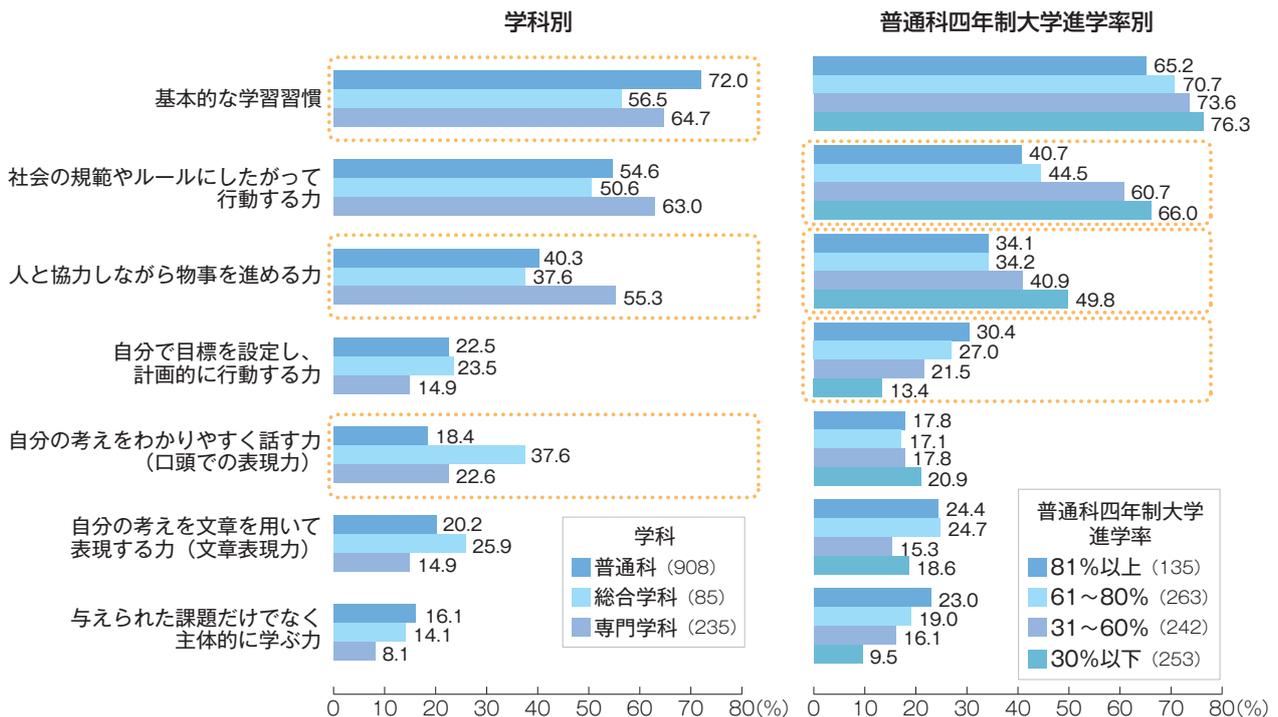
次の学力・能力の中で、貴校がとくに力を入れて取り組んでいる育成を3つまで選び、回答欄に該当する文字を記入してください。

図1-6 特にとくに力を入れて育成に取り組んでいる学力・能力(全体) **高校**



注) 14項目の中から3つまで選択したもの。

図1-7 特にとくに力を入れて育成に取り組んでいる学力・能力 上位7項目(学科別・普通科四年制大学進学率別) **高校**



注) 図の は、それぞれ学科別、進学率別に最大値と最小値に15ポイント以上の差があるものを表す。

大学入試

高校生の進路選択・進学指導の今日的な難しさ

進路選択に関する高校生の状況について見ると、大学進学拡大の中での大学選びの難しさが浮かびあがった。一つは、大学進学に対する高校生の意識の曖昧さである。高等学校長の回答を見ると「大学の教育内容をよく理解しないまま受験する生徒が多い」「志望校をなかなか決められない生徒が多い」との比率が3割以上を占める(図2-3)。

「大学の学部・学科が多様で、教員が個々の生徒に適した進学先をすすめることが難しい」との回答が高校全体の実に5割に達している点も注目される(図2-3)。一方で「今の大学で学生が何をどのように学ぶのか、高校の教員には理解しづらい」「大学が提供する教育内容などの情報は、高校生には分かりづらい」との回答も5割近くに上る。大学と受験生が「相互選択の時代」に入ったと言われる高大接続において、大学からの情報提供が高校生の妥当な進路選択を促すために極めて重要であることを示している。

推薦・AO入試で「学力基準」をどう設定するのか

ところで、推薦入試・AO入試における学力不足が問題として指摘されて久しい。この状況は今回の調査でも確認された。「一般入試に比べ、推薦・AO受験者の基礎学力が不足している」との認識は高校・大学ともに5割を超え、高校では7割近くに達している(図2-3)。

こうした状況を打開すべく、政府からは、大学入試改革の一環として高校の基礎学力を問う達成度テスト(基礎レベル)が提唱され、推薦・AO入試でのスコア利用による学力確保につなげようとしている。しかし調査結果に目を向けると、学力不足に対する共通認識がある一方で、大学では「学力が足りない学生も合格させざるを得ない」が5割弱に達している。また高校では「推薦・AO入試でなければ大学に進学できない生徒が多い」

との回答が6割に達した。すなわち、大学では学生募集、高校では進路保障という現実の諸問題がある中で、推薦・AO入試に達成度テストを用いたとしても、そこで合否判定に用いる学力の最低基準をどう設定するのか、困難な課題を突きつけられているといえるだろう。

今後の入試のあり方について

こうした種々の課題がある中で、今後の大学入試の方向性について何が求められているのか。高校・大学の共通意識として見られたのが、大学入試は「教科学力を中心に評価」(高大ともに8割)しつつ「思考力・表現力などの多様な能力を今以上に重視して評価するのがよい」(高大ともに7割)との点である(図2-11)。ただし、この「教科学力」と「教科学力以外の思考力・表現力など」の入試における重要性を比較してもらうと、高大ともに6割が入試で最も重視すべきは「教科学力」であり、「大学入試はまず教科学力の評価」が土台である(図2-12)。

さらに高大の共通認識として示されたのが、「入学者選抜の方法はこれ以上多様化しないほうがよい」との回答が、高校・大学ともに9割近くに達していることだ(図2-11)。「とてもそう思う」との回答だけをみても4割に達している。また大学では7割以上が「入学者選抜における教職員の負担が大きい」と回答しており、入試の負担感も相当のようだ(図2-3)。一方、高校の4割弱が「選抜方法の多様化により、生徒の大学選択が難しくなっている」との認識を示しており、進路指導上の困難も来している。

「これ以上の多様化は好ましくない」とする高大の共通認識を見ると、大学入試を全体としてどのようなシンプルな制度として再編成できるかが、その実効性を担保する上で大きな鍵になると思われる。

(ベネッセ教育総合研究所 主任研究員 樋口 健)

2-1. 入学者選抜の実施状況

推薦・AO入試で学力試験を課しているのは、一般推薦入試 38.0%、AO入試 14.1%。

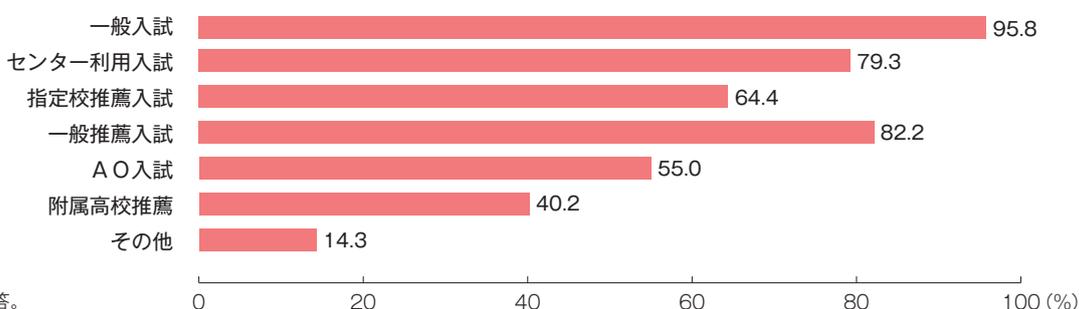
入学者選抜の方法別に実施率をたずねたところ、「一般入試」95.8%、「一般推薦入試」82.2%、「センター利用入試」79.3%の順に多い(図2-1)。

次に、「一般推薦入試」「AO入試」の選考方法をたずねた結果が図2-2である。学力試験は「一般推薦入試」で38.0%、「AO入試」で14.1%が実施している。教科学力を含む面接試験を行っている割合は、「一般推薦入試」30.4%、「AO入試」36.8%である。

Q

貴学科では、次のうち、どの入学者選抜方法を実施していますか。今年度の入学者について、あてはまるものすべてに○をつけてください。

図2-1 入学者選抜方法別実施率(全体) **大学**

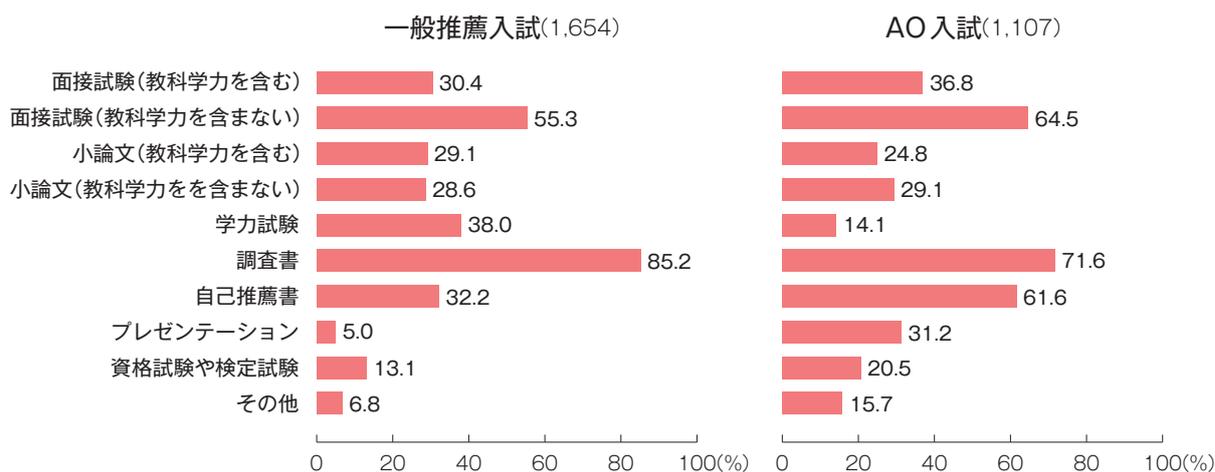


注) 複数回答。

Q

「一般推薦入試」または「AO入試」を実施している場合にお聞きます。貴学科の「一般推薦入試」「AO入試」では、何に基づいて選考を実施していますか。

図2-2 一般推薦入試・AO入試の選考方法(各入試実施学科) **大学**



注) 対象は、「一般推薦入試」「AO入試」を実施していると回答した学科。()内はサンプル数。(図2-1参照)。

2-2. 進路選択・入試における課題

高校・大学双方に、現在の入学者選抜の課題として、高校生(入学者)の進路選択の実態、推薦・AO入試の実態、アドミッションポリシーが機能しているのか、についてたずねた。また、高校に対しては、大学からの情報提供が足りているのか、大学に対しては、入学者選抜の実施・運営上の課題や志願者数にかかる課題についてたずねた結果を以下に示す。

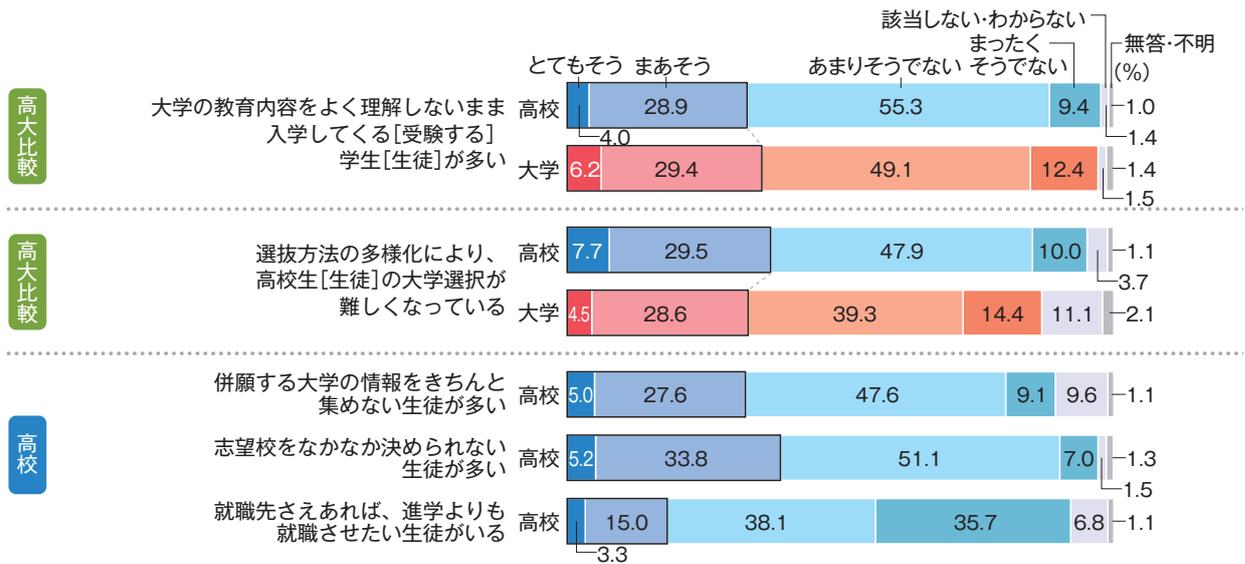
Q

貴学科[貴校]の入学者選抜[大学受験]における課題について、お聞きします。

図2-3 入試の課題(全体) **高校** **大学**

▶ 高校生の進路選択に関すること

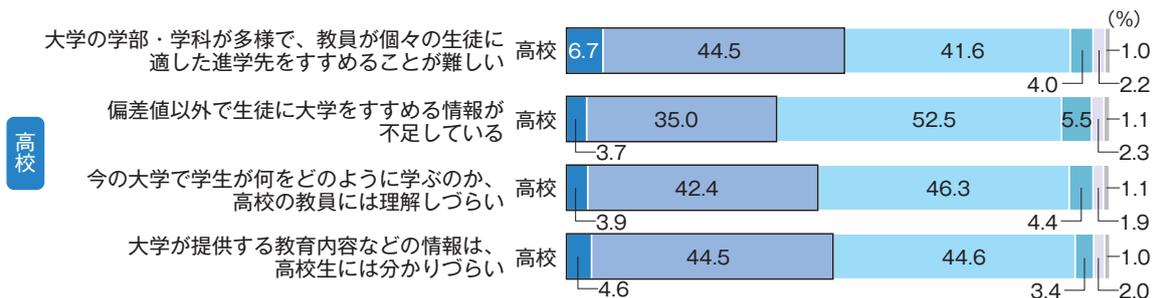
「選抜方法の多様化により大学選択が難しくなっている」と感じているのは高大ともに3分の1程度。



注) []内は、高校に対する質問内容。

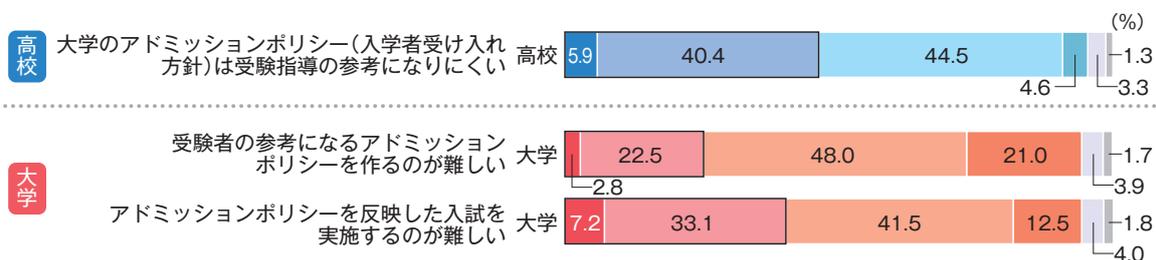
▶ 大学の情報に関すること

高校の5割が、大学からの情報は、高校教員や高校生にとって分かりづらいと感じている。



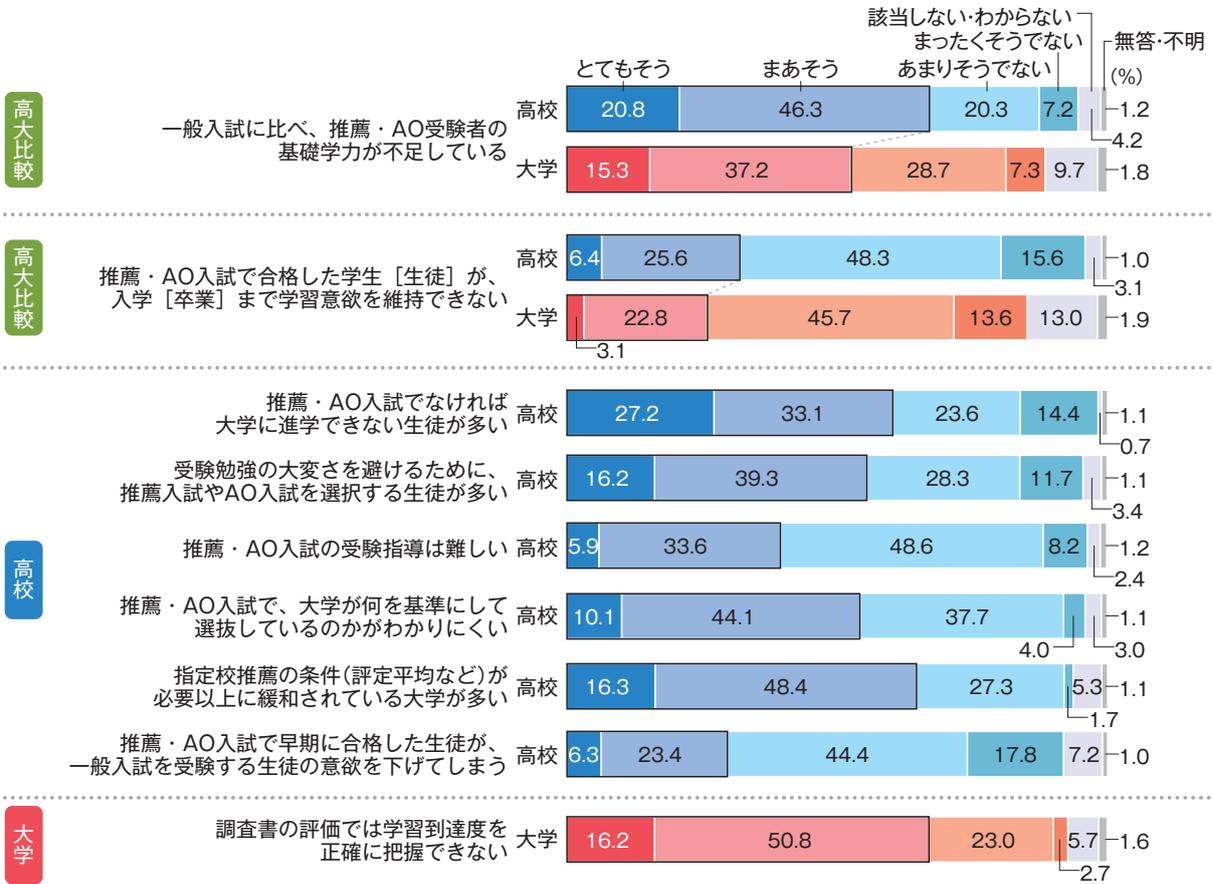
▶ アドミッションポリシーに関すること

半数近い高校で、アドミッションポリシーは参考になりづらいと感じている。



▶推薦・AO入試に関すること

一般入試より推薦・AO受験者の基礎学力が不足していると感じている高校が67%。大学より15ポイント高い。



注) []内は、高校に対する質問内容。

▶入学者選抜の実施・運営に関すること

73%の学科で、入学者選抜の負担が大きいと感じている。



▶志願者数に関すること

学力が足りない学生も合格させざるを得ない学科が5割弱。



2-3. 教科の必要度と入試での受験割合

高校生のうちに学んでおく必要性の高い教科・科目は「英語」「国語」。

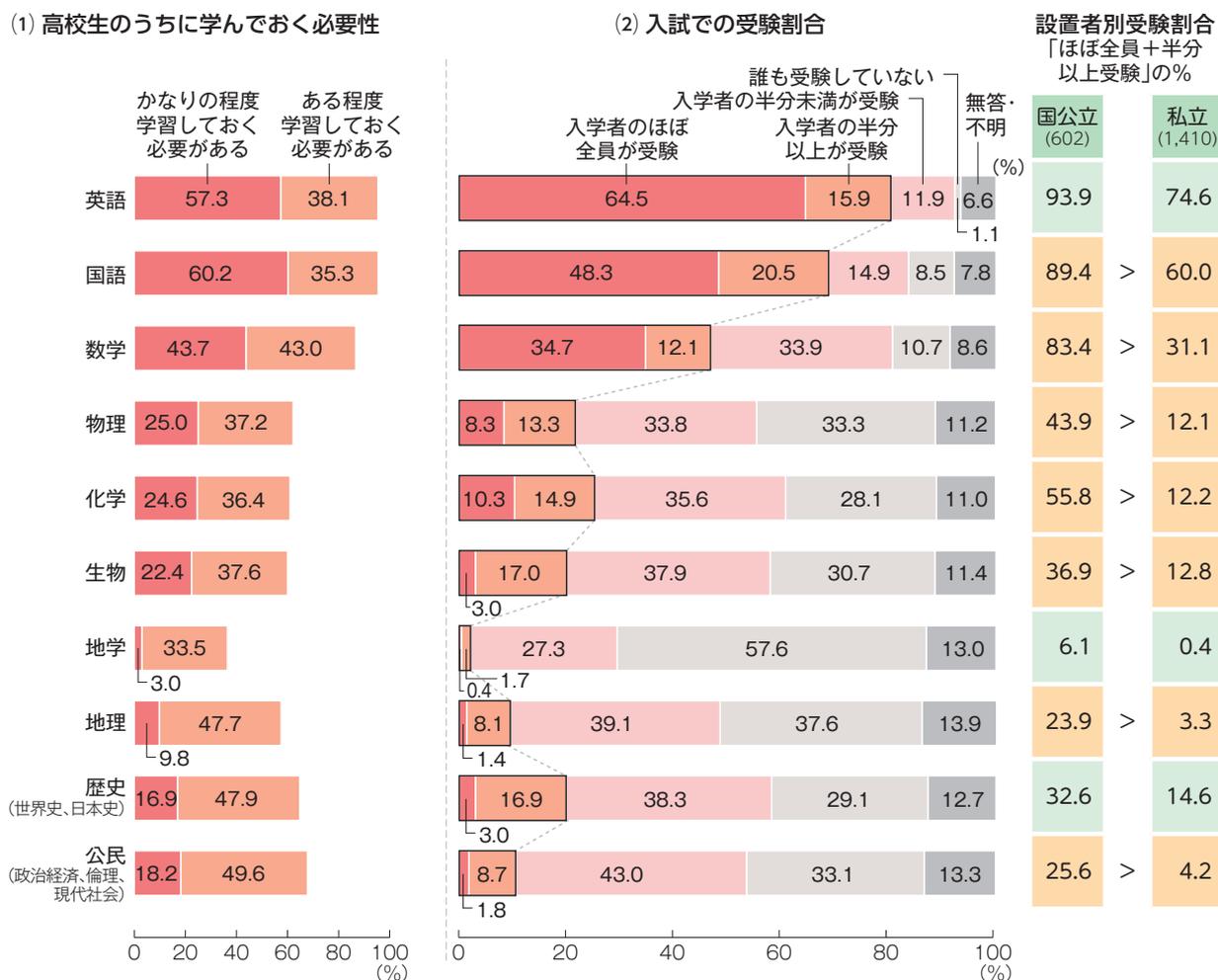
大学に対して、高校の教科・科目別に学習の必要度と、各教科・科目を入試で受験している入学者の割合についてたずねた。まず、必要度については「かなりの程度学習しておく必要がある」教科・科目として全体で高かったのが「国語」60.2%、「英語」57.3%である。「ある程度学習しておく必要がある」も含めると、いずれも95%の必要度を感じている。次に、これらの各教科・科目の入試での受験割合であるが、「入学者の半分以上が受験」「入学者のほぼ全員が受験」を合計した値(=半分以上が受験している割合)をみていくと、「英語」は80.4%、「国語」は68.8%である。さらに、これを「国公立」「私立」別にみると、「国語」は「国公立」で89.4%が半分以上受験しているのに対し、「私立」は60.0%となっている。

Q

外国語（英語）・国語・数学・理科・地理歴史・公民の6教科についてうかがいます。

- 貴学科の学生が専門分野を学ぶ上で、高校生のうちに各教科・科目を学んでおく必要性をどの程度感じていますか。
- 貴学科の学生のうち、入試（センター試験、個別試験含む）で次の教科・科目を受験しているのは、どれぐらいですか。

図2-4 教科別の学習必要度と入試での受験割合(大学・設置者別) **大学**

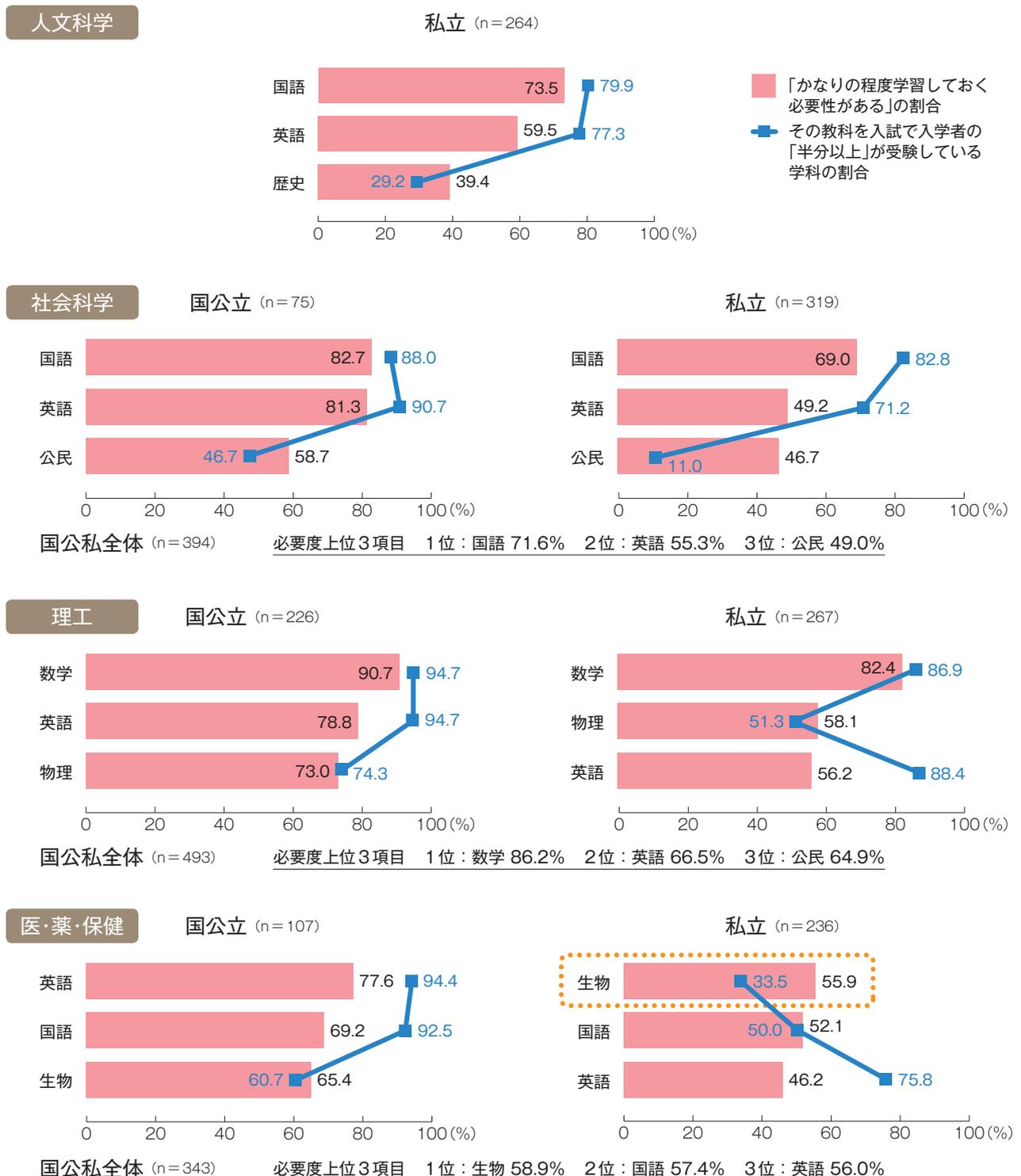


注) 右表の「>」と■は、「国公立」と「私立」で20ポイント以上の差があることを表す。

私立の「医・薬・保健」系学科では、「生物」の必要度に対し、入試での受験率は低い。

大学の学科系統別・設置者別に学んでおく必要性の高い教科・科目上位3つと、それらについて入試で入学者の「半分以上が受験」している割合（「入学者のほぼ全員」+「入学者の半分以上が受験」）を表したものが下図である。必要性のある度合いが高いにもかかわらず、入試での受験率の低いのは、私立の「医・薬・保健」の「生物」であった。「生物」は「かなりの程度学習しておく必要がある」の回答が55.9%と最も高いのに対し、入試で「半分以上が受験」と回答した学科は33.5%にとどまっている。

図2-5 「かなりの程度学習しておく必要がある」上位3教科と受験割合（4学科系統別） **大学**



注) 人文科学の「国公立」は該当サンプル数が少ないので省略している。

2-4. 現在の入試で把握できていること

一般入試では教科知識、推薦・AO入試では「口頭での表現力」や「関心・意欲」が中心。

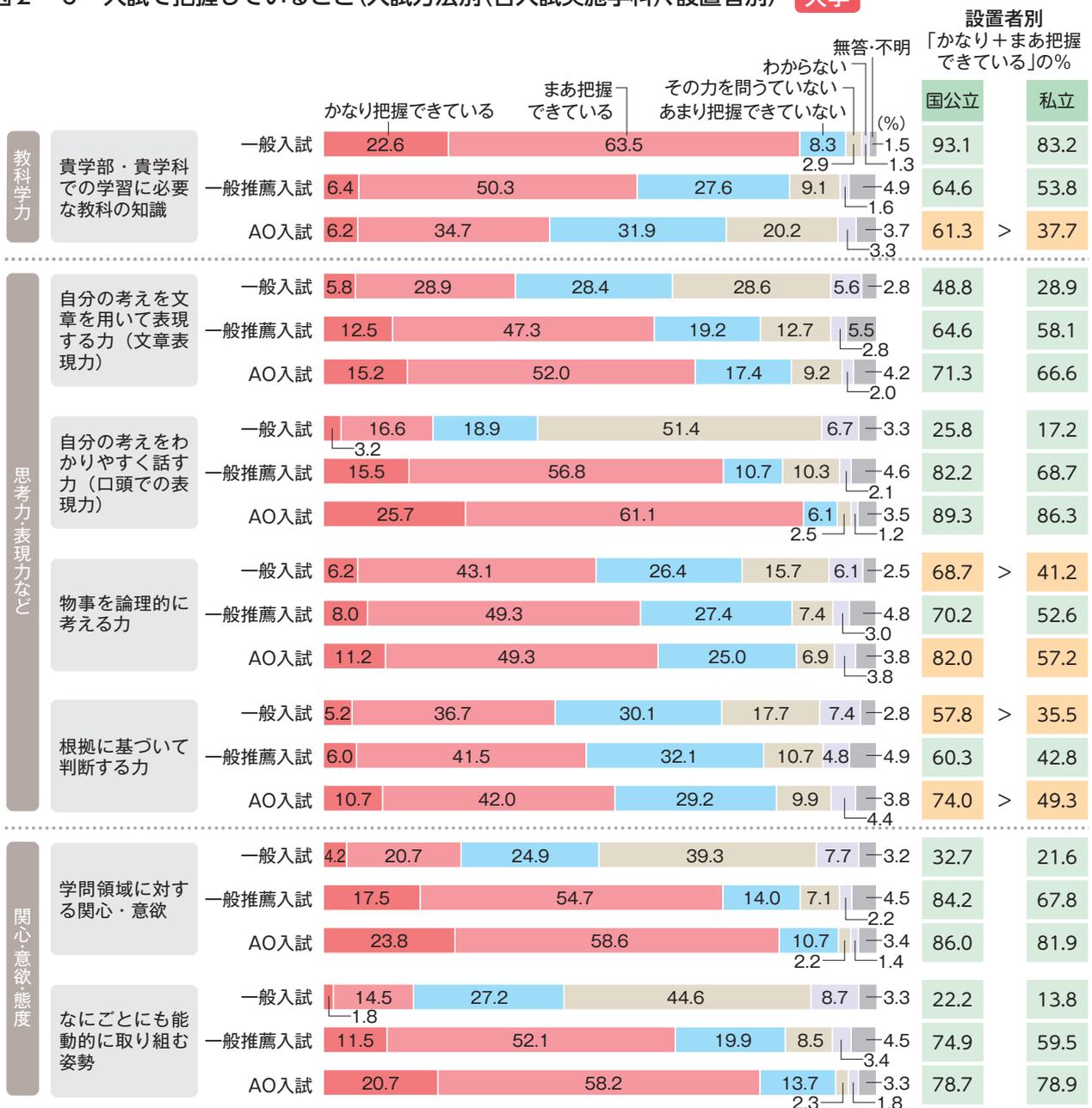
入試方法別に、「教科学力」「思考力・表現力など」「関心・意欲・態度」に関してどの程度入試で把握できているかをたずねた。「一般入試」で把握できている（「かなり把握できている」＋「まあ把握できている」、以下同）と感じている比率が高いのは「教科の知識」86.1%である。一方、「一般推薦入試」「AO入試」では「自分の考えをわかりやすく話す力（口頭での表現力）」「学問領域に対する関心・意欲」「なにごとにも能動的に取り組む姿勢」の把握率が高く、「教科の知識」は相対的に低くなっており、「一般入試」と「一般推薦入試」「AO入試」では逆の傾向がみられる。

設置者別にみると、「国公立」では「一般入試」でも「物事を論理的に考える力」や「根拠に基づいて判断する力」をそれぞれ68.7%、57.8%が把握できているとし、「私立」より20ポイント以上高くなっている。

Q

貴学科では、入試を通して、入学者のどのような能力や意欲を把握できていると思いますか。「一般入試」「一般推薦入試」「AO入試」の3つの入試方法について、以下の項目の能力や意欲を学科としてどの程度把握できているか、それぞれあてはまるもの1つに○をつけてください。

図2-6 入試で把握していること（入試方法別（各入試実施学科）、設置者別） **大学**



注1) サンプル数は一般入試1,927、一般推薦入試1,654、AO入試1,107(各入試方法を実施している学科のみ。P.11の図2-1参照。)
 注2) 右表のサンプル数は、一般入試⇒国公立:562、私立:1,365、一般推薦入試⇒国公立:443、私立:1,211、AO入試⇒国公立:150、私立:957。
 注3) 設置者別の表の「>」と黄色は20ポイント以上の差がみられるものを表す。

2-5. 現行の入学者選抜の評価と今後の意向

「AO入試」で入学させたい学生が選抜できていると感じているのは約半数。

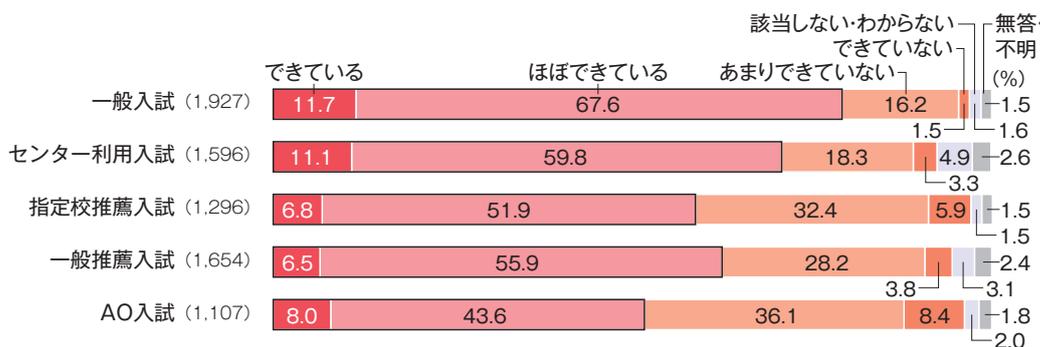
現在実施している入試方法別に、入学させたい学生が選抜できているかをたずねたところ、どの入試方法についても、5割以上が「できている」(「できている」+「ほぼできている」と回答している。しかしながら「AO入試」については「できていない」(「あまりできていない」+「できていない」)も44.5%と半数近い。

大学の入試方法別に今後の入学者数をどのようにしていきたいと考えているのか、どの入試方法についても「現状維持」が半数以上ではあるが、「一般入試」は「増やす」が4割で「減らす」はほとんどいない。

Q

総合的にみて、貴学科の入学者選抜では、学科として入学させたい学生が選抜できていますか。

図2-7 入試方法別の評価(各入試方法実施学科) **大学**

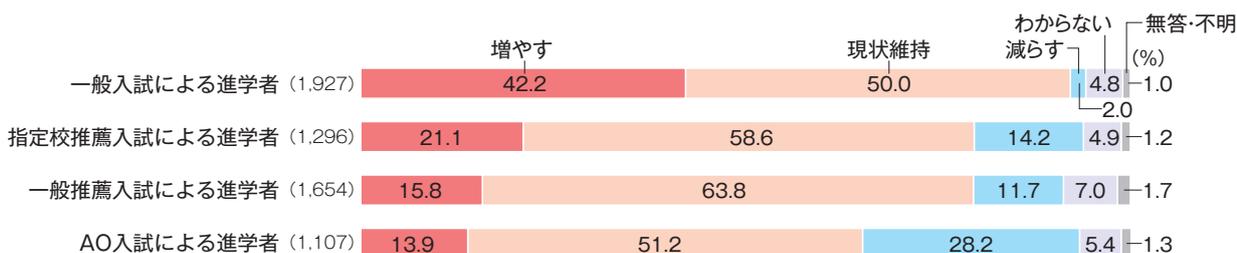


注) 対象は、各入試方法を「実施している」と回答した学科。()内はサンプル数。

Q

貴学科では、次のような入試方法で入学する学生数を、今後どのようにしていきたいとお考えですか。

図2-8 入試方法別の今後の実施意向(各入試方法の実施学科)



注) 対象は、各入試方法を実施していると回答した学科。P.11の図2-1を参照。

II

大学入試

2-6. 受験させたい入試方法

推薦・AO入試は、専門学科で受験意向が高い。

高校が、今後生徒に積極的に受験させたい(「できるだけ受験させたい」+「まあ受験させたい」と思う入試方法は、高校全体では「一般入試」が76.4%と最も高く、「AO入試」が43.2%で最も低い。これを学科別にみると、「一般入試」「センター利用入試」は普通科で受験させたいという意向が高く、「指定校推薦入試」「一般推薦入試」「AO入試」は専門学科で高い。さらに、普通科の四年制大学進学率別にみると、進学率「30%以下」の高校ではそれ以外と傾向が異なり、「一般推薦入試」「指定校推薦入試」を受験させたいという回答が7割を超えて高くなっている。

Q 貴校では、生徒にどのような入試方法で積極的に受験させたいと思いますか。

図2-9 生徒に受験させたい入試方法(全体) **高校**

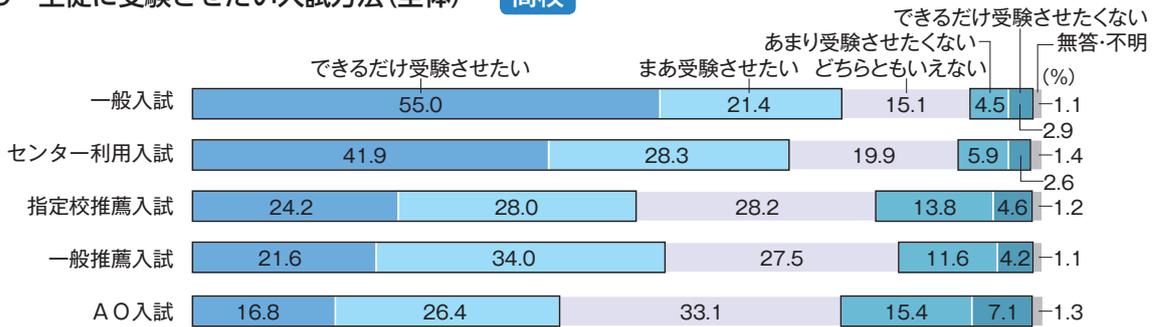
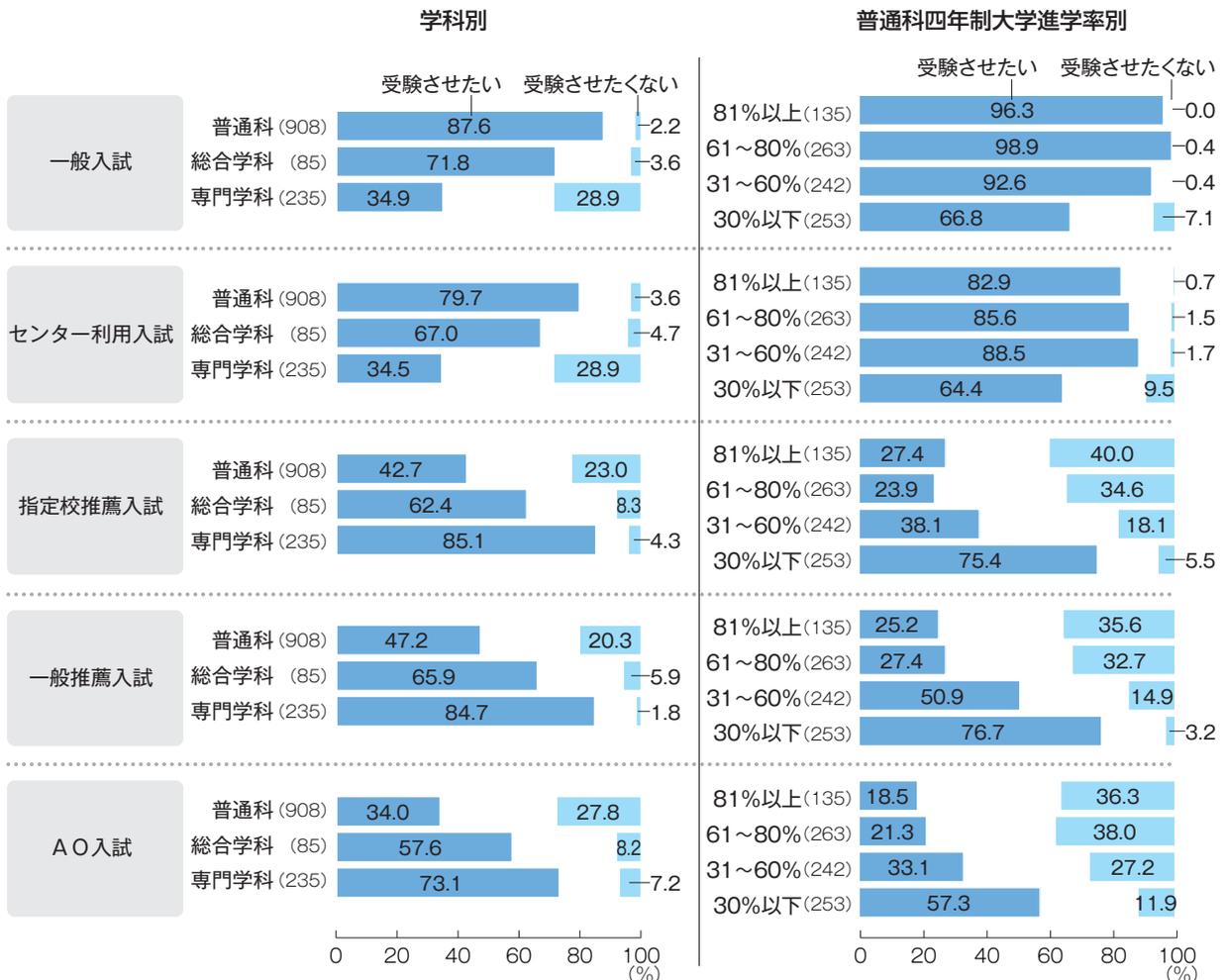


図2-10 生徒に受験させたい入試方法(学科別・普通科四年制大学進学率別) **高校**



注1) 「受験させたい」は「できるだけ受験させたい」+「まあ受験させたい」の%、「受験させたくない」は「あまり受験させたくない」+「できるだけ受験させたくない」の%を表す。

注2) 図では、「どちらともいえない」「無答・不明」の値は省略している。そのため2つの項目を足しても100%にならない。

2-7. 今後の入試のあり方

「入学者選抜の方法はこれ以上多様化しないほうがよい」が高校・大学とも9割。

今後の入学者選抜のあり方に関して、入試で何を評価するかについては、「教科学力を中心に評価するのがよい」を肯定率（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」、以下同）が8割で最も高いが、同時に「思考力・表現力などの多様な能力を今以上に重視して評価するのがよい」や「学問に対する関心・意欲や大学での目標を評価するのがよい」も7割前後と高くなっている。「高校での課外活動や社会活動等の状況」や「高校での教科の学習履歴」を評価の材料にすることについては高校では肯定率が5割を超えるが、大学では4割程度にとどまっている。さらに、出題の範囲については、高校の8割が「大学入試は高校の学習指導要領に準拠した範囲にとどめたほうがよい」としている。

また、入試方法に関しては、「入学者選抜の方法はこれ以上多様化しないほうがよい」が高校・大学ともに約9割で、「とてもそう思う」だけでも4割にのぼり、一層の多様化に対する強い懸念がうかがえる。また、改革の効果に対しては、「大学入試を改革すれば高校生はもっと積極的に学習に取り組むだろう」と考えるのは、高校では半数だが、大学では3分の1程度となっている。そして、高校で最も支持が高かったのは、「高校は大学進学実績以外の指標でもっと評価されたほうがよい」で、9割を超えている。

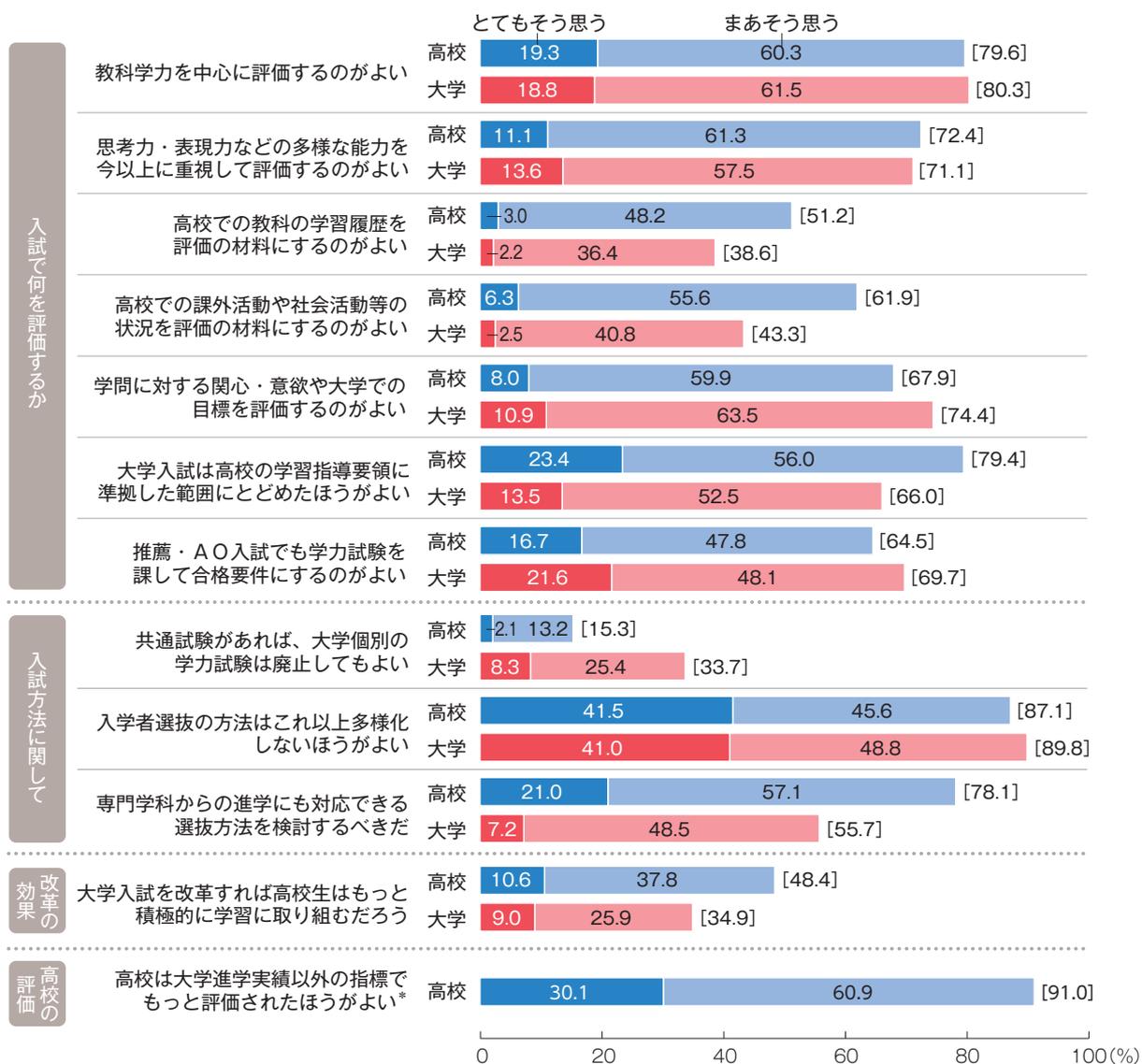
II

大学入試

Q

あなたは、今後の入学者選抜に関する次のようなことについてどのようにお考えですか。

図2-11 今後の入試のあり方について(全体) **高校** **大学**



注1) 選択肢は「とてもそう思う」「まあそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の4段階。

注2) *の項目は、大学にはたずねていない。

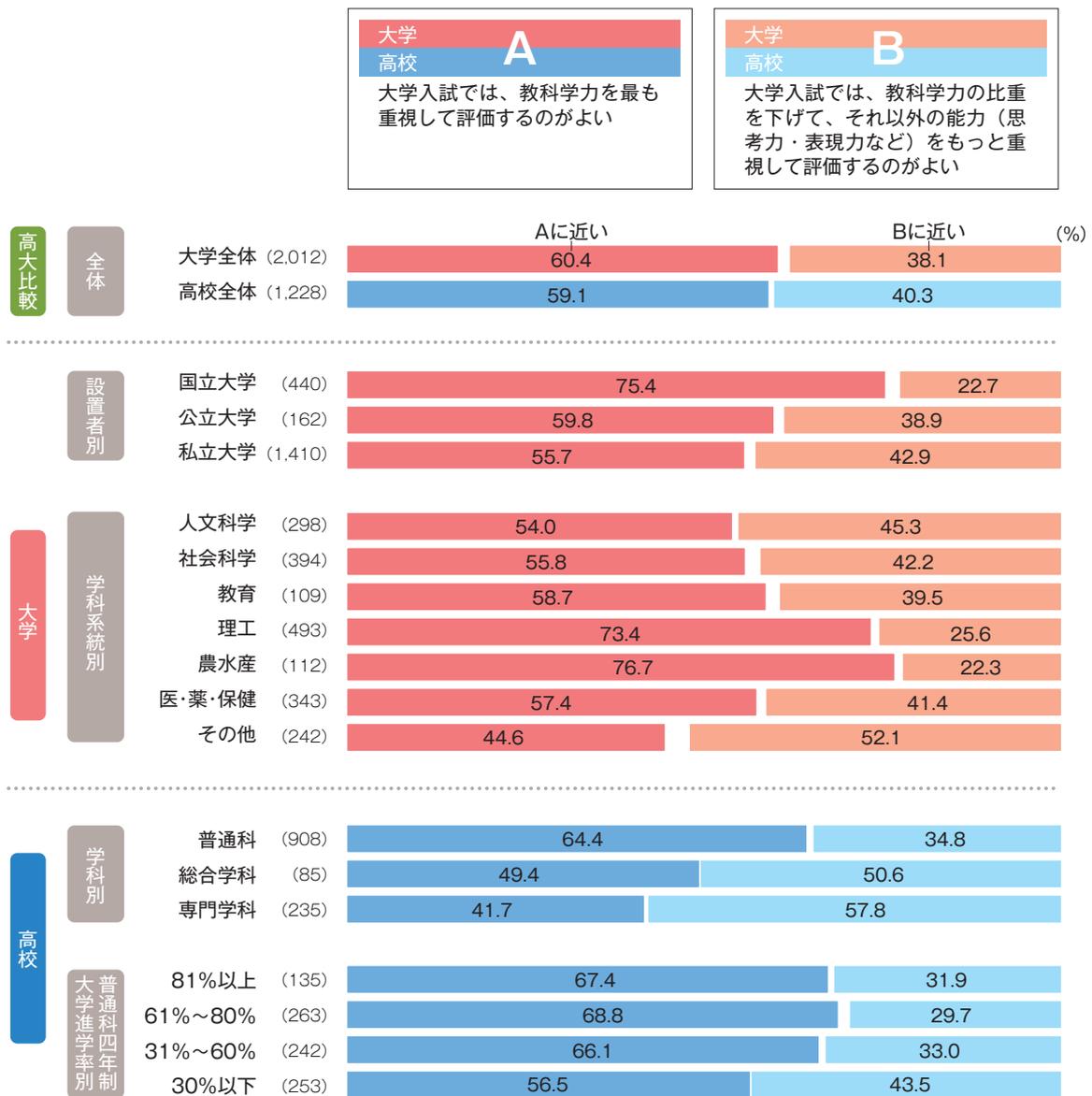
2-8. 入試における教科学力のウェイト

国立大学や「理工」「農水産」系統の学科で教科学力重視が高い。

大学入試で、教科学力と、それ以外の能力（思考力・表現力など）の評価についてどの程度重視するのがよいと思うか、高校、大学双方に意識をたずねた。高校・大学ともに「A：教科学力を最も重視して評価するのがよい」のほうが約6割で高い。大学では「国立」や「理工」「農水産」といった理系の学科で「教科学力重視」が7割を超えている。一方、高校では、普通科で「A：教科学力を最も重視」が64.4%と高く、専門学科では「B：教科学力以外を重視」のほうが57.8%と高い。

Q あなたの意見は A と B のどちらに近いですか。

図2-12 大学入試における教科学力のウェイトに対する考え(全体・属性別) 高校 大学



注) 「Aに近い」は、「Aに近い」+「どちらかといえばAに近い」の%、「Bに近い」は、「Bに近い」+「どちらかといえばBに近い」の%を表す。

2-9. 多面的な評価について

多面的な評価を6割の高校が肯定的にとらえているものの、評価の負担・方法、指導方法などの不安は高い。

大学入試改革で議論されている、多面的な評価について高校はどのように感じているのだろうか。懸念事項として高かったのは、「評価が大変で高校教員が多忙になる」で、8割が「と思う」「とても思う」+「まあ思う」、以下同)と回答している。また、「論理的思考力などの汎用的能力をのばす受験指導は難しい」や「現在の高校では多様な能力を評価するスキルが十分でない」の肯定率も7割を超え、評価による負担や指導法、評価方法などについての不安が高い。しかしながら、多面的評価を実施した場合のプラス面について、「従来の学力試験にはあられない能力・適性を大学に評価してもらえるのでよい」と6割は肯定的に受け止めている(図2-13)。

これを学科別にみると、「高校の学習履歴を入試で評価することで、生徒の普段の学習意欲が高まる」が専門学科で68.0%と高く、普通科では52.5%と15.5ポイントのひらきがみられる(図2-14)。

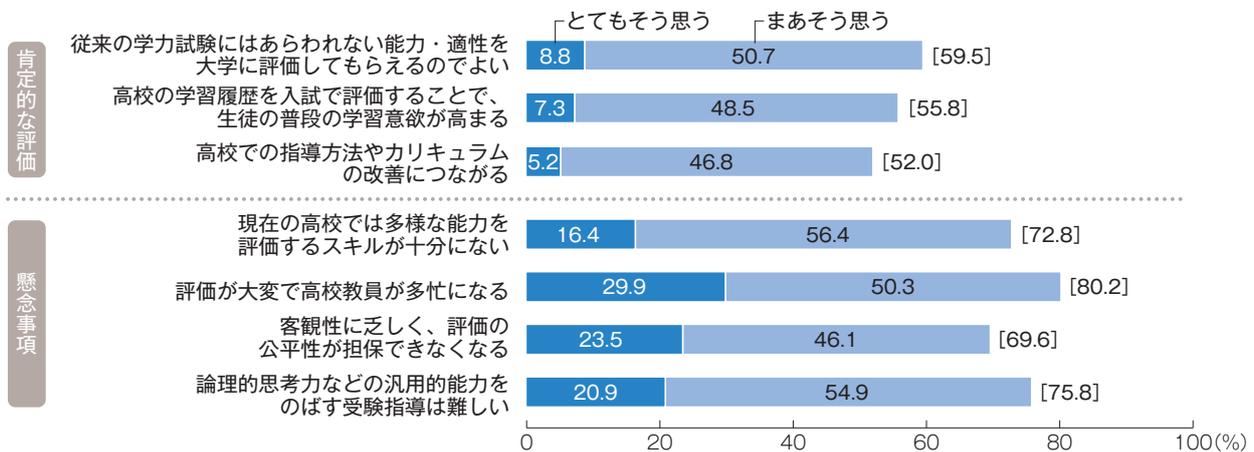
II

大学入試

Q

これからの大学入試に関する議論の中で、入試では教科学力に加え、それ以外の多様な能力(例:論理的思考力などの汎用的能力)や高校時代の学習履歴を通じた能力の伸長を評価すべきとの声があります。あなたは、このことに関連して、どのようなことを思われますか。

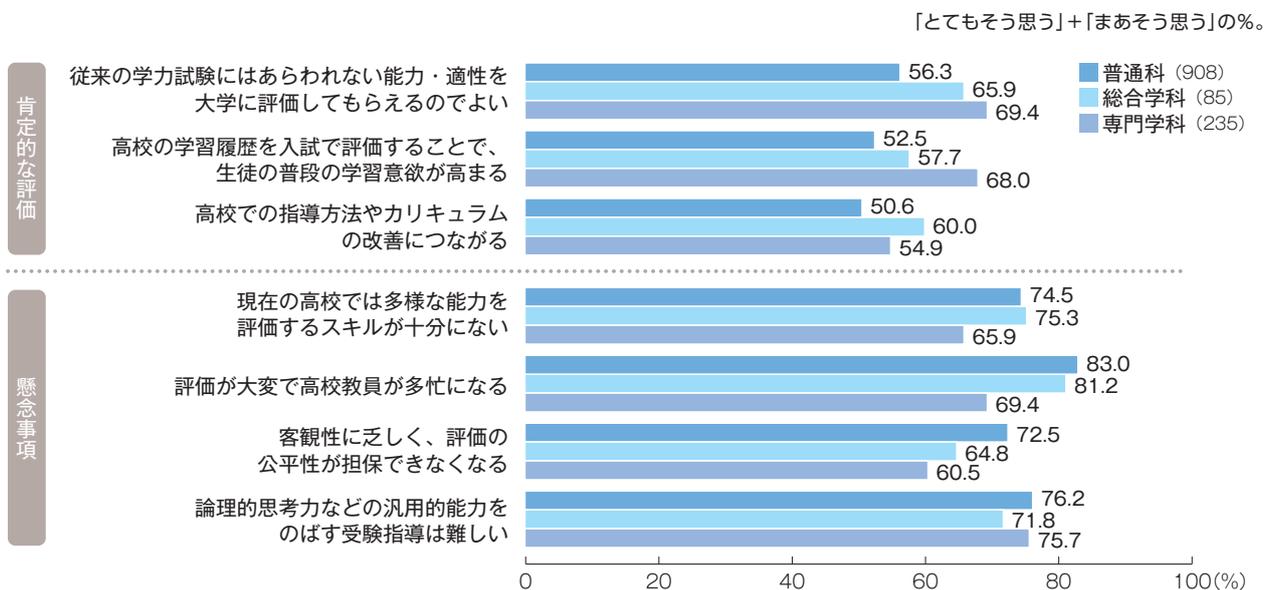
図2-13 多面的な評価について(全体) **高校**



注1) []内の値は、「とても思う」+「まあ思う」の%。

注2) 選択肢は、「とても思う」「まあ思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の4段階。

図2-14 多面的な評価について(学科別) **高校**



高校での教育活動

高校での新しい学力・能力の育成と大学入試

平成 25 年度から高校での新学習指導要領が全面実施されている。新学習指導要領では、新しい学力観やその育成方法について示されているが、本調査でも、重視して取り組むべき事項として掲げられている学習や活動について、実施前との変化をたずねた。その結果、「言語活動」は 64.8% の高校が「増えた」（「かなり増えた」＋「少し増えた」の％）と回答、「アクティブラーニング（グループワークや討議、プレゼンなど生徒の能動的参加を取り入れた授業）」が、52.9%、「キャリア教育」も 51.8% と、半数以上の高校で「増えた」としている（図 3-1）。高校の教育は変化しつつあるといえるだろう。特に「キャリア教育」は、普通科の四年制大学進学率の低い層ほど「増えた」との回答が高く、進学率「30% 以下」の高校では 62.5% におよんでいる（図 3-2）。従前より普通科におけるキャリア教育の必要性については、指摘のあるところだが*1、進路多様校での変化が大きいようだ。

また、新しい学力・能力の育成については、意識の面でも、「高校でディスカッションやグループワークなど、講義以外の授業方法をもっと取り入れたほうがよい」「高校で今以上に探究的な活動を充実させたほうがよい」はいずれも肯定率（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」の％）が 8 割を超えており、その必要性を感じているようだ（図 3-3）。しかしながら一方で、「現在の大学入試のもとでは、「活用」や「探究」による新しい学力の育成がすすまない」と高校の 53.9%（「とてもそう」＋「まあそう」の％）、普通科のみでは 57.9% と、6 割近くが感じている（図 3-4）。新しい学力・能力の育成と大学入試への対応のはざまにジレンマを感じている高校も少なくなさそうだ。

推薦・AO 入試による早期合格者に対する取り組み

推薦・AO 入試による入学者が、大学入学者の 4 割を超える現在、それらの早期合格者に対して高校側ではどのような取り組みをしているのだろうか。高校全体では「センター試験を受けさせている」が 43.2% と最も多い（図 3-8）。学科別にみると、普通科と総合学科では「センター試験を受けさせている」が最も高いが、専門学科では「補習を行っている」が 43.8% と最も高くなっていることが特徴的である（図 3-9）。専門学科と大学のカリキュラムの溝を埋める努力が高校側でなされているということであろう。一方においては、「特に何も行ってない」という高校も全体の 4 分の 1 程度存在しているが、逆に言えば、4 分の 3 の高校では何らかの取り組みを行っていることになる（図 3-8）。

また、本調査では、大学が推薦・AO 入試による合格者に対して提供する入学前教育について、高校側がどのように感じているかもたずねている（IV 章）。入学前教育を受けている生徒のいる高校（全体の 69.5%）のうちの 81.7% が「大学にはもっと入学前教育を充実させてほしい」と感じており、「入学前教育を受けた生徒の学習意欲が上がる」と 83.0% が感じている（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」の％）（図 4-11）。入学前教育に対する高校の期待は高いようだ。

他方、大学側では、推薦入試（一般推薦・指定校推薦）を実施している学科の 69.6%、AO 入試を実施している学科の 79.4% が入学前教育を行っている（図 4-1）。入学前教育を実施している大学では、入学前教育の課題として「大学入学前にどのような教育が必要か、高校との検討が十分にできていない」と、64.5%（「とてもそう」＋「まあそう」の％）が感じている（図 4-9）。そして実際に「高校関係者との意見交換」を行っているのは 14.0%、「対象者の高校での履修状況等の把握」を行っているのは 9.9% に過ぎない（図 4-8）。今後、入学前教育を充実させていくためには、高校と大学との情報交換も必要となるだろう。

（ベネッセ教育総合研究所 研究員 吉本真代）

* 1 高等学校におけるキャリア教育の推進に関する調査研究協力者会議 2006『報告書～普通科におけるキャリア教育の推進～』、中央教育審議会 2011『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）』など。

3-1. 新学習指導要領実施後の変化

新学習指導要領の実施により、高校で言語活動が増加。

新学習指導要領の実施による高校での教育活動の変化についてたずねた。新学習指導要領で提唱されている活動の中でも「増えた」(「かなり増えた」+「少し増えた」)との回答が最も多かったのは「言語活動」の64.8%であった。次いで「アクティブラーニング(グループワークや討議、プレゼンなど生徒の能動的参加を取り入れた授業)」が52.9%と続いている。また、「キャリア教育」も半数の高校で、「増えた」(51.8%)としている。これらを属性別にみると、「キャリア教育」については普通科の四年制大学進学率別に大きな違いがみられた(図3-2)。四年制大学進学率「30%以下」では「増えた」が62.5%と最も高くなっている。「キャリア教育」の総時間数が多いかどうかは従前の「キャリア教育」の取り組み度合いにもよるのでわからないものの、少なくとも新学習指導要領を受けてより変化しているのはこの層のようだ。

Q

新学習指導要領の実施によって(平成22～24年度の先行実施も含む)、貴校では次の学習や活動が実施前と比べるとどれくらい増えたと思いますか。

図3-1 新学習指導要領実施後の変化(全体) **高校**

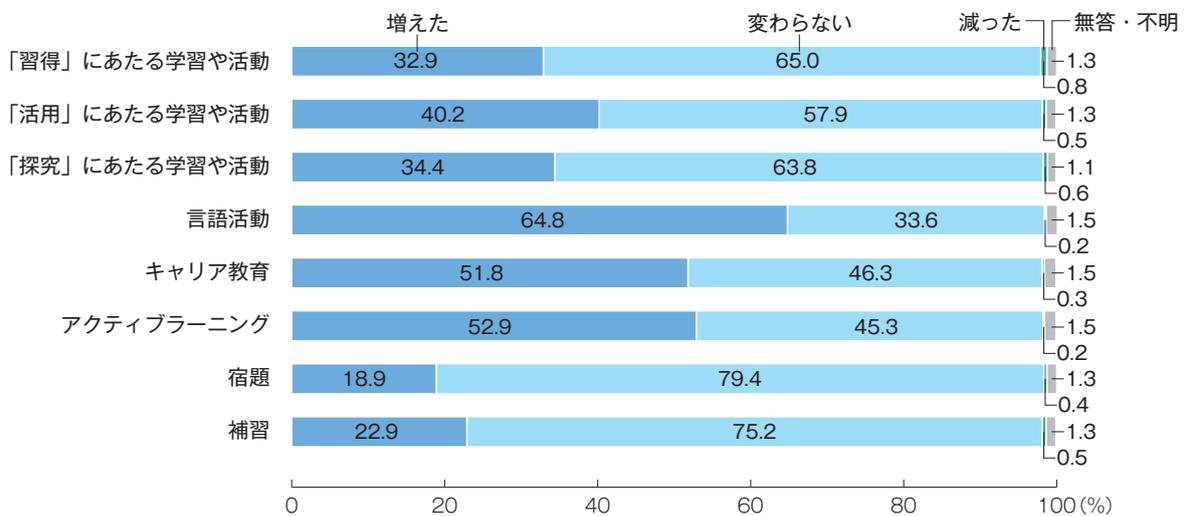
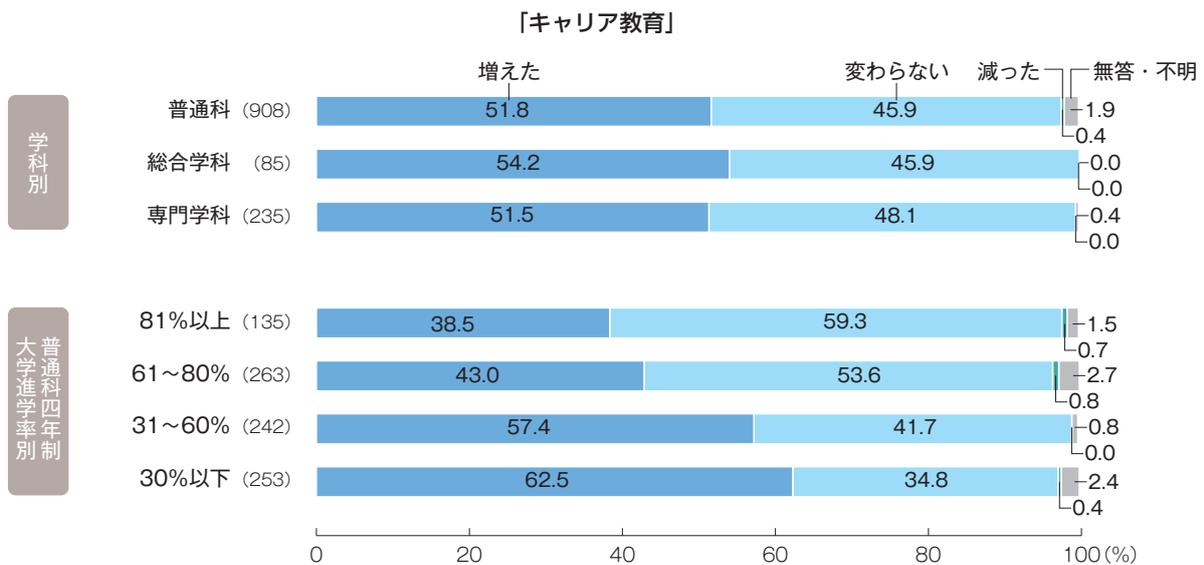


図3-2 新学習指導要領実施後の変化「キャリア教育」(学科別・普通科四年制大学進学率別) **高校**



注) 図3-1、図3-2とも、「増えた」は、「かなり増えた」+「少し増えた」の%、「減った」は「かなり減った」+「少し減った」の%を表す。

III

高校での教育活動

3-2. 高校での新しい学力の育成

現在の大学入試のもとでは新しい学力の育成がすすまないと思うのは5割強。

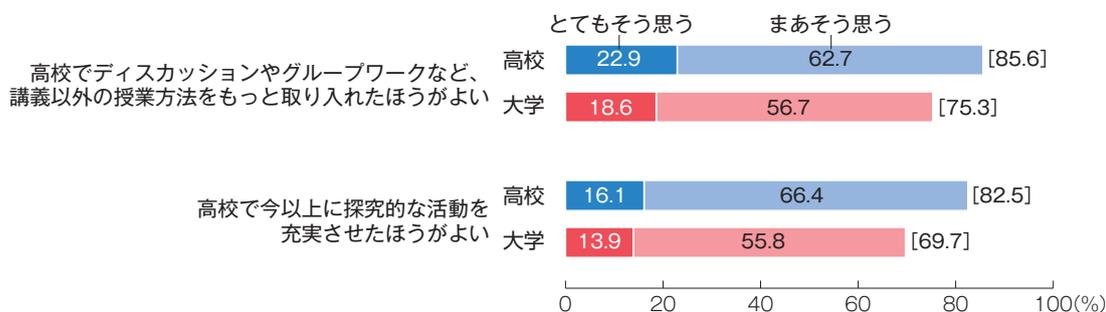
これからの高校教育における探究的な学びなどの新しい学力の育成に関してたずねた。まず、授業方法について、「高校でディスカッションやグループワークなど、講義以外の授業方法をもっと取り入れたほうがよい」は高校85.6%、大学75.3%が「そう思う」(「とてもそう思う」+「まあそう思う」、以下同)と回答している。次に「高校で今以上に探究的な活動を充実させたほうがよい」も高校82.5%、大学69.7%といずれの項目も高校・大学ともに高い肯定率である。

さらに、新しい学力の育成への現在の大学入試の影響についてたずねた結果が図3-4である。「現在の大学入試のもとでは、「活用」や「探究」による新しい学力の育成がすすまない」の肯定率(「とてもそう」+「まあそう」)は全体で53.9%と約半数、普通科の四年制大学進学率別にみると、「61~80%」の層で63.1%と最も高い。

Q

高校と大学の接続に関する今後のあり方に関して、あなたはどのように思いますか。

図3-3 高校教育の今後のあり方について(全体) **高校** **大学**

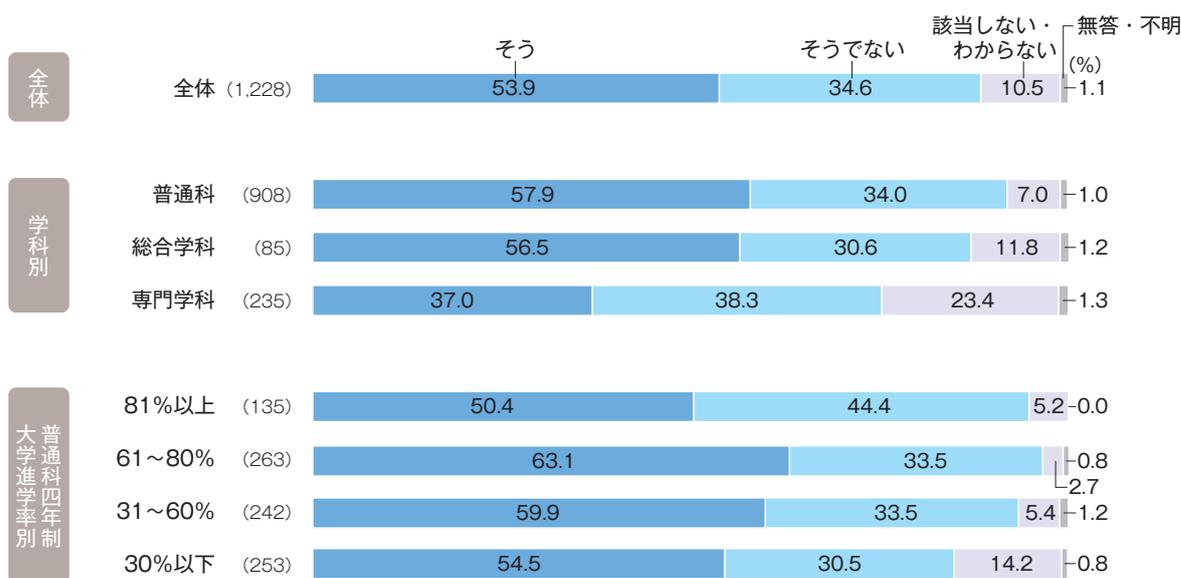


Q

貴校の大学受験における課題についてお聞きします。

図3-4 大学入試の新しい学力の育成への影響(全体・学科別・普通科四年制大学進学率別) **高校**

「現在の大学入試のもとでは、「活用」や「探究」による新しい学力の育成がすすまない」



注) 「そう」は、「とてもそう」+「まあそう」の%、「そうでない」は「あまりそうでない」+「まったくそうでない」の%を表す。

3-3. 進路別のコース分けの実態と影響

進路別のコース分けを実施しているのは64.9%。

進路別のコース分けを実施している高校は64.9%で(図3-5)、そのうち、75.7%は「文系/理系コース」である。「文系/理系コース」分けの時期は「2年生4月」が89.2%とほとんどである。「進学者/就職者向けコース」を実施しているのが32.5%、「国立/私立大学進学コース」は25.1%であった(図3-6)。

次に、「文系/理系」または「国立/私立」別のコース分けをしている高校のコース分けのデメリットについての意識をみると、「早期に受験に向けたコース分けをすることで、生徒の進路選択の可能性が狭まってしまう」「早期に受験に向けたカリキュラムを学習させることで、バランスのよい学力を育成できない」のいずれも、肯定率(「とてもそう」+「まあそう」)は3割程度であった(図3-7)。

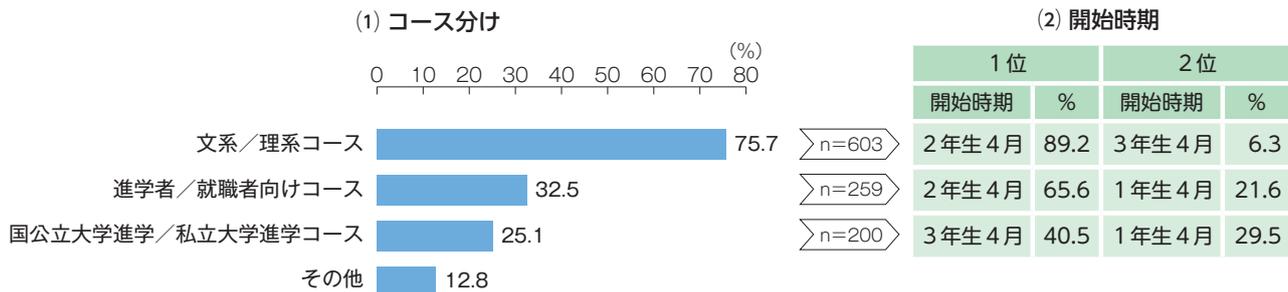
Q 貴校(募集定員がもっとも多い学科)では、進路別のコース分けを実施していますか。

図3-5 進路別コース分けの実施状況(全体) **高校**



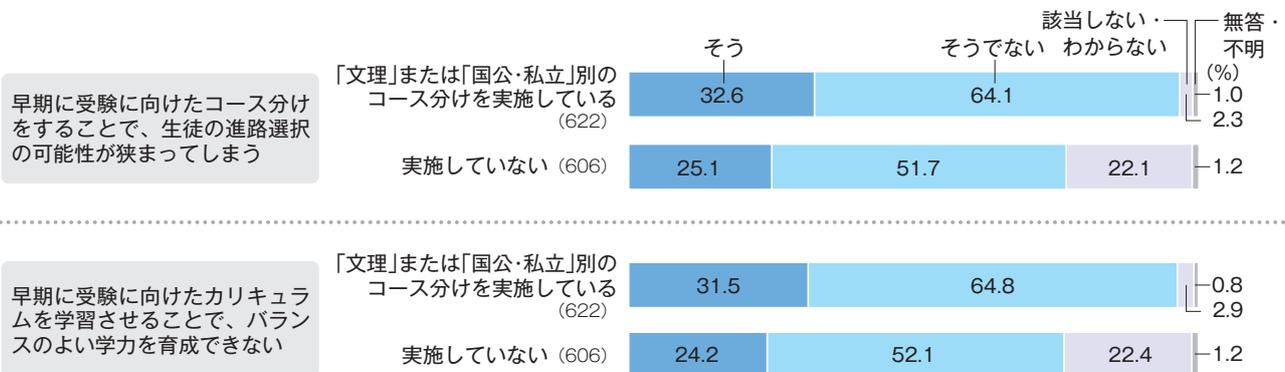
Q 「実施している」に○をつけた方にうかがいます。次のうち、どのようなコース分けを実施していますか。また、実際にコース分けが始まる学年と開始月もお答えください。

図3-6 進路別コース分けの実施状況(実施校) **高校**



注1) 複数回答。注2) 「(1) コース分け」の対象は、進路別コース分けを「実施している」と回答した797件。
注3) Σ〇は「(2) 開始時期」の質問の対象人数を表す。

図3-7 「文理」「国公・私立」別のコース分け有無別課題意識(全体) **高校**



注) 「そう」は「とてもそう」+「まあそう」の%、「そうでない」は「あまりそうでない」+「まったくそうでない」の%を表す。

3-4. 早期合格者に対する高校での取り組み

4割強の高校で、推薦・AO入試による早期合格者に対してセンター試験を受けさせている。

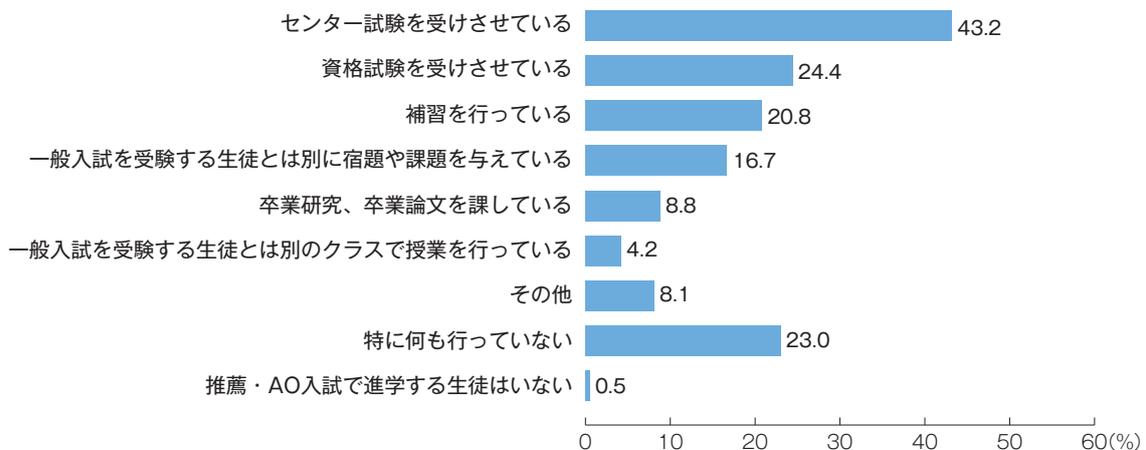
推薦・AO入試による早期合格者に対して、43.2%の高校が「センター試験」を、24.4%が「資格試験」を受けさせていると回答している。一方、4分の1の高校では「特に何も行っていない」となっている。

学科別にみると、普通科と総合学科では「センター試験を受けさせている」が、それぞれ50.6%、41.2%と最も多いが、専門学科については「補習を行っている」(43.8%)と「資格試験を受けさせている」(41.7%)が多い。

さらに、普通科の四年制大学進学率別にみると、「センター試験を受けさせている」のは進学率「31%以上」の層では6割前後となっているが、「30%以下」の層では3割となっている。

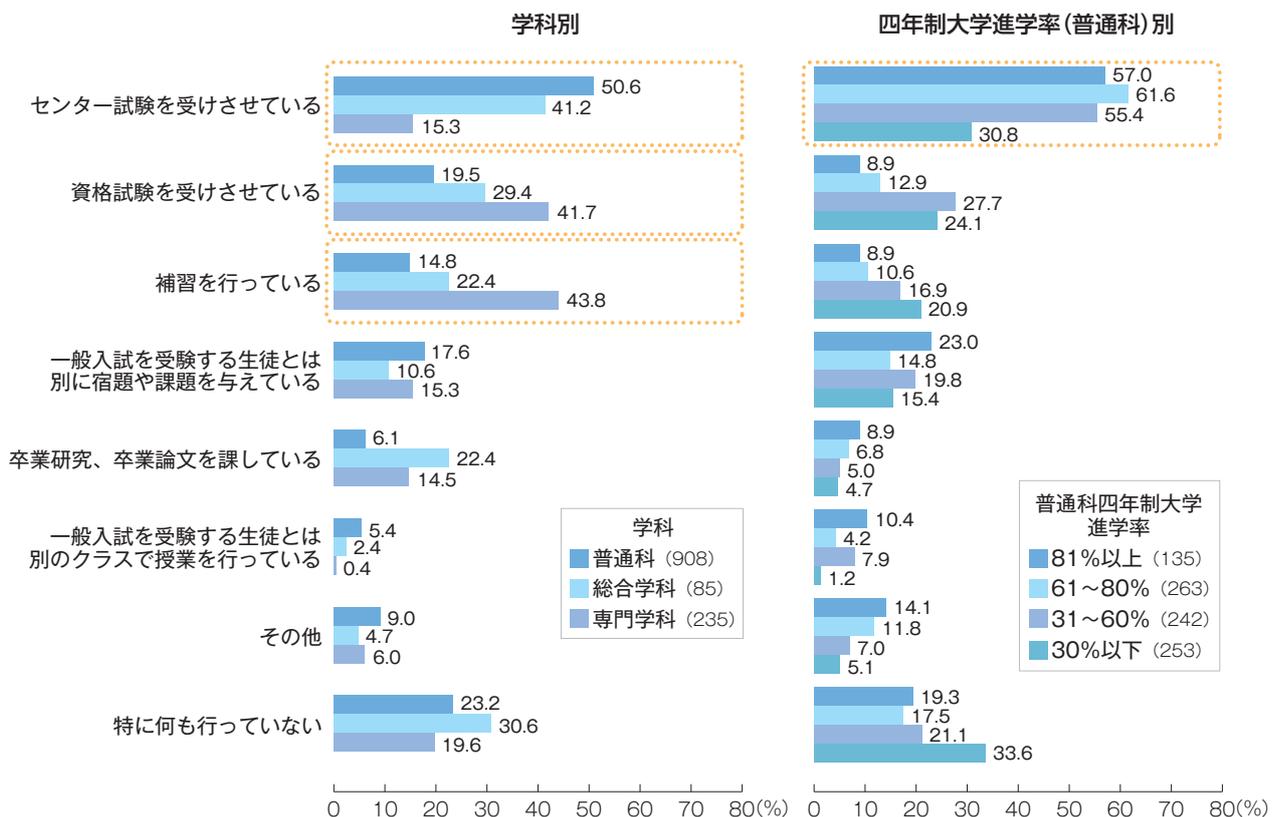
Q 貴校では、推薦・AO入試で早期に進学先が決まった3年生の学力を保证するために、次のような取り組みを行っていますか。

図3-8 早期合格者に対する高校の取り組み(全体) **高校**



注) 複数回答。

図3-9 早期合格者に対する高校の取り組み(学科別・普通科四年制大学進学率別) **高校**



注) 図の は、それぞれ学科別、進学率別に最大値と最小値に20ポイント以上の差があるものを表す。

3-5. 高校教育の役割

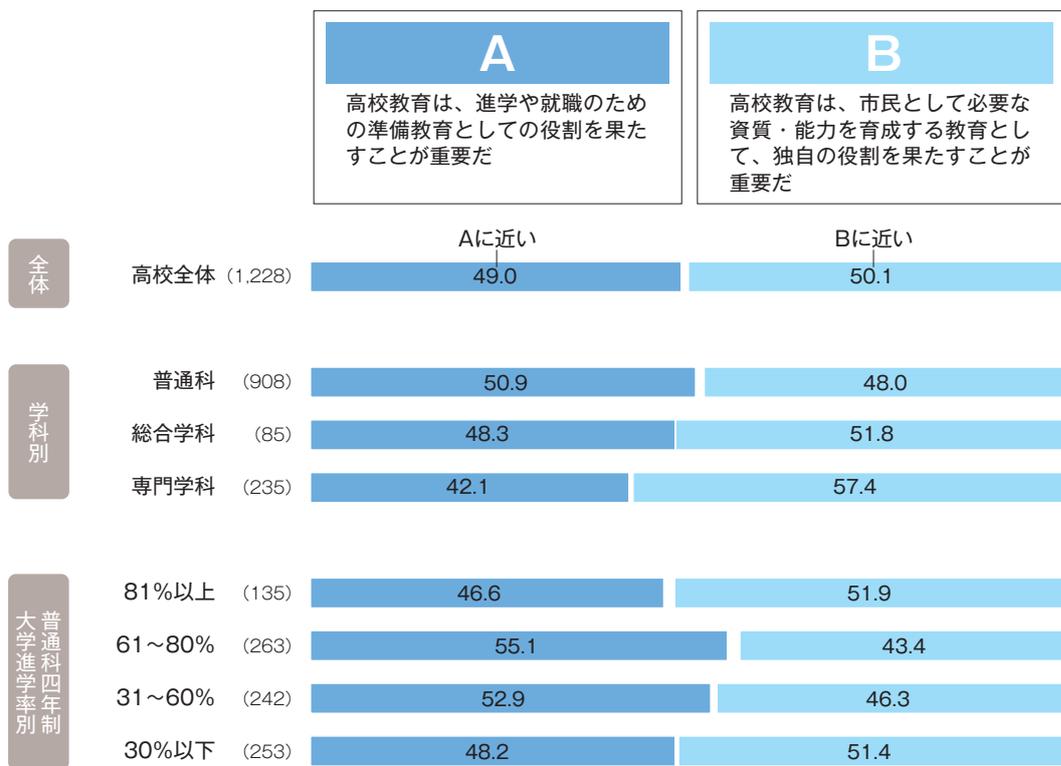
高校教育の役割が、「進学や就職のための準備教育」か「市民教育」なのかは半々に分かれる。

高校教育の役割について次の2つの意見「A: 高校教育は、進学や就職のための準備教育としての役割を果たすことが重要だ」「B: 高校教育は、市民として必要な資質・能力を育成する教育として、独自の役割を果たすことが重要だ」のどちらに近いかをたずねた。結果は、高校全体ではA：49.0%、B：50.1%と、ほぼ半々に分かれた。学科別にみると、普通科、総合学科ではほぼ同じ割合だが、専門学科では、Bの方がやや多い。普通科の四年制大学進学率別には進学率「61～80%」の高校でややAの方が多くなっているが、あまり違いはみられなかった。

Q

あなたの意見はAとBのどちらに近いですか。

図3-10 高校教育の役割に対する考え(全体・学科別・普通科四年制大学進学率別) 高校



注) 「Aに近い」は、「Aに近い」+「どちらかといえばAに近い」の%、「Bに近い」は、「Bに近い」+「どちらかといえばBに近い」の%を表す。

移行期の教育活動

～入学前教育・リメディアル教育・初年次教育～

大学への入学が決定した後から大学1年生の間に大学では、入学前教育、リメディアル教育、初年次教育と、大学の学びへの円滑な移行を支援する取り組みが行われている。各実施率は、入学前教育が73.1%、入学後のリメディアル教育が43.9%であり、両方実施している大学が36.2%*である。初年次教育は89.6%と、ほとんどの大学で実施されている（図4-2、図4-12、図4-16）。

入学前教育・初年次教育のねらいと効果

入学前教育と初年次教育についてそのねらいと効果をたずねた。入学前教育は「入学までの学習習慣の維持」76.3%（推薦・AO入試合格者への入学前教育実施学科に占める割合）が最も高く、次いで「高校までの基礎学力の補強・向上」が68.0%と高い（図4-4）。多くの学科でリメディアル教育としての役割も担っていることがわかる。特に「理工」系統の学科では、86.5%が「基礎学力の補強・向上」をねらいとしている（図4-5）。一方、初年次教育については、「大学生活への円滑な移行の支援」89.6%（初年次教育実施学科に占める割合）、「大学での学びへの動機づけ」が82.4%と高くなっているが、多くの項目で選択率が高く、様々なねらいをもって実施されている（図4-17）。

前出の入学前教育の2つのねらいに対する効果をみると、いずれも「効果が得られている」（「十分に効果が得られている」＋「ほぼ効果が得られている」）が5割弱、「わからない」との回答も2割弱ある（図4-4）。「わからない」の回答が多いのは、「入学前教育の成果と課題の検討」が5割弱でしか実施されていないことにもよるだろう（図4-8）。一方、初年次教育については、いずれのねらいに対しても「効果が得られている」が半数を超え、「大学生活への円滑な移行の支援」については92.9%が「効果が得られている」と回答している（図4-17）。全般にうまくいっているところが多いようである。

リメディアル教育の実施状況

リメディアル教育の実施率が高いのは、「理工」（59.1%）、「農水産」（51.8%）、「医・薬・保健」（48.9%）といった理系の学科である（図4-12）。これらのうち、サンプル数の多い「理工」「医・薬・保健」について実施教科をみていくと、「理工」で実施率の最も高い教科・科目が「数学」、「医・薬・保健」は「生物」である（図4-15）。入学前教育の実施状況も同様にこれらの教科が高い（図4-7）。

一方、大学に、高校生のうちに学んでおく必要性のある教科をたずねた結果をみると、「かなりの程度学んでおく必要がある」との回答率が高いのも、「理工」は「数学」86.2%、「医・薬・保健」で「生物」58.9%であった（図2-5）。これらの教科はそれぞれの専門分野を学ぶ基礎となる重要な教科であることがわかる。このような理系の教科の補習が特に必要となっている背景には、積み上げ型の教科の特性や高校での理科の履修状況の違いなど理系特有の事情もあるが、「医・薬・保健」の「生物」は、今回の結果にもあるように、入学者の受験割合が少ないことも一因であろう（図2-5）。

また、大学入学者選抜の課題に目を転じると、「学力が足りない学生も合格させざるを得ない」との回答が47.9%（「とてもそう」＋「まあそう」の%、以下同）、「志願者数確保のため、入試科目を減らさざるを得ない」も24.0%と4分の1の学科が肯定している（図2-3）。このような状況がある限り、リメディアル教育が減ることはないだろう。今後さらに、大学が高校卒業者のみならず、留学生や社会人の受け入れを拡大していくのであれば、そうした多様な学習歴をもつ入学者に対応する意味でも、リメディアル教育の重要性は一層増していくものと思われる。

（ベネッセ教育総合研究所 研究員 吉本真代）

* 報告書中に図示はしていない。

4-1. 入学前教育の実施状況

入学前教育として最も多く実施されているのは、添削付きの学習課題の提出。

入学前教育の実施の有無を、入学予定者の入試方法別にたずねたところ、推薦入試による入学者に対しては全体の63.7%、AO入試による入学者に対しては全体の44.0%が実施している(図4-1)。これをそれぞれその入試方法の実施学科に占める割合でみると、推薦入試実施学科の69.6%、AO入試実施学科の79.4%が入学前教育を実施している。次に、それらの回答から、いずれかの対象に対して1つでも入学前教育を実施している割合を算出すると、73.1%であった(図4-2)。

推薦入試またはAO入試による入学者向けに入学前教育を実施している学科(1,402学科)に対して、実施内容をたずねた結果が図4-3である。最も多かったのが「学習課題の提出(添削あり)」(61.9%)であった。さらに、その受講が必須か否かについては、65.0%で全員に必須として課している。

Q 貴学科では、どのような学生を対象にして入学前教育を実施していますか。

図4-1 入学前教育の対象者別実施率(全体) **大学**

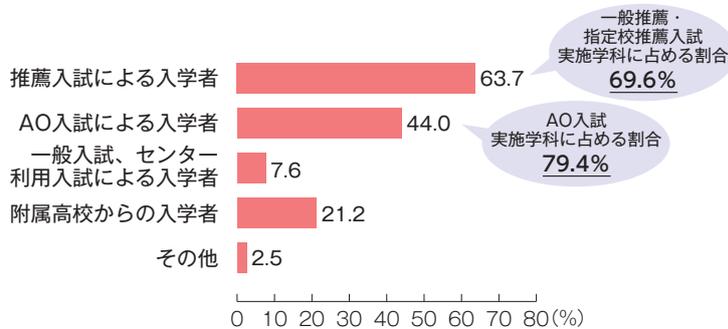
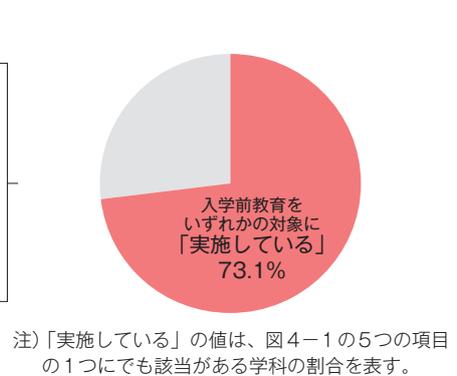


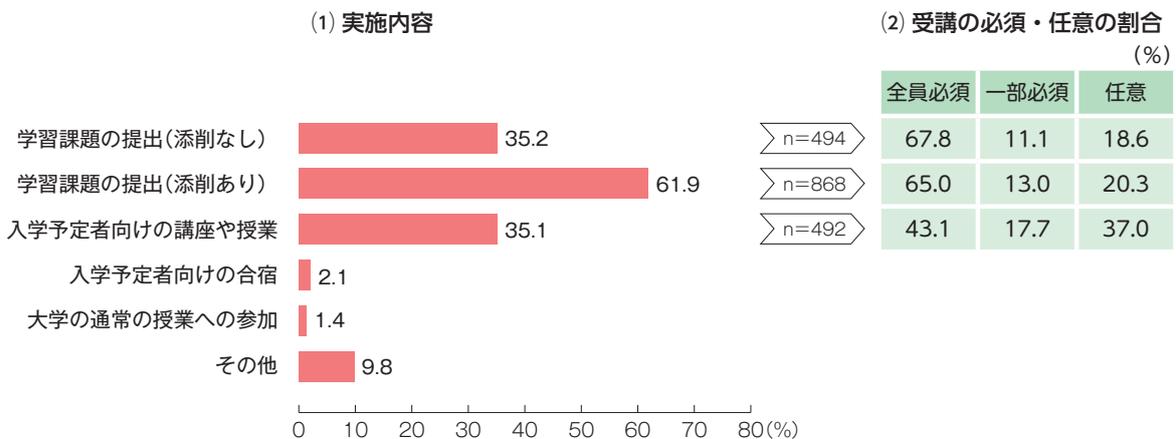
図4-2 入学前教育の実施率(全体) **大学**



Q 前問で「推薦入試による入学者」または「AO入試による入学者」に○をつけた方にお聞きます。推薦入試、AO入試による早期合格者に対して、貴学科ではどのような入学前教育のプログラムを実施していますか。

- 1) 実施しているものすべてにチェックをつけてください。
- 2) また、実施していると答えたプログラムについては、合格者全員が必須かどうかもお答えください。

図4-3 入学前教育の実施内容(入学前教育実施学科のみ) **大学**



4-2. 入学前教育のねらい

「入学までの学習習慣の維持」が76.3%、「高校までの基礎学力の補強・向上」が68.0%。

入学前教育のねらいとして最も高かったのは「入学までの学習習慣の維持」(76.3%)、次いで「高校までの基礎学力の補強・向上」(68.0%)、「大学での学びへの動機づけ」(60.3%)と続く(図4-4)。これを4つの学科系統別にみると、「学習習慣の維持」はどの学科系統でも7割を超えている。それに対して「高校までの基礎学力の補強・向上」は、「理工」「医・薬・保健」で高く、「大学での学びへの動機づけ」は「人文科学」「社会科学」で高くなっている(図4-5)。

次に、それぞれのねらいに対する効果を見ると、「大学での学びへの動機づけ」は60.3%が「効果が得られている」(「十分に効果が得られている」+「ほぼ効果が得られている」、以下同)と感じており、「学習習慣の維持」や「基礎学力の補強・向上」もそれぞれ47.2%、43.9%が効果を感じている(図4-4)。

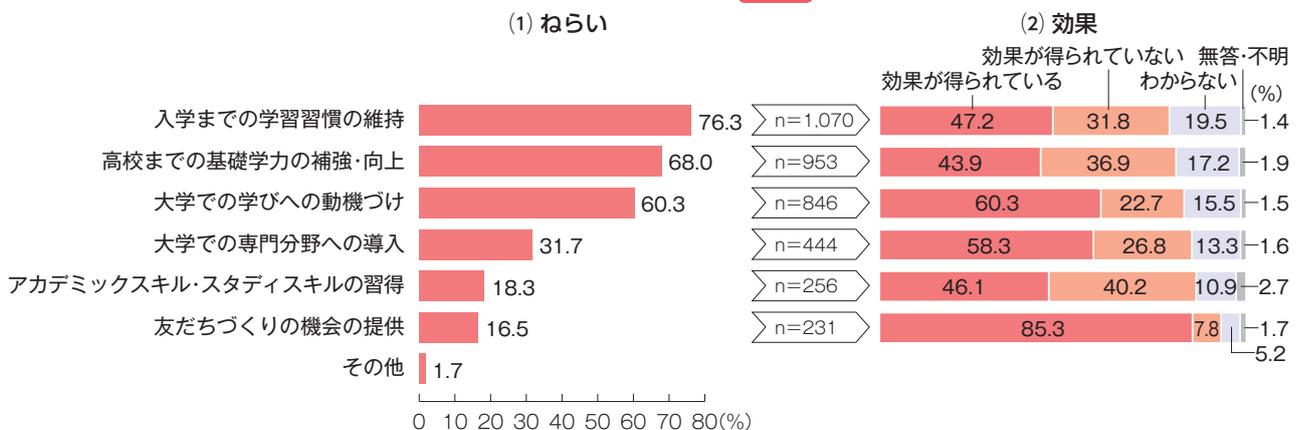
Q

貴学科の入学前教育では、

(1) どのようなことをねらいとしていますか。

(2) ねらいとして選択したものについて、どの程度効果が得られていると思いますか

図4-4 入学前教育のねらいと効果(入学前教育実施学科) **大学**

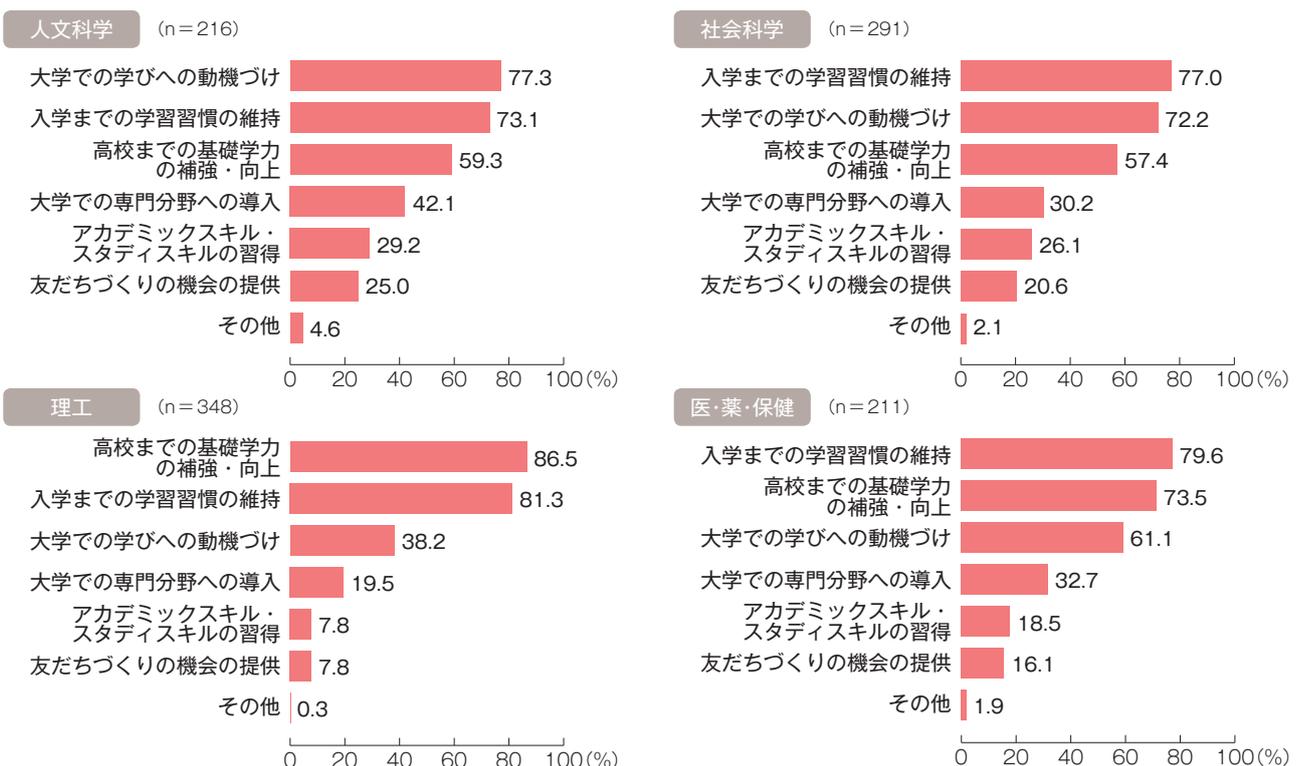


注1) 「(1)ねらい」は、複数回答。注2) 「(1)ねらい」の対象は、推薦入試またはAO入試による入学者に入学前教育を実施している学科1,402件。

注3) □は「(2)効果」の質問のそれぞれの対象人数を表す。

注4) 「効果が得られている」は「十分に効果が得られている」+「ほぼ効果が得られている」の%、「効果が得られていない」は「あまり効果が得られていない」+「ほとんど効果が得られていない」の%を表す。

図4-5 入学前教育のねらい(入学前教育実施学科の学科系統別) **大学**



注) 対象は、推薦入試またはAO入試による入学者に入学前教育を実施している学科。()内はサンプル数。

4-3. 入学前教育を実施している科目

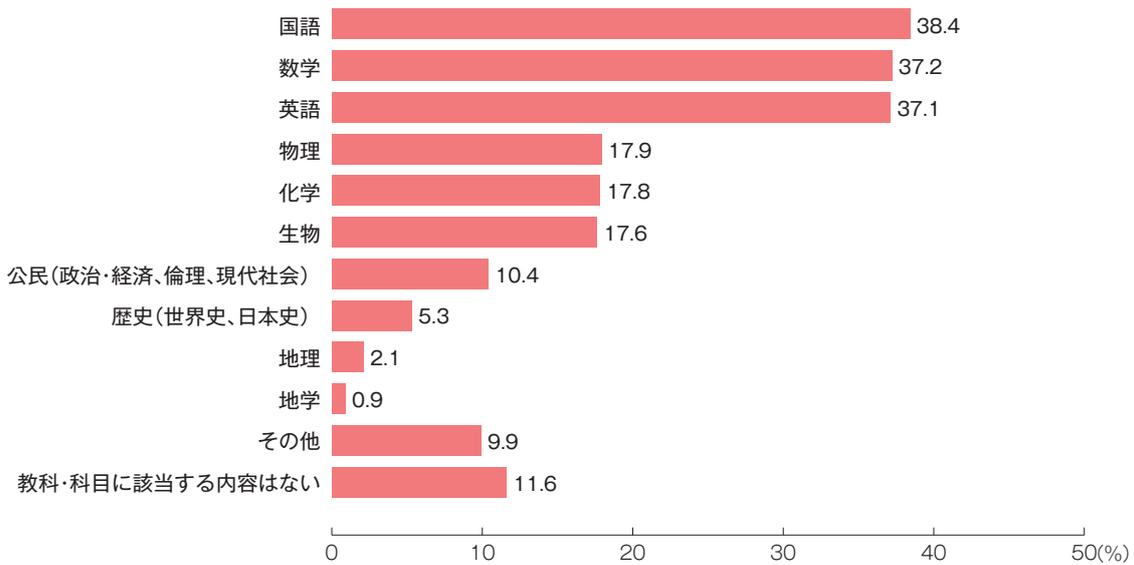
入学前教育の実施率が高い教科は、人文・社会科学では「国語」、理工で「数学」、「医・薬・保健」系統で「生物」。

入学前教育の内容を高校の教科・科目でみると、多いのが「国語」「数学」「英語」の順でいずれも4割弱の実施率である。これを学科系統別にみると、「理工」で「数学」が82.5%と顕著に高く、「医・薬・保健」では「生物」が57.8%と高い。「人文科学」「社会科学」では「国語」が55%程度で最も高くなっている。

Q

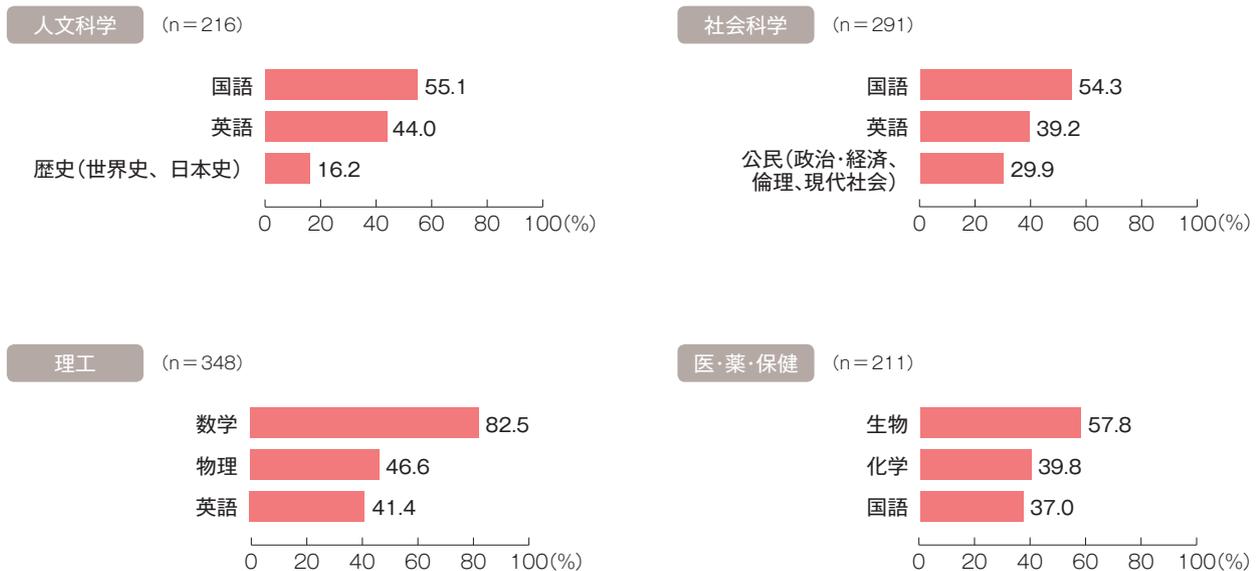
貴学科で入学前教育を実施している科目は、高校の教科・科目でいうとどれにあたりますか。

図4-6 入学前教育を実施している教科・科目(入学前教育実施学科) **大学**



注1) 複数回答。 注2) 対象は、推薦入試またはAO入試による入学者に入学前教育を実施している学科1,402件。

図4-7 入学前教育を実施している教科・科目(入学前教育実施学科の学科系統別) **大学**



注) 学科系統別の集計は、該当サンプル数の多い4学科系統のみとし、その他は省略している。

4-4. 入学前教育の実施状況

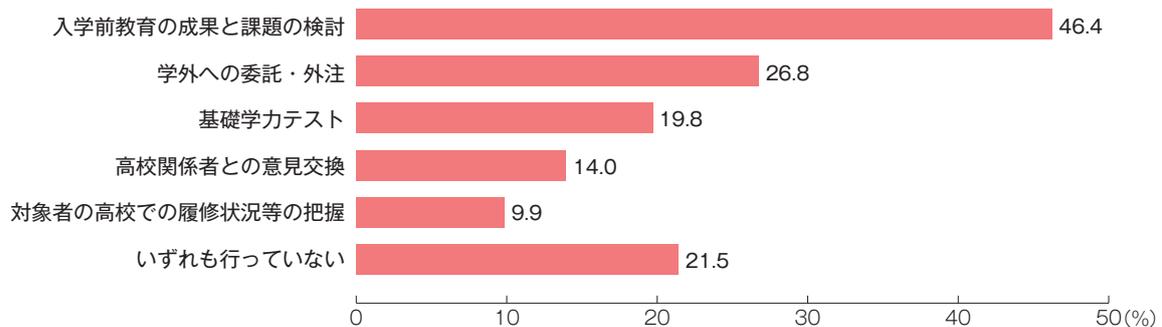
「入学前教育の成果と課題の検討」を実施しているのは約半数。

入学前教育の実施にあたっては「高校関係者との意見交換」14.0%、「対象者の高校での履修状況等の把握」9.9%と、高校との情報交換はあまり行われていない。

Q

貴学科では、入学前教育の検討・実施にあたって、次のようなことを行っていますか。

図4-8 入学前教育の検討・実施にあたって行っていること(入学前教育実施学科) **大学**



注1) 複数回答。注2) 対象は、推薦入試またはAO入試による入学者への入学前教育を実施している学科1,402件。

4-5. 入学前教育の課題

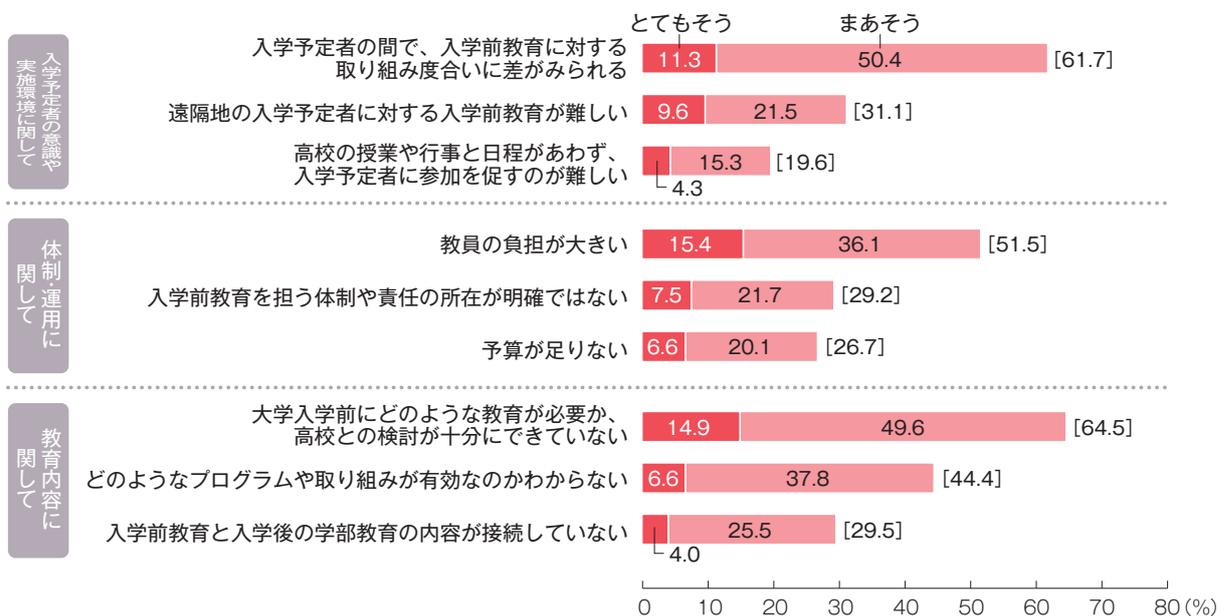
「大学入学前にどのような教育が必要か、高校との検討が十分にできていない」が64.5%。

入学前教育の課題として掲げた項目のうち肯定割合が半数を超えたのは、「大学入学前にどのような教育が必要か、高校との検討が十分にできていない」64.5%（「とてもそう」+「まあそう」、以下同）、「入学予定者の中で、入学前教育に対する取り組み度合いに差がみられる」61.7%、「教員の負担が大きい」51.5%の3つの項目であった。

Q

貴学科での入学前教育について、どのようなことを課題に感じていますか。

図4-9 入学前教育の課題(入学前教育実施学科) **大学**



注1) 対象は、推薦入試またはAO入試による入学者への入学前教育を実施している学科1,402件。

注2) []内の値は、「とてもそう」+「まあそう」の%。

注3) 選択肢は、「とてもそう」「まあそう」「あまりそうでない」「まったくそうでない」の4段階。

4-6. 入学前教育の高校からの評価

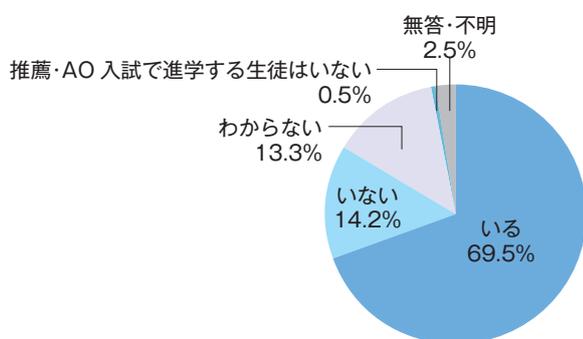
入学前教育を受けている生徒のいる高校の8割で「大学にはもっと入学前教育を充実させてほしい」と感じている。

高校に対して、推薦・AO入試による早期大学合格者のうち、合格した大学が提供する入学前教育を受けている生徒の有無についてたずねたところ、7割が「いる」と回答している(図4-10)。続いて、「いる」との回答校に対し、入学前教育に対する意識をたずねた結果が図4-11である。「入学前教育を受けた生徒の学習意欲が上がる」に「そう思う」(「とてもそう思う」+「まあそう思う」、以下同)との回答が83.0%、「大学にはもっと入学前教育を充実させてほしい」も81.7%と高く、「とてもそう思う」だけでも29.7%と高い値となっている。一方で、「対応する高校教員の負担が大きい」と感じている高校も23%存在する。

Q

貴校には、推薦・AO入試で早期に進学先が決まった3年生の中で、合格した大学が提供する入学前教育を受けている生徒がいますか。

図4-10 入学前教育を受けている生徒のいる高校(全体) **高校**

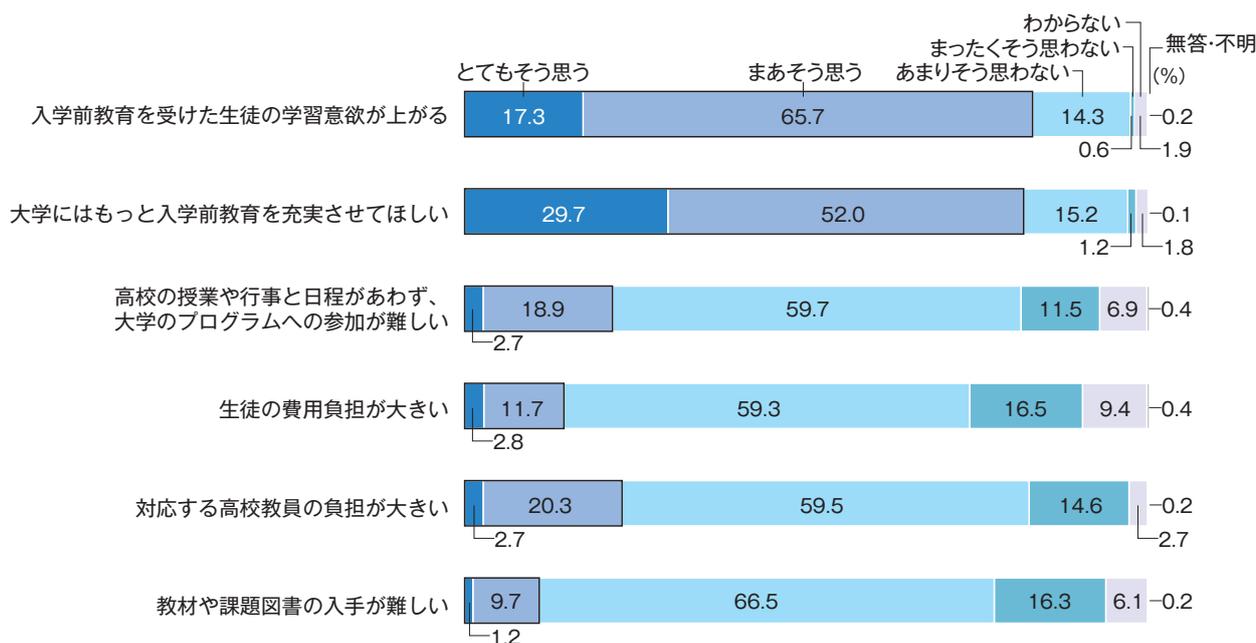


注) 全体(n = 1,228)に占める割合を算出している。

Q

(前問で「いる」を選んだ方にお聞きます。貴校の生徒が受けている大学の「入学前教育」について、どのように思っていますか。

図4-11 入学前教育に対する意識(入学前教育を受けている生徒の「いる」高校) **高校**



注) 対象は、入学前教育を受けている生徒が「いる」と回答した854件。

IV

移行期の教育活動(入学前教育・リメディアル教育・初年次教育)

4-7. リメディアル教育の実施状況

理工系学科でリメディアル教育の実施率が6割。

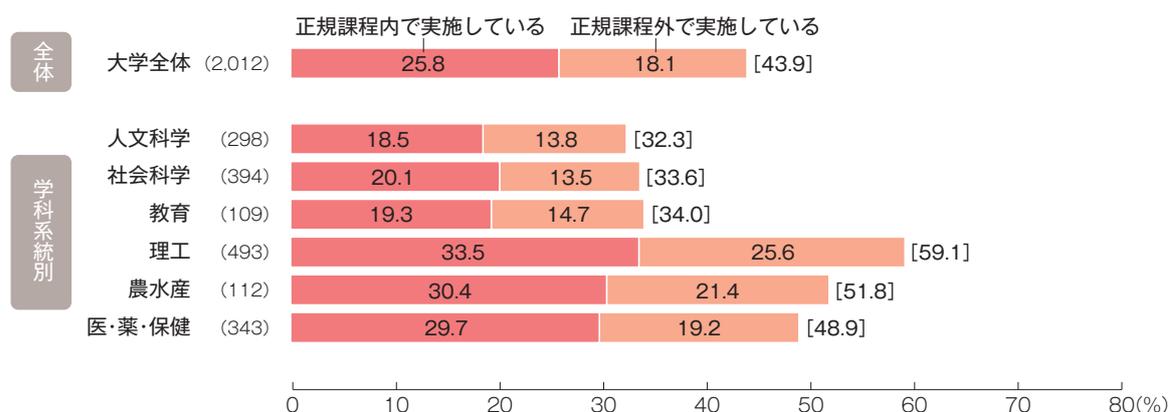
入学後のリメディアル教育については、実施率が大学全体の43.9%、そのうち「正規課程内」での実施が25.8%、「正規課程外」が18.1%である。学科系統別では「理工」が6割と高い(図4-12)。

次に、実施大学に対して、リメディアル教育の現状と課題についてたずねた結果が図4-13である。6割弱の学科で、「リメディアル教育に対する学生の意欲が低い」(58.2%)、「実施のためのスタッフが十分にいない」(57.0%)といった課題を感じている。

Q 貴学科では、リメディアル教育を実施していますか。

図4-12 リメディアル教育の実施率(全体・学科系統別)

大学

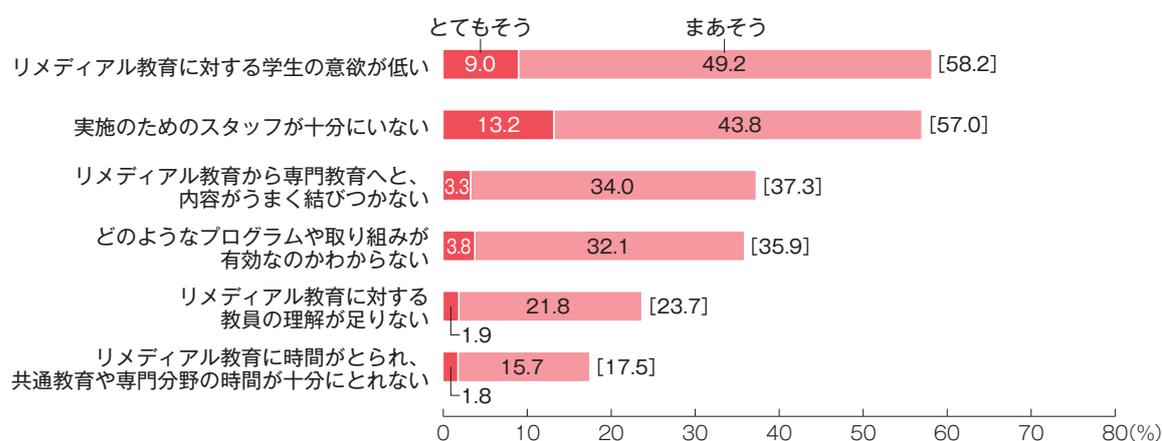


注) []内の値は、「正規課程内で実施している」+「正規課程外で実施している」の%。

Q 貴学科のリメディアル教育における現状あるいは課題についてお聞きます。それぞれあてはまるもの1つに○をつけてください。

図4-13 リメディアル教育の現状と課題(リメディアル教育実施学科)

大学



注1) 対象は、リメディアル教育を「正規課程内で実施している」「正規課程外で実施している」と回答した885件。

注2) []内の値は、「とてもそう」+「まあそう」の%。

注3) 選択肢は、「とてもそう」「まあそう」「あまりそうでない」「まったくそうでない」の4段階。

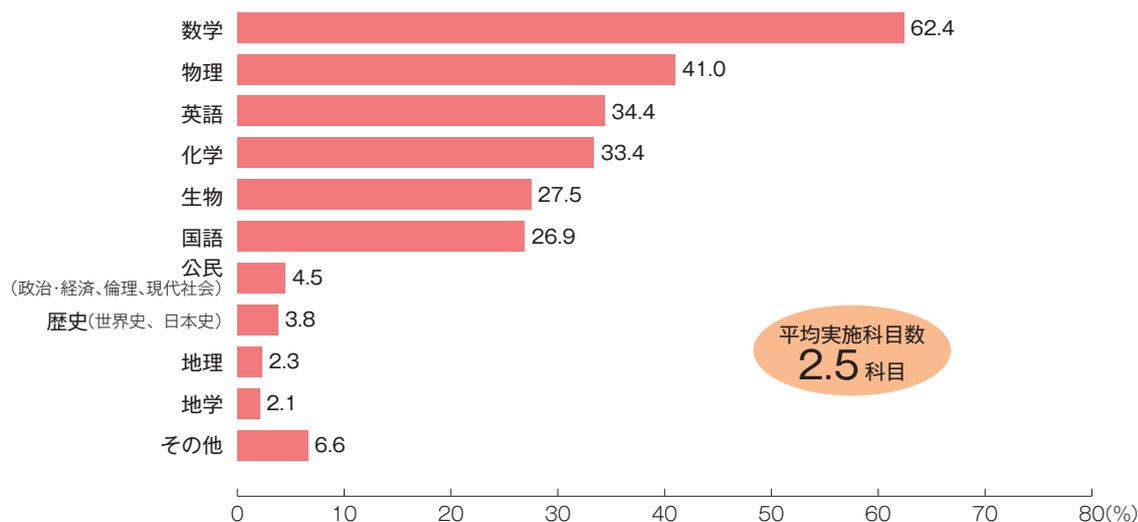
リメディアル教育の実施率の高い教科は「数学」

リメディアル教育を実施しているのは、高校の教科・科目でいうと全体では「数学」が最も多く62.4%、次いで物理41.0%と続く。これを4つの学科系統別にみると、「数学」が高いのは「理工」と「社会科学」で、「理工」では85.9%におよぶ。「医・薬・保健」では、「生物」が72.0%と最も高い。また、「医・薬・保健」では4学科系統の中で平均実施科目数が最も多くなっている。

Q

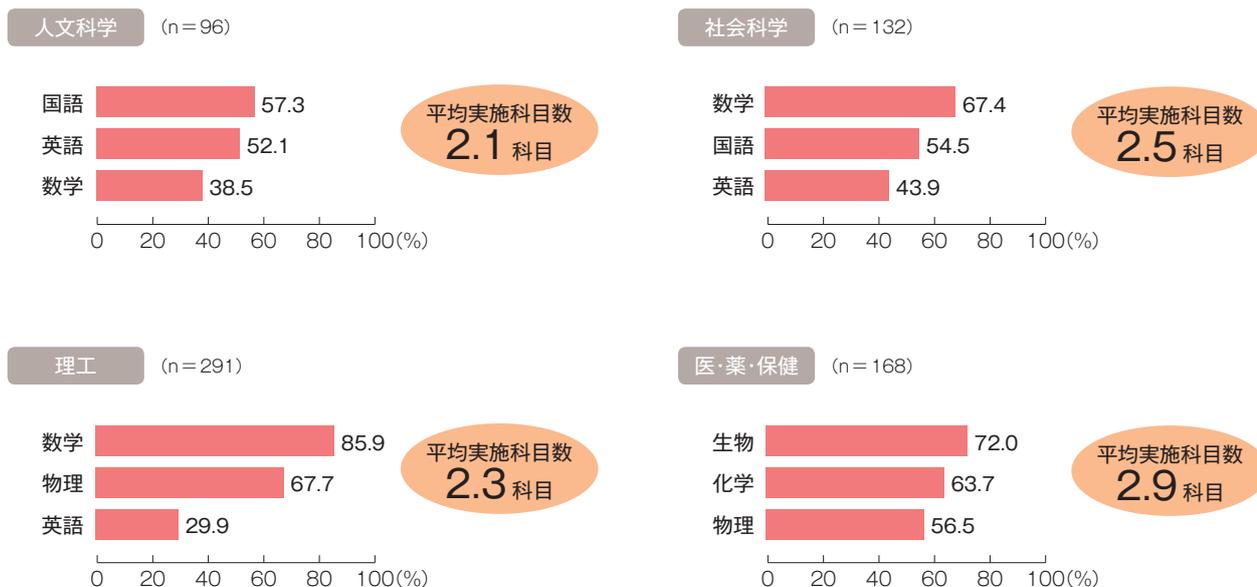
以下のうち、貴学科でリメディアル教育を実施している科目は、高校の教科・科目でいうとどれにあたりますか。

図4-14 リメディアル教育の実施教科(リメディアル教育実施学科) **大学**



注1) 複数回答。 注2) 対象は、リメディアル教育を「正規課程内で実施している」「正規課程外で実施している」と回答した885件。

図4-15 リメディアル教育の実施教科(リメディアル教育実施学科の学科系統別) **大学**



注1) 平均実施科目数は、リメディアル教育の実施教科・科目として掲げた11科目(「その他」含む)のうちの選択数の平均値。
注2) 学科系統別の集計は該当サンプル数の多い4学科系統のみとし、その他は省略している。

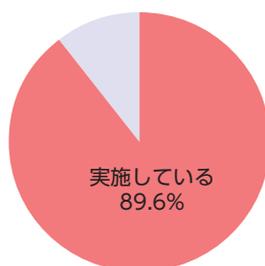
4-8. 初年次教育の実施状況

初年次教育は様々なねらいをもって、9割の学科で実施されている。

初年次教育の実施率は89.6%でほとんどの大学で実施されている。初年次教育のねらいとして、「大学生活への円滑な移行の支援(オリエンテーション、履修指導、自校教育など)」(89.6%)、「大学での学びへの動機づけ」(82.4%)が8割を超え、次いで「コミュニケーションスキルの育成」(71.8%)、「専門分野への導入」(70.2%)が高くなっている。各ねらいに対して効果をたずねた結果では、いずれの項目でも「効果が得られている」(「十分に効果が得られている」+「ほぼ効果が得られている」、以下同)が半数を超え、「大学生活への円滑な移行の支援」は92.9%に達している。

Q 貴学科では、初年次教育を実施していますか。

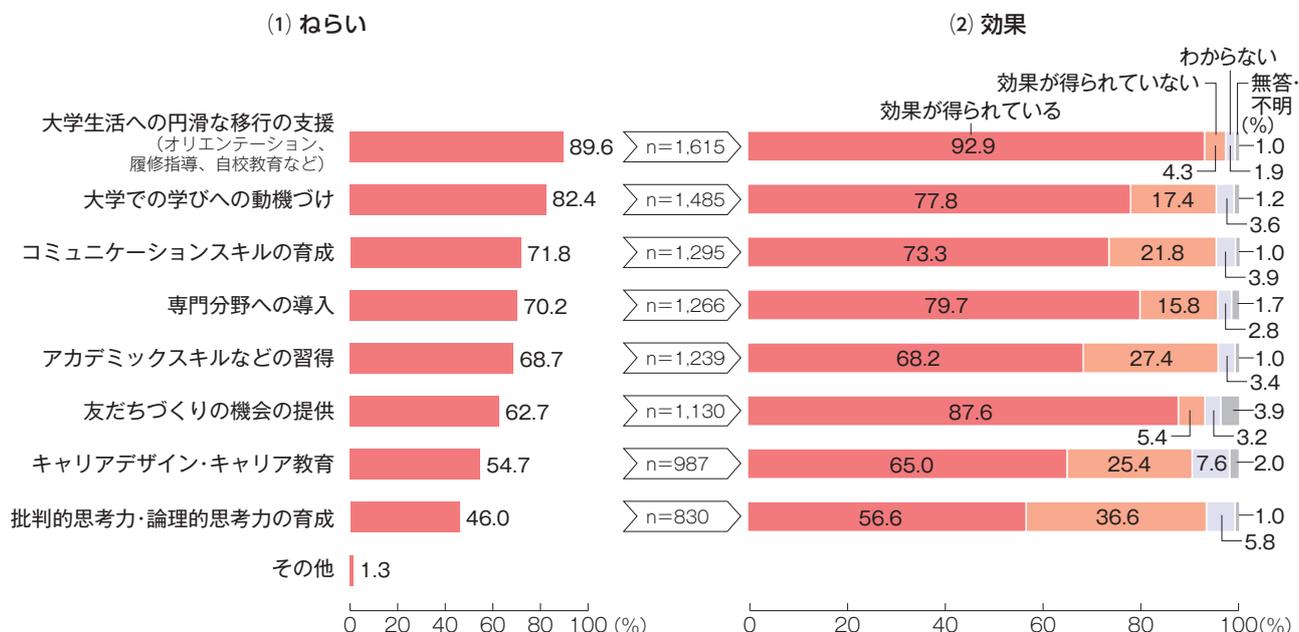
図4-16 初年次教育の実施率(全体) **大学**



注) 対象は、全体の2,012件。

Q 貴学科では1年次に、初年次教育として
(1)どのようなことをねらいとしていますか。
(2)ねらいとして選択したものについて、どの程度効果が得られていると思いますか。

図4-17 初年次教育のねらいと効果(初年次教育実施学科) **大学**



注1) 「(1)ねらい」は、複数回答。

注2) 「(1)ねらい」の対象は、初年次教育を「実施している」と回答した1,803件。

注3) ◻は「(2)効果」の質問の対象人数を表す。

注4) 「効果が得られている」は「十分に効果が得られている」+「ほぼ効果が得られている」の%、「効果が得られていない」は「あまり効果が得られていない」+「ほとんど効果が得られていない」の%を表す。

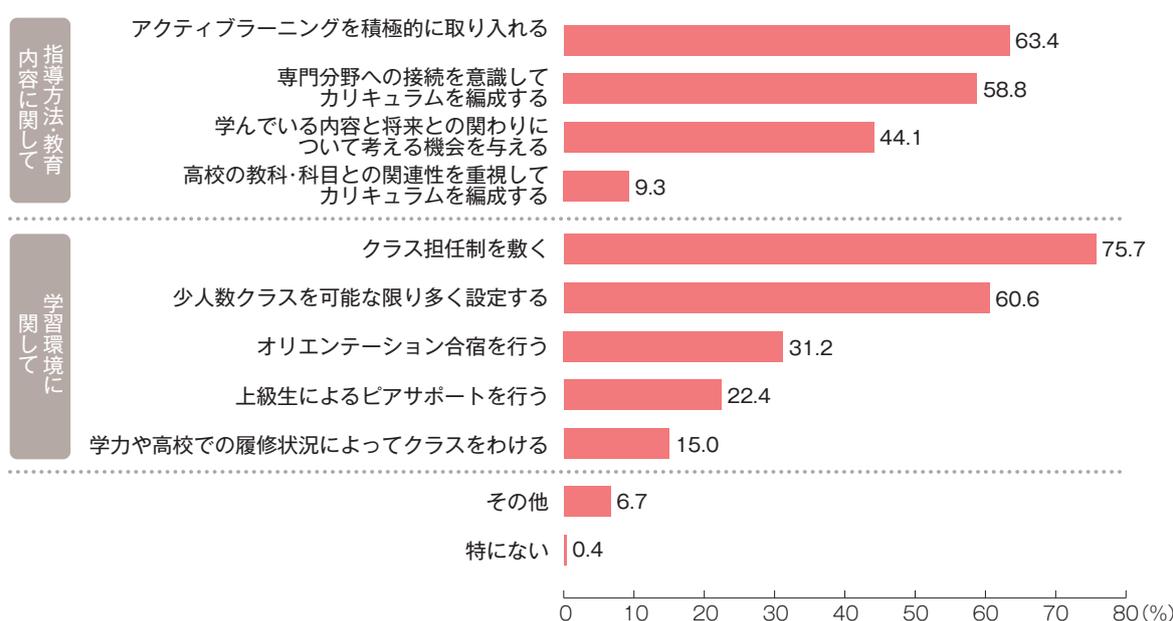
初年次教育実施学科の6割でアクティブラーニングを積極的に取り入れている。

初年次教育の実施にあたり、指導方法や教育内容に関して、「アクティブラーニングを積極的に取り入れる」(63.4%)、「専門分野への接続を意識してカリキュラムを編成する」(58.8%)は、半数を超えて実施されている。学習環境に関しては、「クラス担任制を敷く」(75.7%)、「少人数クラスを可能な限り多く設定する」(60.6%)が多くの学科で実施されている(図4-18)。

初年次教育の課題としては、「教員間で初年次教育における指導力にばらつきがある」(51.1%)、「実施のためのスタッフが十分にいない」(48.8%)といった「人」に関することがらが相対的に高い(図4-19)。

Q 貴学科の、初年次教育では、1年生の大学での学習・生活への円滑な導入を促し、効果を高めるために、どのような工夫をしていますか。

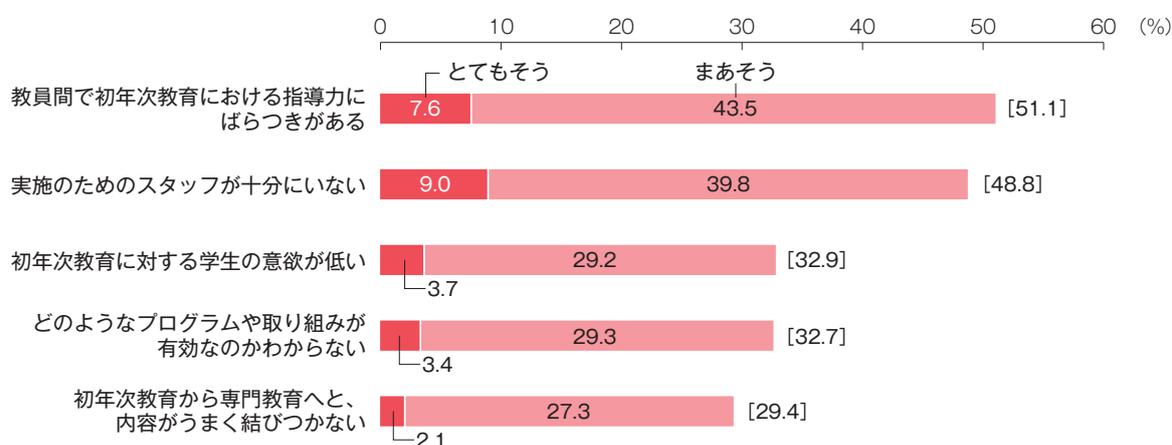
図4-18 初年次教育実施上の工夫(初年次教育実施学科) **大学**



注1) 複数回答。 注2) 対象は、初年次教育を「実施している」と回答した1,803件。

Q 貴学科の初年次教育における現状あるいは課題についてお聞きます。

図4-19 初年次教育の現状と課題(初年次教育実施学科) **大学**



注) 対象は、初年次教育を「実施している」と回答した1,803件。

高校と大学の連携や接続のあり方

大学入試制度改革については大枠で賛成

国で議論している入試制度改革の柱である「共通入試を基礎とした上で各大学が多面的な評価を加えて実施する入学者選抜」に対しては高校・大学ともに賛成が6割以上に達し、制度改革案の大枠についての賛意が示された（図5-11）。ただし「現在のセンター試験の廃止」は高校側で賛成2割、反対4割と反対が多い。同様に「基礎レベル・発展レベルの2種類の『達成度テスト』導入」は、高校側の反対が高かった。多くの高校ではセンター入試対策が学力向上策として定着してきた背景があるのかもしれない。『『達成度テスト（基礎レベル）』の推薦・AO入試への活用』では、高・大ともに賛意が高く、推薦・AO入試における学力担保措置としての期待が高い。達成度テストの複数回受験は特に大学で賛成4割・反対2割、高校では賛成3割、反対4割と高大の認識が分かれた。今後、高校現場の懸念を踏まえた丁寧な説明を行う必要がある。

高校生と大学をつなぐ新たな仕組みや入学後の選択

高校教育多様化、高等教育人口拡大の必然として、大学進学者の多様化が進んだ。こうした中では、入試制度改革のみならず、高校教育・大学教育における様々な改革も高大接続の課題である。その一つが高校教育で一部大学レベルの教育を行い、それを大学の単位として認定するアドバンストプレースメント（AP）である。調査結果では、「やる気のある高校生に、大学の授業を受けられるようにしたほうがよい」との比率が高校で7割、大学で6割台の賛意を集めている（図5-6）。この結果を見ると、意欲・能力ともに秀でた高校生と大学をつなぐ仕組みが課題として認識されつつあり、AP導入を議論する土壌はできつつあるようだ。しかし現状では、大学から高校への出張授業は9割以上が実施しているものの「大学での通常授業を高校生が履修・聴講できる制度」を持ち、入学後の単位として付与している大学は

15%に過ぎない（図5-1）。我が国なりのAPの仕組みをどう創出するか実効性のある政策・実践が待たれる。

一方指摘されているのが、大学で学ぶ意識の曖昧な学生の入学と入学後の不適応・退学危機である。この現実はどう対処するか。調査では、学内での転部や、他大学への編入・転学に対して高大ともに半数前後の賛意が得られた（図5-6）。また、高校の7割、大学の6割と、ともに高い賛意を得たのが「入学の段階では細かく専門に分けず、大学入学後に専門を選べるようにしたほうがよい」との方向性である。今日の大学生の学力・学習意欲の実状を踏まえ、大学生を「主体的な学習者へと導く方策」としてレイトスペシャリゼーションの必要性が増している。

高校教員と大学教員の交流拡大が求められている

「高校教員と大学教員の交流の機会を増やしたほうがよい」との高大の交流拡大に対して高校の8割以上、大学の7割以上と高い比率で賛意が得られた（図5-6）。大学の5割、高校の4割5分は「高校教員と大学教職員の意見交換」を行っており交流の機会はそれなりに確保されている（図5-3、図5-4）。しかし大学側が高校の「学習内容や履修状況を知る取り組み」はわずか1割であり、高校が「大学の学習や研究の内容を知る取り組み」は3割弱である。大学側が高校に対して自学を紹介する機会があっても、高校生の学びの実状を知り自校の教育に活かす取り組みには乏しいのではないか。この状況をどう乗り越えて大学教育の充実につなげるか。また高校側も（第Ⅱ章でみたとおり）半数が「現状の大学からの情報は分かりづらい」と考えていることから、大学との交流・対話を今以上に深めることで、形式的な大学情報の提供を越えて、進路・学習指導をより充実させたい思いがあるのかもしれない。いずれにしても、大学と高校が連携し教育を充実する糸口として相互交流の拡大が求められている。

（ベネッセ教育総合研究所 主任研究員 樋口 健）

5-1. 高大連携活動の実施状況

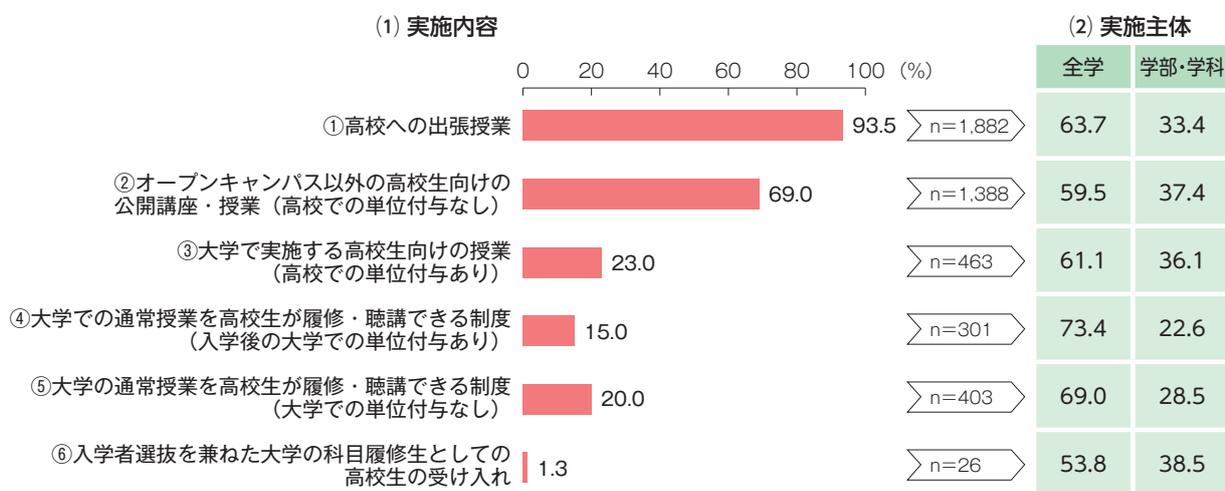
高校生の大学の通常授業の履修・聴講が入学後に大学の単位となる制度を15%が実施。

高大連携活動としてたずねた項目のうち、多く実施されているのは「高校への出張授業」93.5%、次いで「オープンキャンパス以外の高校生向けの公開講座・授業(高校での単位付与なし)」69.0%である。実施主体はいずれも「全学」が多く、それぞれ63.7%、59.5%と半数を超えている(図5-1)。次に、「高校生向けの講座・授業」と、「大学での通常授業の履修・聴講」に分けて、設置者・学科系統別にみたのが、図5-2である。高校生向けの講座・授業は設置者別の実施率にあまり違いはなく、学科系統別では単位付与の有無にかかわらず相対的に「理工」が高い。大学での通常授業の履修・聴講に対して入学後に単位を与える制度は、全体では15.0%が実施しており、私立では18.5%であった。

Q

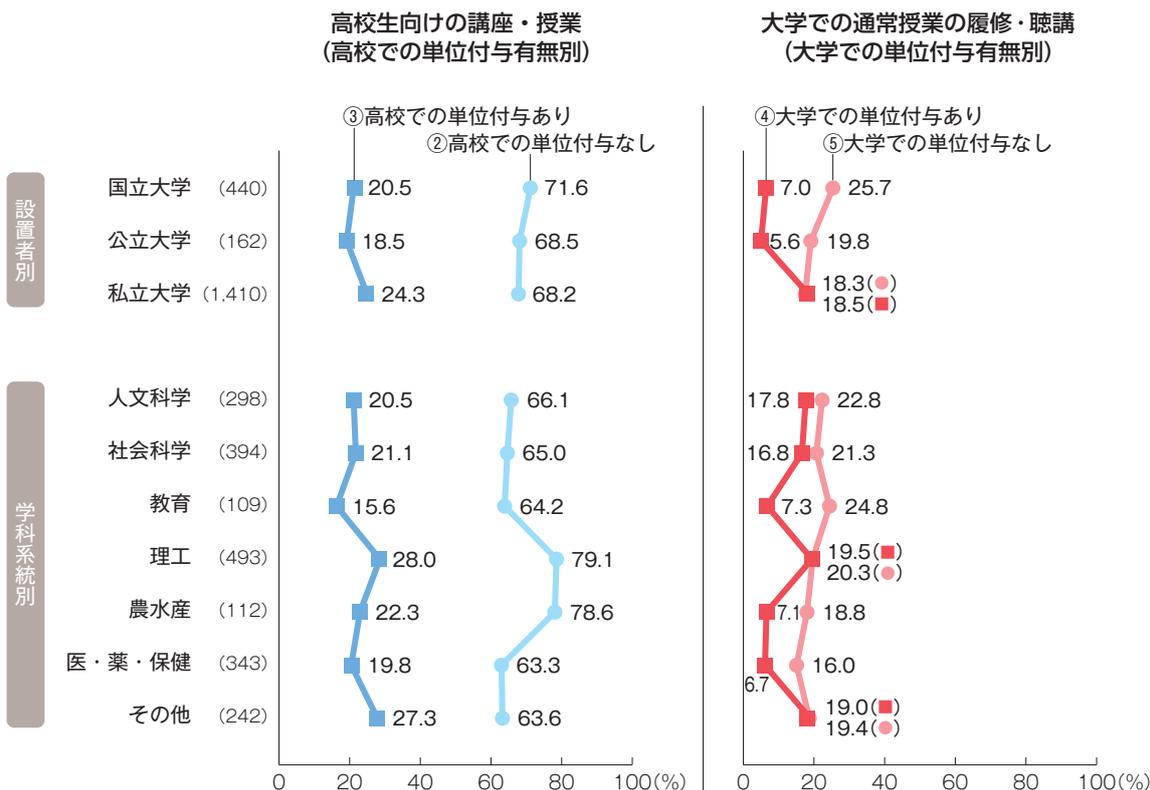
- 次に掲げる高大連携活動のうち、
- (1) 貴学科(学部)で実施しているもの、または全学で実施している活動に学科として参加しているものすべてにチェックをつけてください。
 - (2) 選んだものについて、実施主体は全学、学部・学科主体のどちらですか。

図5-1 高大連携活動の実施内容と実施主体(全体) **大学**



注) ◻は「(2)実施主体」の質問の対象人数を表す。

図5-2 高大連携活動の実施率—高校生向け講座・授業/大学の授業の履修・聴講別(設置者別・学科系統別) **大学**



注) ②③④⑤の番号は、図5-1の項目に対応している。

V
高校と大学の連携や接続のあり方

5-2. 高校と大学の交流

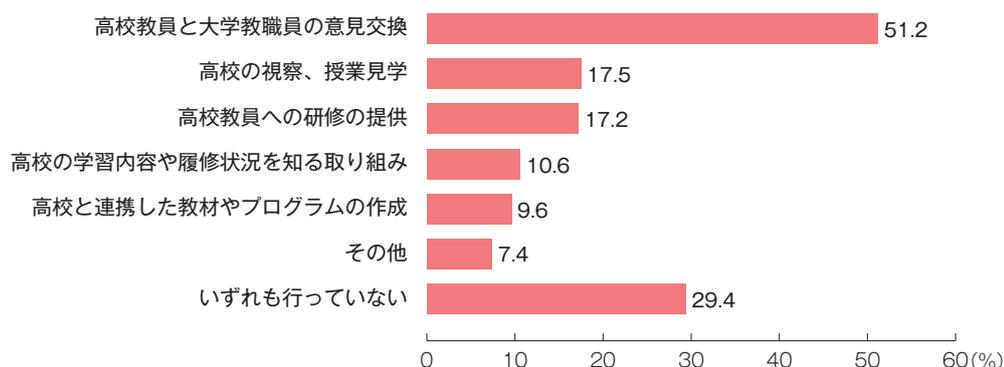
半数の大学(学科)が、高校教員との意見交換を行っている。

高校と大学の交流の状況を高校と大学それぞれにたずねた。大学の回答をみると、「高校教員と大学教職員の意見交換」は51.2%が実施しているが、「高校の学習内容や履修状況を知る取り組み」は10.6%にとどまる。また、3割は「いずれも行っていない」と回答している。一方、高校は、「高校教員による大学の見学」を58.4%が実施、「高校教員と大学教職員の意見交換」を44.2%が実施している。

Q

貴学科では、高大接続に関連して、次のようなことを行っていますか。

図5-3 高大接続に関する取り組み(全体) **大学**



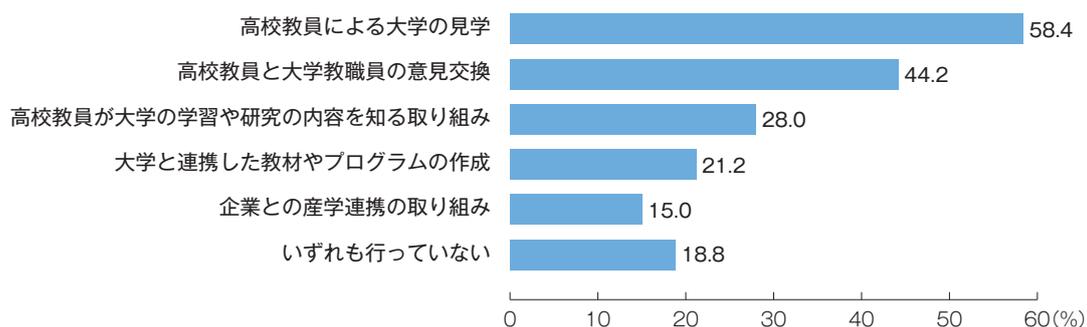
注1) 複数回答。

注2) 対象は、回答者全体2,012件。

Q

貴校では、進路指導や高大接続に関連して、次のようなことを行っていますか。

図5-4 高大接続に関する取り組み(全体) **高校**



注1) 複数回答。

注2) 対象は、回答者全体1,228件。

5-3. 高大接続の取り組みに関する課題

6割強の学科で「高大の接続・連携の必要性について、高校と大学の間で共通認識がない」と感じている。

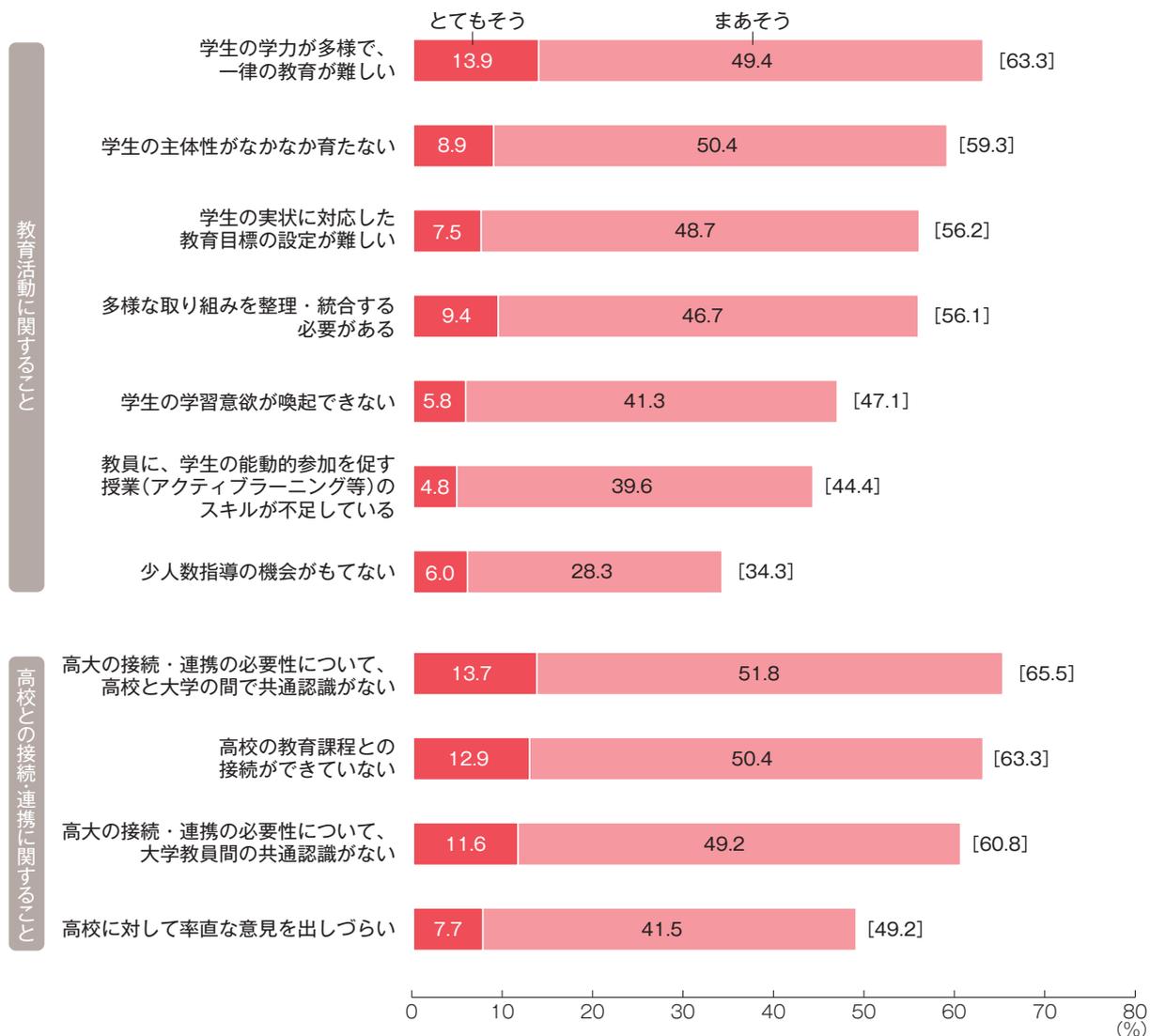
高校と大学の接続・連携に関する課題についてたずねたところ、教育活動に関しては、「学生の学力が多様で、一律の教育が難しい」に「そう」(「とてもそう」+「まあそう」、以下同)と回答した割合が63.3%、次いで「学生の主体性がなかなか育たない」が59.3%と高い。高校との接続・連携に関しては、「高大の接続・連携の必要性について、高校と大学の間で共通認識がない」が65.5%、次いで「高校の教育課程との接続ができていない」63.3%と高くなっている。

Q

貴学科における高大接続の活動全般について、次のようなことはあてはまりますか。

図5-5 高大接続の取り組みに関する課題認識(全体)

大学



V

高校と大学の連携や接続のあり方

5-4. 高校と大学の接続に関する今後のあり方

大学入学後に専門を選ぶなどの進路変更の柔軟化については高校で支持が高い。

高校と大学の接続に関する今後のあり方についてたずねた図5-6の項目のうち、もっとも多かったのは「高校教員と大学教員の交流の機会を増やしたほうがよい」大学74.7%、高校84.5%（「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%、以下同）、次いで「大学での進級や卒業の認定基準をもっと厳しくしたほうがよい」大学72.2%、高校79.6%であった。また、入学後に選択の自由度を高める方策としての「学内での学生の転部をもっとしやすくしたほうがよい」「他大学への編入・転学をもっとしやすくしたほうがよい」「入試の段階では細かく専門に分けず、大学入学後に専門を選べるようにしたほうがよい」（以下、募集単位の大くり化）はいずれも高校の方が10ポイント以上高くなっており、高校でよりその必要性を感じているようだ。さらに、募集単位の大くり化について、属性別にみると、学科系統では「社会科学」で支持が7割と高く、高校では普通科で支持が高い（図5-7）。

Q

高校と大学の接続に関する今後のあり方に関して、あなたはどのように思いますか。

図5-6 高校と大学の接続に関する今後のあり方(全体) 高校 大学

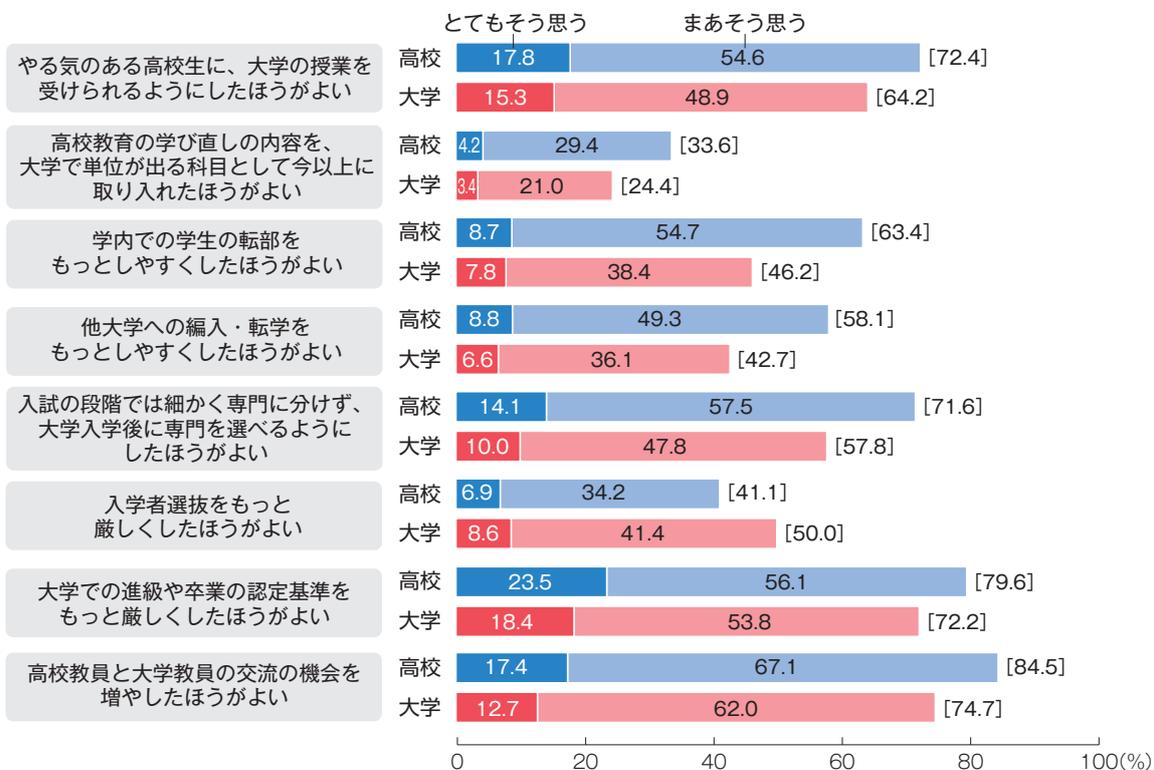
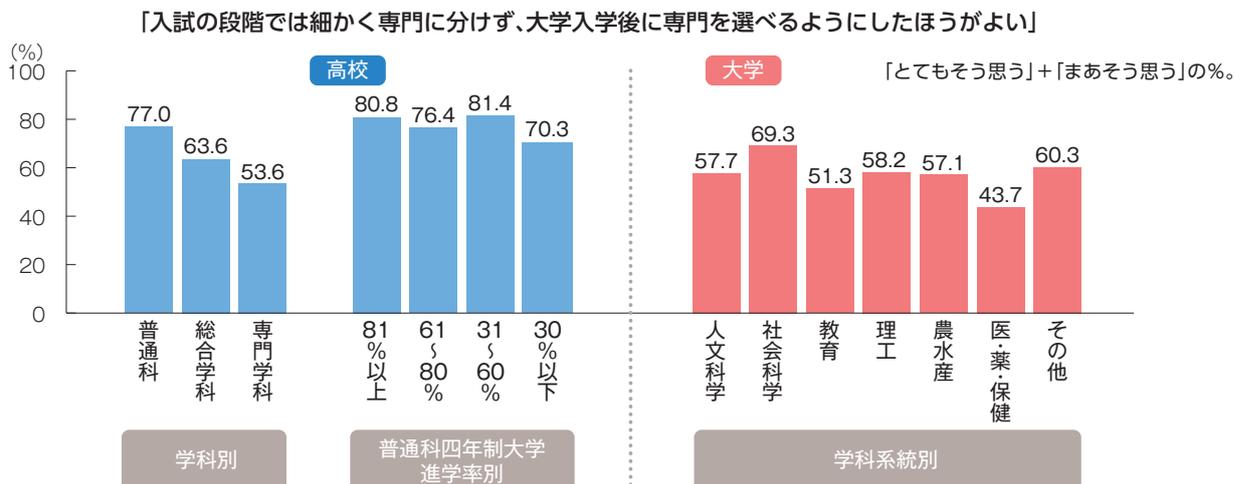


図5-7 募集単位の大くり化(学科別・普通科四年制大学進学率別、学科系統別) 高校 大学



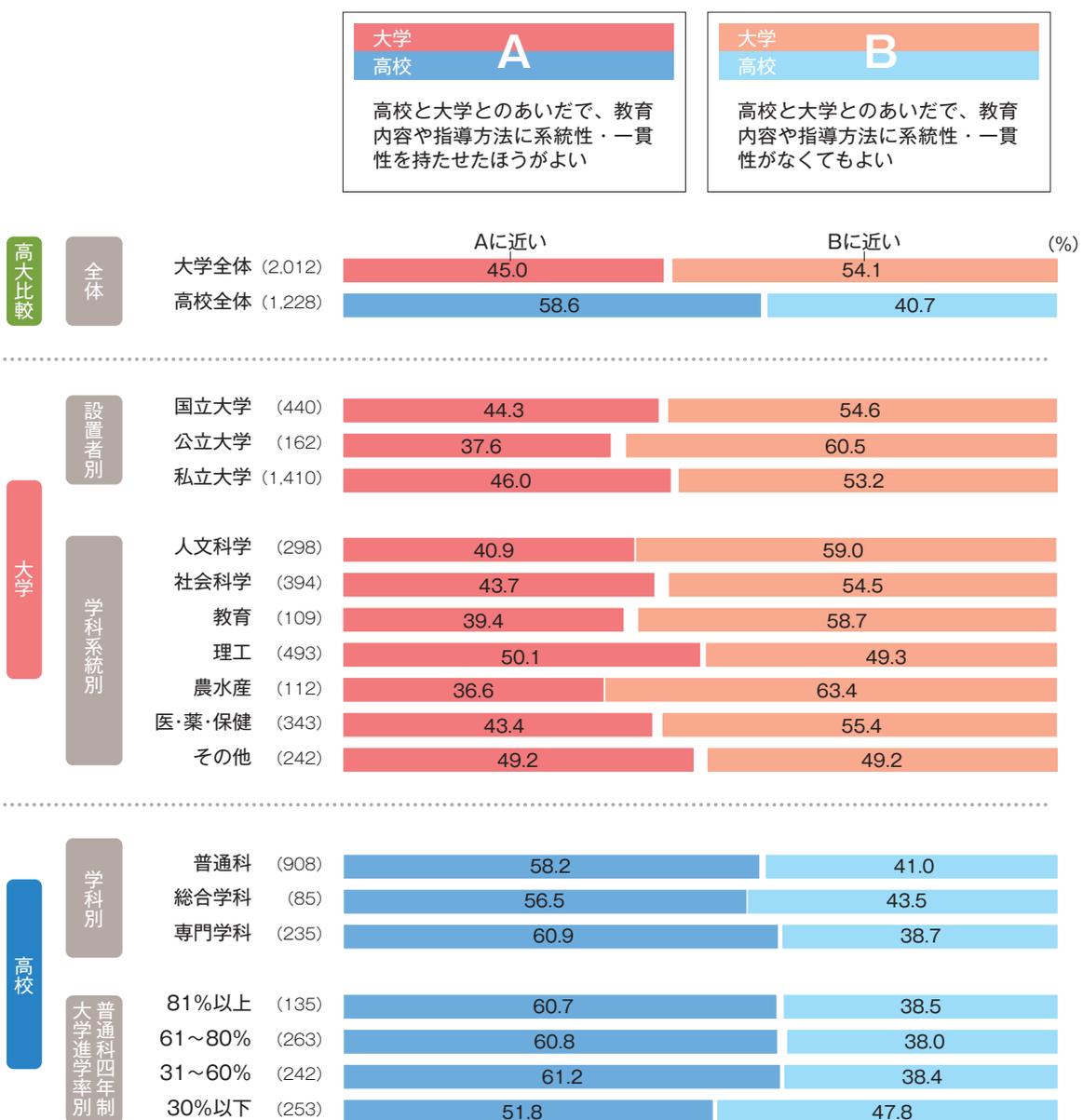
5-5. 高校・大学間の教育内容・方法の一貫性について

教育内容・指導方法に系統性・一貫性を持たせたほうがよいと考える割合は高校で高い。

高校・大学間の系統性・一貫性について、「A：教育内容や指導方法に系統性・一貫性を持たせたほうがよい」のか「B：教育内容や指導方法に系統性・一貫性がなくてもよい」のかについて、大学は「B：一貫性がなくてもよい」がやや高く、高校は6：4で「A：一貫性を持たせたほうがよい」の方が高かった。大学は設置者による大きな差はみられず、学科系統別には「理工」で「A：系統性・一貫性を持たせたほうがよい」が50.1%と半数に達している。一方、高校は学科別の違いはあまりみられないが、普通科の四年制大学進学率別では「30%以下」で「B：系統性・一貫性がなくてもよい」が約5割に増える。

Q あなたの意見はAとBのどちらに近いですか。

図5-8 教育内容や指導方法の系統性・一貫性に対する考え(全体・属性別) 高校 大学



注) 「Aに近い」は、「Aに近い」+「どちらかといえばAに近い」の%、「Bに近い」は、「Bに近い」+「どちらかといえばBに近い」の%を表す。

V

高校と大学の連携や接続のあり方

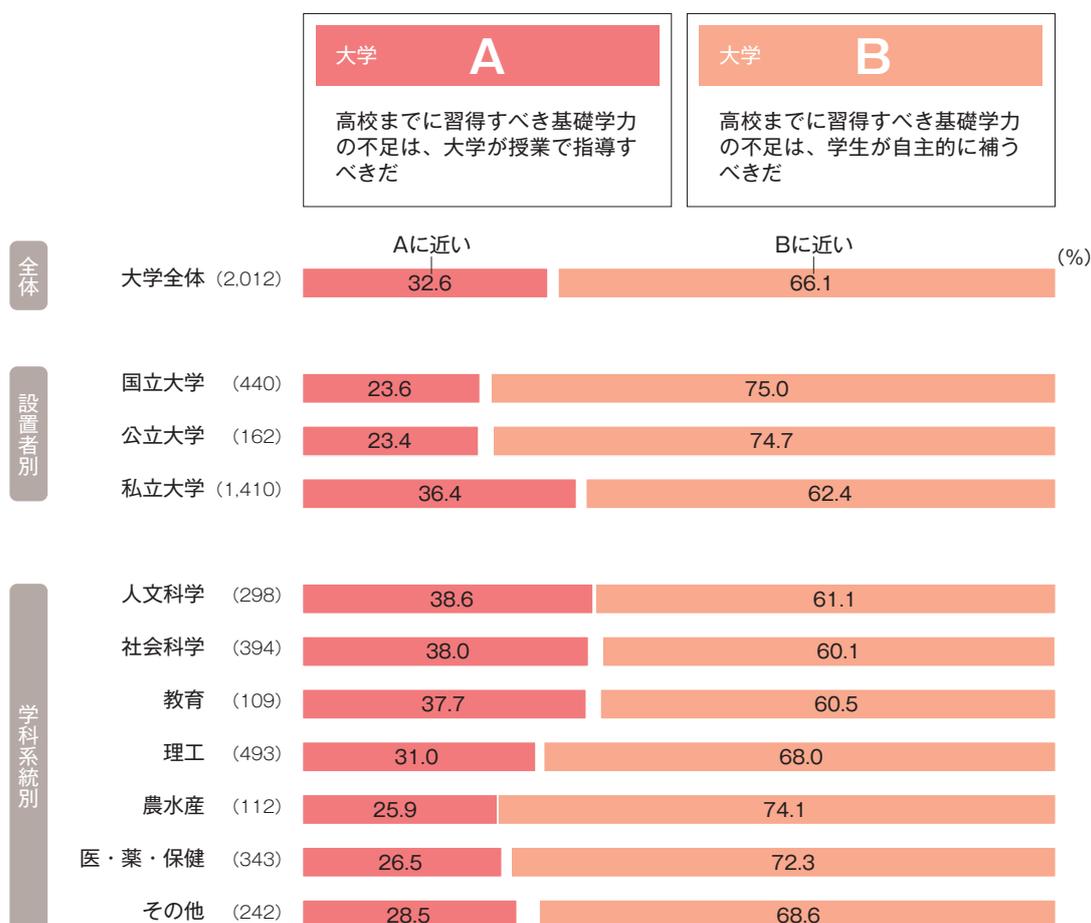
5-6. 基礎学力不足に対する大学での指導について

高校までの基礎学力の不足を大学の授業で指導すべきと考えているのは約3割。

高校までに習得すべき基礎学力の不足について、「A：大学が授業で指導すべき」なのか、「B：学生が自主的に補うべき」なのか、大学に対して意識をたずねた。結果は、「B：学生が自主的に補うべき」が66.1%、「A：大学が授業で指導すべき」が32.6%であった。これを属性別にみると、国公立大学では、「B：学生が自主的に補うべき」が7割台半ばに増える。学科系統別には理系の学科で「B：学生が自主的に補うべき」が多い。

Q あなたの意見はAとBのどちらに近いですか。

図5-9 基礎学力の不足に対する考え(全体・設置者別・学科系統別) **大学**



注 「Aに近い」は、「Aに近い」+「どちらかといえばAに近い」の%、「Bに近い」は、「Bに近い」+「どちらかといえばBに近い」の%を表す。

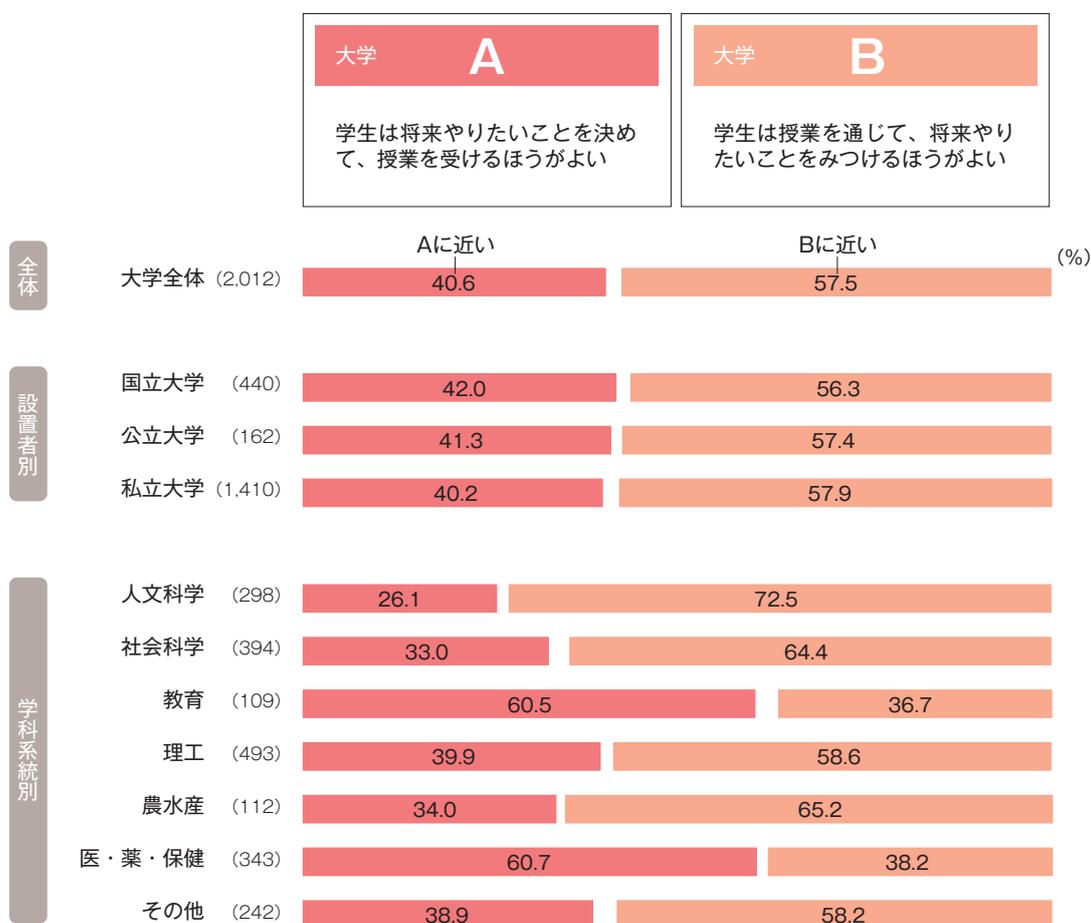
5-7. 大学での学びと将来展望について

学生は授業を通じて将来やりたいことをみつけるほうがよいと考える割合が6割。

学生は「A：将来やりたいことを決めて、授業を受けるほうがよい」のか「B：授業を通じて、将来やりたいことをみつけるほうがよい」のかについて大学にたずねた。全体としては、「B：授業を通じて、将来やりたいことをみつけるほうがよい」が57.5%で多い。しかしながら、属性別では、「教育」「医・薬・保健」といった専門職業人を育成する学科系統は「A：将来やりたいことを決めて、授業を受けるほうがよい」が高いが、それ以外の学科系統では「B：授業を通じて、将来やりたいことをみつけるほうがよい」がおよそ6割以上である。特に「人文科学」では72.5%と高い。

Q あなたの意見はAとBのどちらに近いですか。

図5-10 大学での学びと将来展望の有無に対する考え(全体・設置者別・学科系統別) **大学**



注 「Aに近い」は、「Aに近い」+「どちらかといえばAに近い」の%、「Bに近い」は、「Bに近い」+「どちらかといえばBに近い」の%を表す。

V

高校と大学の連携や接続のあり方

5-8. 大学入試や高校・大学の改革に対する賛否

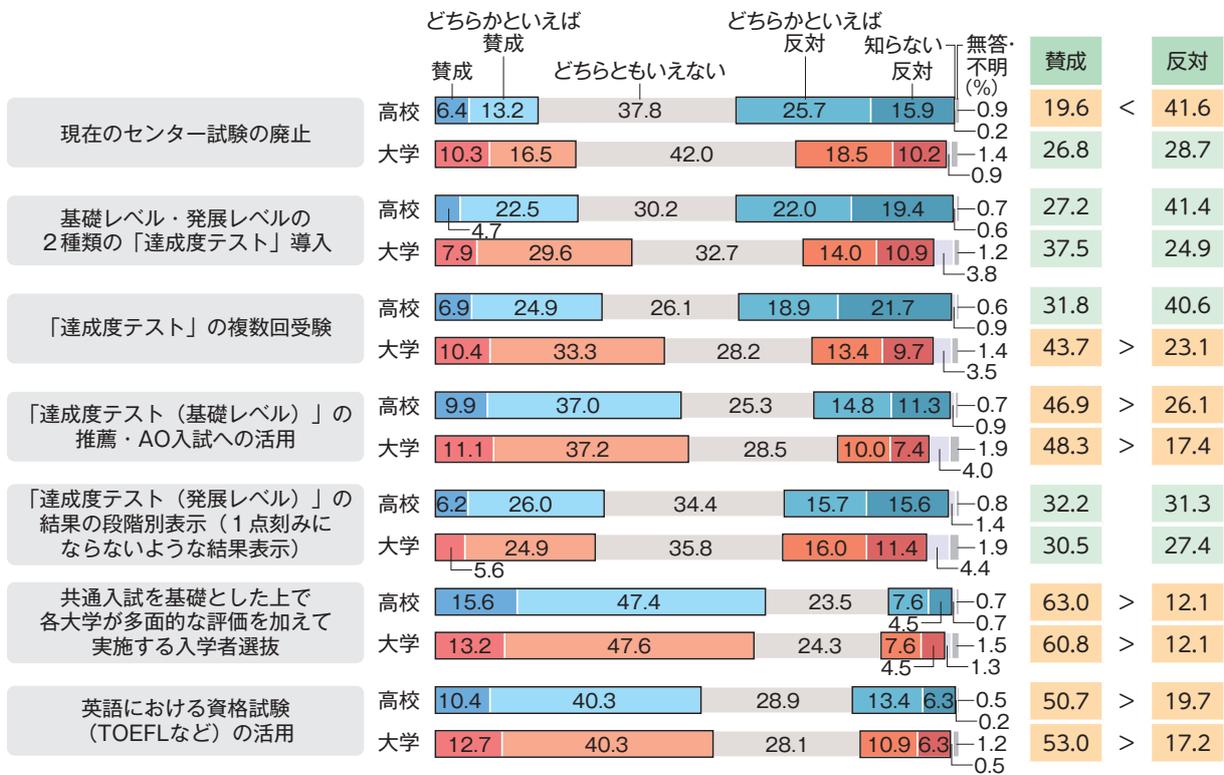
入試改革の方向性には賛成が多いが、「2種類のテストの導入」や「複数回受験」については高校で反対の方が多い。

現在の大学入試改革、高校や大学の改革についての賛否をたずねた。「共通入試を基礎とした上で各大学が多面的な評価を加えて実施する入学者選抜」は高校・大学ともに賛成(「賛成」+「どちらかといえば賛成」)が6割であった。しかしながら、「現在のセンター試験の廃止」や「基礎レベル・発展レベルの2種類の『達成度テスト』導入」「『達成度テスト』の複数回受験」については、高校で反対(「反対」+「どちらかといえば反対」)が4割と、賛成より多くなっている。また、「大学の機能別分化の促進」は賛成が高校45.7%、大学38.7%と、反対より多くなっている。

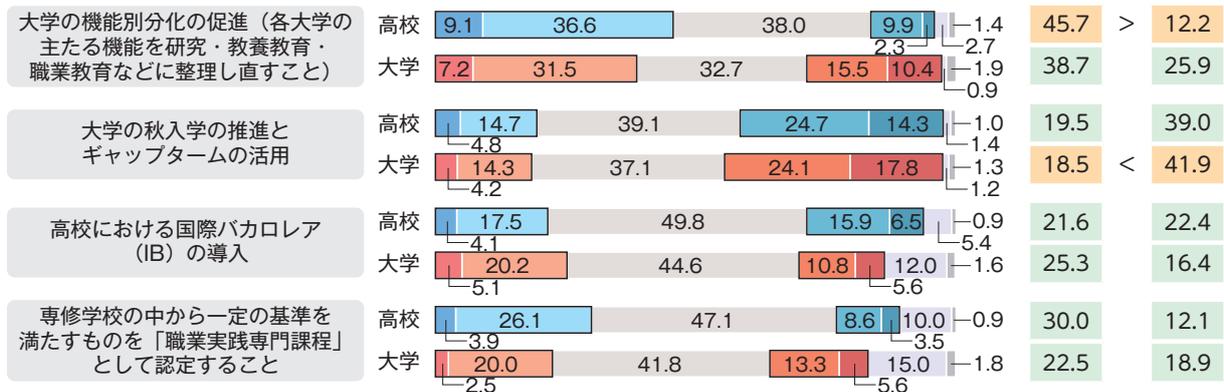
Q

あなたは、現在の改革で検討されている次のような取り組みについて、賛成ですか反対ですか。

図5-11 大学入試改革・高校や大学の改革についての賛否(全体) 高校 大学
 【『達成度テスト』や大学入試について】



【高校・大学の改革について】



注1) 右表の「賛成」は、「賛成」+「どちらかといえば賛成」の%、「反対」は、「反対」+「どちらかといえば反対」の%を表す。
 注2) 右表の「>」「<」と は、「賛成」と「反対」で20ポイント以上の差があることを表す。

調査企画・分析メンバー

川嶋 太津夫 (大阪大学 教授)

中村 高康 (東京大学 教授)

杉谷 祐美子 (青山学院大学 准教授)

大多和 直樹 (帝京大学 准教授)

木村 拓也 (九州大学 准教授)

樋口 健 (ベネッセ教育総合研究所 主任研究員)

吉本 真代 (ベネッセ教育総合研究所 研究員)

宮本 幸子 (ベネッセ教育総合研究所 研究員)

※所属・肩書は、調査企画・分析時のものです。